特233
46

356

更生政友會の展望

始

序

今度の政友會の分裂問題は、唯單に總裁の椅子を爭ふたと云ふやうな、そんな淺薄低劣なものではない。それは多年に亘る黨内イデオロギーの對立が、總裁の選定を契機として爆發したのである。卽これで黨内思想の分野は截然として二分した。それで自由主義を好み國際協調を立國の主眼とし、歐米に追隨して現狀維時を欲するものは鳩山氏に趨り、似ても似つかぬファッショ主義の久原氏をその黨首に仰ぐことになつたし、時代の轉換を認めて、全體主義的の基礎に立つ萬般の統制を必要とし、飽まで皇道日本の使命に從て興亞の聖業を完成すべく、世界の現狀を打破する爲、革新政策を樹立せねばならぬと決心するものは、中島氏を總裁と仰いで、その目的に一路邁進することになつたのである。

この全然正反對の思想の持主が、同一黨内に群居して、何時までも平和が保たれそうな筈がない。遂に究極して分裂したのは當然のことであつた。そうしてその分裂の道程に於て、或は戰ひ或は和せんとし、紛糾幾變轉して、遂に歸着

點に到達したのであるが、此間の經緯を目して世間は唯單に醜劣だとか、時局を辨へぬとか、勝手放題の盲評を試み、將來必然に國民の肩にかゝる問題の必然性を感知しないやうであり、而も其間爲にする處あつて曲歪宣傳する處に誤られて、事の眞相を全然誤解するものが多いから、この事實を闡明してその誤謬を正し、全國同志の參考に供せんとして本書を編述した次第である。

自分は曾て代議士に當選すること三回、議席を保つこと八年に及んだが、前年圖らず失脚して今形勢觀望の身である。顧みて二十年の政黨生活に於て、今回ほど根本的なる黨の動搖分裂を見たことなく、而も今回ほど有意義なる黨の革新的變化に逢ふたことが無い。政友會四十年の光輝ある歴史は決して汚されたのでなく、蔽ひかゝる浮雲を之に依て拂拭し、昭々たる天日を仰いで八紘一宇の大理想に向て邁進すべき素地はこゝに造られたのである。乃滿腔の喜びを以て之を小著の卷頭に題する所以である。

昭和十四年八月末日

著者

更生政友會の展望

目次

第一　政友會分裂の眞相……一
一、公正なる事實の記錄こそ正統と否とを截定する審判者
二、鈴木總裁の四代行委員指名は常議員會の依囑に依る
三、總裁選任の要望
鳩山氏の主唱に依り六月二十日の公選大會決す
四、公選大會の取消
鳩山派松野、砂田兩氏の和平運動に依り
五、總裁問題再燃す
鳩山氏今度は四代行の現狀維時を說く

六、久原氏慧星の如く現はる
鳩山氏に總裁を戰ひ取れと勸めて一轉調停と出る
七、三度目の總裁問題
幹事長詮衡で正面衝突
八、四月中に黨大會を開き總裁を公選せん
鳩山氏三轉して之を堤唱し四代行一致決定す
九、鳩山氏また大會中止と代行委員總辭職を提唱
外に二人副總裁案も出て皆一蹴せらる
十、總裁詮衡委員の選定（久原氏の提議）
申譯の詮衡委員會は熱意なくして流れた
十一、久原派は何故に出來たか——中島氏の心事
十二、鈴木病總裁に代行任免の奇手を打たす
名義だけの殘存總裁に寸毫の權限も無きに

十三、鈴木先生の爲に悲しむ
第二　革新同盟の結成……二九
政黨革新を以て革新國策の樹立—反鳩山と非自由主義
政友會革新同盟結成趣意書
同上規約
第三　政友會臨時大會（四月三十日）……三五
中島知久平氏を總裁に選定す
中島總裁就任の挨拶
中島總裁推薦贊否人名
第四　總裁問題の樂屋ばなし……四六
第五　久原中島兩陣營及中立の兩院議員……五一

第六　田邊幹事長提出の內務大臣其他への上申書……五五
第七　中島總裁の革新政策……五九
革新政策の解說
第八　政友會の主義政策要綱……七三
第九　中島總裁就任後の諸行事……七六
青壯年指導の政治講習會（中島總裁の訓示）
銃後經濟調査
日獨伊樞軸の問題。斷じて變更の要無し
望月、山崎兩長老等の合流復黨
總裁單一化は無意味で見込無し
元前代議士會久原派へ解消勸告
中島派の金光庸夫氏拓務大臣となる
久原氏の國民協議會案
第十　興亞國策研究會設立……八六
第十一　中島知久平氏は如何なる人物か……八八
一、その略歷と識見抱負。海軍を辭して飛行機會社を作るまで
二、世界一の大飛行機工場は日本に出來た
三、國策の爲に破產しても構はぬ
世界一の飛行機に世界一の軍人を乘せて（陸軍より表彰せられた滿蘇國境の成績）
四、獨身で借家の簡素な私生活
五、思ひ切つた大政務調査機關
第十二　諸氏の中島氏人物觀……九九

更正政友會の展望

第一　政友會分裂の眞相

公正なる事實の記錄こそ正統と否とを裁定する審判者

政友會が、過去二ケ年に亘る黨内の紛糾を續けた後、遂に分裂してしまつた。そうして別れた兩派が、互に自派の正統なることを强調し合ふて一歩も讓らない。同じ立憲政友會を名乘る政黨が二つも出來て、全國の黨員は今尙その正邪の判定に苦しみ、自らの歸趨に惑ふの有樣である。

然るに當事者に於ては、斯の如き醜態を曝露した責任を少しも自覺せず、罪を反對派に嫁することにのみ汲々として、あらゆる讒誣中傷を浴せかけたり、又自ら正當なりと稱し、少數を多數と僞り號して、必死の焦噪を續けて居るものがあるが、斯の如きことが果して同志の納得するところとなり、識者の首肯を估ひ、國民の信賴を贏ち得る基となるや否や。よく考へなければならぬ。

如何に妄誣を逞うしてもそれは自己陶醉以外何ものでもない。世間は冷靜であつて、たゞ事實をのみ受入れるのである一時の瞞着は必ず永久の不信を齎らす、反對派を讒謗するの愚は天に向つて唾すると一般、必ずその人の心事の陋劣なることを反證するの結果となることは言ふを俟たぬ。故に吾々は左樣なる愚に陷りたくない。吾々の期するところは、事實

をありのまゝに陳述することに依て、正邪の判斷を爲す人の參考に供することである。正當なる事實と冷靜なる理論と、實情に卽した進退行藏のみが、國民の信望を博する所以であり、之が正しき記述こそ唯一最後の審判者として、勝利の榮冠を授けるものたることを忘れてはならぬと思ふ。吾々はこの信念に基き以下公正なる事實の記錄を以て、之を全國同志に傳へ、兩派が國民審判の前に男らしく立たんことを要求するのである。

鈴木總裁辭職に際し
常議員會の依囑に依り
四代行委員を指名す

前總裁鈴木喜三郎氏は、昭和七年五月十五日、不慮の兇彈に殪れた犬養總裁の後を受けて、同五月二十日その職に就いたが、三百餘名の未曾有の多數を衆議院に於て受け繼ぎ、當然內閣組織を爲すべき立場に在りながら、時運非にしてこゝに至らず、歷代の政友會總裁中、唯一人の內閣首班たらざりし總裁として殘つたのである。

この未曾有の不運のデツドロツクに乘り上げた鈴木氏は、先年埼玉地方旅行の際腦溢血に倒れ、爾來中風症の爲心身の自由を失ひ乍ら總裁として其地位に在ること五年、遂に昭和十二年二月二十五日、病氣に堪へず辭職を申出でたのである。卽ち氏は辭職したけれども、直に內部より其職を襲ふ者が出來ないのみならず、黨外から入つてこの難局を擔當しやうと云ふ特志家も無いから、黨に於ては往年西園寺總裁が、所謂違勅の責を負ふて京都に引退し、その後任が出來なかつた時、公に請ふて總裁の名義だけを存置して貰ひ、松田正久、原敬の二長老をして、總務委員として總裁の實權を行使せしめた例に倣ひ、四人の代行委員を擧げて總裁に代らしめたのである。卽ち鳩山一郎、前田米藏、島田俊雄、中島知久平の四氏がこれである。乃ち總裁の名義を單に形式的に存置し、徐ろに後繼者を物色すると云ふ建前を執つたもので、從つてその代行委員なるものは、總裁在任を前提とした代理機關ではなくして、總裁缺員を前提とする黨の臨時機關である。卽ち代行委員は總裁其ものに外ならぬから、之を選任することは、總裁同樣、黨大會に於て爲すを至當とするけれども、當時は議會開會中でもあり且又急速を要するから、大會に代はるべき常議員會に於て總裁の指名に一任する事を決議し時の安藤幹事長をして、鈴木總裁の指名を請はしめた結果が、右の四代行委員となつたのである。だから鈴木氏の指名は總裁としての當然の權限で行つたものでなく、黨機關の依頼に依つて之を爲したものであり、又鈴木總裁は之を爲すと同時に、事實上其職を退いたものであることは、當時は全黨一人も之を疑ふ者なき明白の事實であつた卽鈴木總裁に指名を常議員會の決議で一任したのは去り行く總裁に最後の名譽を與へたものにすぎないから。指名せられた代行委員に就ては、幹事長は之を黨の各機關に報告して承認を得、後黨の大會にも提出して承認するところとなつたのである。そうして總裁の實權を掌握した四代行は、同時にまたその責任を負ふて、一切の黨務を處理して居つたのである。

卽ち斯の如き明白なる事理で、當時は問題にもならなかつたことが、今日では卒然としてその當否を爭はれる根本問題となつたと云ふことは、實に政黨のだらしなさを物語る證據であつて、若し此が官廳であるとか殊に軍部であるとかすれば、一事一物明確なる記錄を存して、權限の限界を明かにして居るし、又爭ひが起れば法律又は相當の機關に依つて之を裁定するから、總裁が事實上其職を辭めたか、尙其權限を有つて居るかと云ふやうな、根本的の疑問を生ずる恐れはないが政黨は常に此處置を怠るから後日兎角爭ひを起し易く、僅かな形式でも殘つて居ると、三百的の言辭を弄しそれを惡用して自我を通そうと云ふ馬鹿氣た事をするのである。而もかゝるだらしなさは、ひとり政友會のみならず、其他の黨派も同樣である。だから政黨今日の急務は、事務を明かにすることである。卽ち今日よりも更に詳細なる會則、容易に變更し難き嚴然たる黨の憲法を作り、黨內勢力抗爭の外に超然たる事務局を確立して、黨員の活動を規束し

て、幹部と雖も事務局長の正しき裁定には服せざるべからざる規律を確立することである。否らざれば政黨は何時までも梁山伯の集團と爲り、以前の支那の督軍時代の如く、强い者が我を通し、辭した筈の總裁を昇いで、無い處の權力を揮はしめるやうな奇怪事まで生じ、悉く信を國民に失するやうになるのである。

總裁選任の要望

鳩山代行委員の主唱に依り六月二十日の公選大會決す

右の次第であるから、總裁の名があつて實が無い。これでは非常時局下の今日に於て、殊に黨の活動上不都合である、一日も早く後任總裁を選定しなければならぬ、との要望が次第に熾烈になつて來た。四人の代行委員も素より異議はないけれども、事實如何ともする能はずとて、其日々々を送つて居たが、遂に昨十三年五月、議會閉會後の、全國支部長會議に於て、この要望が表面化し、その席上に於て『速に黨大會を開いて總裁を決定すべし』との議が、滿場一致可決せられた。又之れと前後して顧問會並に總務委員會に於ても總裁決定を要望する意思表示があつたのである。卽ち斯の如く、黨の重要機關が公然かゝる決定を爲す以上は、黨情に囚はれてこの上これを遷延することが出來ないから、度々代行委員會を開いて協議をなし遂に六月一日三緣亭に於ける其會に於て

一、速に總裁を決定すること

一、總裁は黨內より選ぶこと

一、總裁は代行委員のうちより選ぶこと

と云ふ申合せを、滿場一致決定した。そこで島田委員は起つて

此際中島知久平君を總裁に推すことが適當と思ふが如何

と提議した。これに對して前田委員は、至極結構なりと卽座に贊成の意を表明したが、中島委員は

自分は自ら進んで總裁たらんことを希望するものではないが、黨情最早この上の放置を許さず、他に總裁たらんとする人が無ければ、自分に於て一ヶ年位ならやつてもよい。

と答へたのである。然るにこれに對して鳩山委員は

自分は此處で少數の者が、總裁を內定することは、よろしくないと思ふ。總裁の選定は會則に依り公選でやるのが至當と信ずるから、今の提議に對しては卽答出來ない。明日の代行委員會で返答する。

と述べたのである。

かく敢然と公選を主張した鳩山氏は、翌二日の朝、中島知久平氏を牛込加賀町の邸に訪問して

自分は昨日の代行委員會に於て、總裁は公選すべきものだとの信念を述べて、島田君の貴下推薦に同意しなかつたが、熟考の結果、矢張自說は正しいものと確信するから、この主張を飜へすことは出來ない。依つて本日の委員會で、その旨を回答する積りであるが、それに先立つて、貴下とは多年懇親の間柄であるから、德義上前以てその旨をお傳へする爲に參つた。以上意見が合はねば、正々堂々と戰ふより外はない。

と端的に中島氏の面前へ匕首を突きつけたのである。これに對して中島氏は

貴下の御趣旨はよく之を諒承した。併し自分の見る處では、今日黨內の情勢に於て、總裁を公選することは、黨の混亂を招く惧れがあるから再考せられてはどうか。又貴下が總裁になることは頗る無理があると思ふから、今二三年隱忍して、他日の機會を待たれたらどうか、自分は衷心これを希望する。

と答へたのである。言葉は柔かいが決して苟合雷同しないといふ決意を含んで居る。卽ち兩雄意見の對立は茲に起つた。

しかし中島氏はつとめて鳩山氏を柔らげ、事を圓滿に處理したいと思ふたものと見え、それから一時間もかゝつて縱橫利害を述べ、鳩山氏を說得しやうと試みたけれども、決戰に自信を抱いて居つた鳩山氏は、斷乎として之を肯かず、颯爽として代行委員會に臨み、强く公選論を主張した。これに對して他の三委員は

今日の黨內對立情勢に於て、公選を行ふことは、紛糾を一層甚しくし、黨の結束を鞏固にする爲と云ふ、總裁急設の趣旨に反するから、矢張幹部で練つて候補者の單一化を圖り、圓滿に問題を解決したらどうか。と勸說したけれども、鳩山委員は堅く自說を執つて、これに耳を假さなかつた。

それで、いよ〳〵公選か否か、最後の決定を爲すの必要に迫られ、その爲第五次の代行委員會が、六月四日三緣亭に開かれたのである。その時形勢を案じて別室に控へて居た六人の長老達（久原、三土、芳澤、川村、堀切、濱田）に對して島田委員から今日までの經過を報告したが、長老からは代行委員會が決定する以前に、その內容を示されたいと希望したので、委員會はこれを容れて會議を開いたが、鳩山委員は尙一歩もその主張を枉げなかつた爲、會議は遂に公選を執るの外無しと云ふことになり

一、會則第二條第二項に依り、總裁選擧の爲臨時大會を開く事

一、右は本部各機關に諮り實行する事

の二項を申合はし、之を長老に內示した處、長老等は飽まで圓滿解決を圖るの希望から、決戰投票を避けしめねばならぬと考へ、四代行の決定せんとせらるゝ趣旨は之を容認するも、更にこの二項の外に

一、總裁選擧に就ては、黨內和平の爲、各機關の協力を求め、候補者の單一化を圖ること

の一項を追加決定せられたしと進言した。それで委員會はこれを容れて、併せて右三項目として發表し、その取扱方は總務始め各執行機關に移すことに決定したのである。

そこで翌六月五日、總務會が開かれ滿場一致

一、總裁公選の爲、臨時黨大會を六月二十日午後二時本部に開くこと

一、同二十日午前常議員會を開くこと

の二項を決定し、茲にいよ〳〵一年間の紛紜を淸算し、總裁公選を行ふことゝなり、黨の內外耳目を聳てゝ、その成行を凝視したのである。

公選大會の取消

松野砂田兩氏の和平運動

此が却て兩派抗爭激化の素地を作る

愈々公選大會の日取が發表せられると、鳩山派と中島派との對立は、その目標を公選に依て雌雄を決することの一點に置き、それで總裁が決定すれば、どちらが勝たうとも、黨內の紛擾は一先治まるかと思はれたのであるが、併しその爲に長老らが心配して進言し附加せられた『總裁候補の單一化を圖ること』と云ふ第三項は、その實現頗る覺束なきものとなつてしまつたのである。

此時黨內の形勢如何と見ると、始め鳩山氏が公選論を强調したのは、自分は無論壓倒的多數を以て、總裁に當選すると自信したからであつて、何人の忠告も耳には入らなかつたのである。又鳩山陣營の謀議では、中島は追々黨內に勢力を增して來たから、今の內にやつ付けて置かねば、も少しすると手におへぬやうになると認定したなど傳へられた。然るに形

勢はそれよりも早く已に轉換して居つたのである。卽ちいよ〳〵雙方が立上つて、同志の勢揃ひをやり始めると優勢なりと、考へて居つた鳩山派は、目算全く外れて極めて不安なる狀態に彷徨して居ることが分つて來た。此形勢を逸早く看取したのは、同派の智謀松野鶴平氏であつた。

それで氏は働き手の幹事長砂田重政氏を動かして、和平運動を起し始めたのである。

乃ち、砂田幹事長の要求に依つて、六月十一日に臨時代行委員會が開かれ、其席上氏は

此問題に就て黨內の事情や、各地支部の情勢を考へて見ると、このまゝ決戰投票を行ふ時は、非常なる紛擾を起し、黨の分裂を來す恐れなしとしない。故に黨諸機關で解決の途を見出し得ないなら、代行委員は速かに責任を以て、別に圓滿解決の途を講ぜられたい。

と强硬なる提言をした。是に對して中島氏は

それだから自分は始めから公選はいかぬと考へて、圓滿解決を希望したのである。併し今日となつては、最早如何とも出來ない情勢になつたではないか。

と答へた。併しそれでも砂田幹事長は必死の努力を續け、六月十二日に鳩山派及中島派の幹部を訪ねて、公選中止を力說したのみならず、事件以來久しく圈外に在つて靜觀して居つた小川平吉氏を動かして、鳩山派の松野鶴平氏や、代行委員の島田俊雄氏等を說いて、和平解決に盡力せしめたので、形勢は次第に緩和し始めた。そこで六月十三日代行委員會を開き、四代行の外に松野鶴平氏も加はつて、十一時間の長談義を行ひ、その結果島田代行より

黨內の情勢に鑑み、公選を中止して、和協の途を講じたい。

との提議を爲したところ、鳩山氏は依然强腰を示し

自分は黨人として、公選が最善の方法であると信じ、之を主張したのである。公選を行ひ得ないやうならば、公黨としての面目はない。

と頑張つたが、併しそれは最早休戰を見越しての言ひがゝりの主張でしかなかつたやうで『黨內の情勢に鑑みて再考せられたい』と松野氏が說得するに及んで、同氏の態度は一變し

黨內の空氣が非公選に傾き、然るべき和協案が出來ることなら、自分も考慮してよい。

と折れたので、遂に六月二十日の臨時黨大會は、之を取止めることになり、兩派の和平方法を考へ、黨內の圓滿結束を工夫しやうと云ふことになつたのである。乍併、それは眞に釋然たる和解ではないから、兩派の對峙は少しも緩和せず、折角の松野砂田兩氏が鳩山氏の窮境を救ひ、黨の圓滿を企圖した苦衷は、却つて倍々反對の作用を起し、兩派共に結束を固うして、次の對戰に向つて驀進すべき準備の餘地を與へる結果となつたのである。

果然問題再燃す

鳩山氏今度は四代行制度の現狀維持を說く

松野砂田諸氏の必死の努力に依つて、一先づ彌縫的の和平は出來かけた。併しながら、それは衷心の和協でなく、黨內の眞の空氣を代表したものでないから駄目である。だから六月十四日に大會中止の代行委員會の決定が發表せられると、その日から兩派は第二の決戰を目して暗躍し始めた。智謀の兩氏に依つて遮二無二堰き止められた大會であるけれども、そのことの爲に鳩山派の內兇は、はつきりと中島氏推薦派の爲に見透かされたのである。乃ち同派の勇士の面々の眉宇の間には、今度こそは一擧に對手を叩き付けて、革新政策の黨是を確立しやうとの決意が、あり〳〵と讀まれたのである。

卽ち六月二十日の大會中止が決定せられてから、半年も經たぬ內に十月二十五日には、全國の有志支部長大會が東京で

催され、その内の實行委員十二名は、木下成太郎、堀切善兵衛氏を先頭として。十月十三日、芝三緣亭で鳩山、前田、島田、中島の四代行委員と會見し

來る十一月十日までに總裁を設けられんことを要望する

と短兵急に迫つたのである。茲に問題は再燃した。是に對して島田委員は

御趣旨は之を諒とした、それに添ふやうに努力する。

と答へ、他の三代行も之を默認したから、右有志は更に總務會に對しても同樣の希望を開陳したのである。その結果十一月四日になつて代行委員會が開かれ、六月十四日中止決定以來、茲に再び總裁問題を公然議することゝなつた。而して其席上砂田幹事長より、和協に關する意見の開陳あり、鳩山氏も亦當初自分の提唱した公選論を一擲して、現狀維持の四代行繼續論を主張したのである。卽ち氏は

自分はこの際總裁たらんことを希望し固執する考へは毛頭ない。しかし黨内の情勢から見て、中島氏を總裁とすることも亦妥當でないと信ずるから、結局今暫く現狀を維持し、四代行制度を繼續して行き度い。

と述べたが、他の三代行は默して答へず、事をこゝまで激化さして置いて、自分の都合が惡くなると一轉して現狀維持などを圖つても、それは餘りに身勝手である、と云ふやうな顏をした。それでなければ、鳩山氏の折角の提議に對して、一言も答へないと云ふことは、不可解の態度と云ふ外はない。

一方十一月二十六日に開かれた總務委員會にての意見の一致點は

總裁の急設は何人も之を希望する。併しそれには候補者の單一化こそ先決喫緊の問題であり、將來に於ける黨の統一强化の必須條件でなければならぬ。故に若し之を爲し得ないならば、別に全然變つた方面に總裁を求め、新しき方法を以て、一日も早く黨内の和平統一を圖らねばならぬ。卽ちその爲には、各總務それ〴〵懇意な代行委員を訪ふて懇談を遂げ、問題解決に努力しやうと云ふに在つた。

總務會の中合はしたことは、素より愛黨の至誠に出で、何人も異議のあらふ筈はないけれども、其希望する候補者の單一化や、總裁を黨外に求めることや、または代行を說得してその實現に努力すると云ふやうなことは、寸毫も行はれない難點を列擧しただけであつて、問題の解決には一歩も前進した措置でないことは明瞭なる事實である。

斯の如く代行も、長老も、總務も、三方三すくみの狀態に陷つた時を見澄して、突如として現はれ、奇手を打つたものは久原房之助氏であつた。

久原氏慧星の如く出現

鳩山氏に總裁を戰ひ取れと勸めて『斷念』の言質を取り然る後一轉『調停』と出る

二・二六事件に座して十ケ月の永き幽囚の憂目を見、出所して一億圓の破産申請を受けたのに對する强制和議を行ふなど、容易ならぬ苦難を滿喫して、久しく政界に消息を絕つた久原氏は、此時永い間の蟄居から、突如として表面に躍り出でたのである。世間から、或は怪物と言ひ、或は無軌道と言はれ、何をし出すか分らぬと危險がられて居る人だけに、その突然の出廬は、異常なるセンセーションを黨内に與へ、兩派の全神經は、氏の行動に向て集中したのは言ふまでもない。

氏は十一月二十九日、突如として小石川音羽町高臺の鳩山邸を訪れた。鳩山氏は眞に意外であつたに相違ない。久原氏は端的に言葉を切つて

君は傳へられる處に依ると、始めは總裁を望んで强硬に中島派に立向ひ、此頃は又折れて總裁を斷念したと云ふが本

當か。

と訊ねた。すると鳩山氏は不意を突かれて用心の腹を撫でたことであらふ。

現下黨内の情勢を見れば、自分が爭ふて總裁を取らんとすることは宜しくない。寧ろ自分は退いて事態の推移を靜觀するのが黨の爲にも自分の爲にも善いと考へて居る。

と答へたのである。すると久原氏は疊みかけて

現下の黨情なればこそ、君が總裁を斷念するのが善くないのである。若君が總裁を戰ひ取るの決心をするならば、自分は全力を擧げて君を支援し、必ず君を總裁たらしめる確信があるが、どうだ決心しないか。

と迫つた。併し鳩山氏としては、事の餘りに意外なるに驚き、且つ平素犬猿も啻ならぬ久原氏が、突然かゝる申出をしたのに、故無くんばあらずと考へたでもあらふし、又久原氏が保證したからとて、總裁が自分に來ると思ふほどお人善しでもないから

自分はどうしても總裁を爭ふてまで取るの意思はない。

とをぞに遁げたのである。この一幕の接衝を見たゞけで、鳩山氏が大望を抱いて居る割合に腰の弱い、根强いところのない貴族的の氣質がほの見えるのに反して、久原氏の辛辣怪奇、人の意表に出で、その虛を衝いて何物かを攫むと云ふ天才的辣腕、多年日立鑛山で困苦艱難の裡に鍛へ上げた度胸と、明治初頭の怪傑商人藤田傳三郎を伯父にもつ、血統的の豪怪さが窺はれるのである。

かくの如くにして鳩山氏の總裁斷念の言質を取つた久原氏は、更に各方面の長老を訪ね、また黨の各機關に渡りをつけて、氏獨特の『調停工作』なるものを始めたのである。此時の久原氏の腹は、鳩山氏に總裁奪取を勸めることに依て其『斷念』の言質を取つて置いて、一轉して中島氏を總裁にする考へであつたと言ふ者もあるけれども、機略縱橫の久原氏

のことであるから何人も本當の心中を計りかね、ハテ面妖なと怪訝の眼を睜るばかりで、蹶然起てこの勢力を利用して局面の打開を圖る如き芝居を打つ豪傑もなく、唯ひそかに、それは久原自身が總裁の野心を起したのだろうと云ふやうな、偶語を爲す者がある位で、何れも鳩山氏同樣一種危惧のの念に驅られ、素直に之を受け入れる者なく、却て一方鳩山中島兩派の對立は、激化して行くばかりで昭和十三年は暮れて行つたが、結局申合せに依て、第七十四議會中は總裁問題には觸れぬこととなり、一先幕を下ろしたのである。

三度目の總裁問題

幹事長詮衡で正面衝突して進まず

金光庸夫氏と岡田忠彦氏の對立

議會終了と共に議員總會を開いて、本部役員を改選するのが毎年の例であるから、七十四議會が三月二十五日に終了するので、それに先立つて二十一日に代行委員會を開き、先づ黨の重要機關たる幹事長を詮衡した。これは從來殆んど鳩山派の獨占であつて、近く數代のそれを見ても、松野、山口、若宮、安藤、諸氏の如き、悉く鳩山直參の人々で、唯砂田氏一人だけは直參ではなく、鳩山氏と諒解が成て幹事長に就任したのである。而してこれらの人々はみな黨内優秀の人物で、決して其重き使命を辱めるやうなことはなかつたけれども、しかしこれを同派以外から見ると、隨分偏頗橫暴の措置と見られ、こゝに期せずして反鳩山の空氣が醞釀せられたのは、止むを得ない仕儀であつた。

鳩山派以外にも人材は雲の如くであつた。苟くも頂天立地、自己の實力を以て政界に雄飛せんとするほどの者は、膝を屈して鳩山氏に追隨することを潔しとしない。鳩山が閥を作るなら俺も乾兒を養ふと、みな大なり小なり味方を作つたの

である。その最も大なるものは床次氏、之に次ぐものは久原氏であつて、閥を作らずとも敢て鳩山氏に屈せざるものは、三土、前田、島田、川村、宮田、小久保、堀切、木下、秋田、山崎、望月の諸氏、其他にも澤山あつた。故森恪氏の如きも、始めは鳩山氏と兄弟分の間柄であつたけれ共、晩年には時局に對する意見の相違より背仲合せとなつて居り、而も其周圍には闘志滿々たる豪傑等が集まつて居た。卽以上は皆大部分反鳩山の意嚮を有つて居る長老達であつて、これをめぐる少壯の人々らは、何時かは蹶起してその欝屈を伸べやうと考へて居つた者が多く、それが中島氏と云ふ大物が次第に擡頭して來たのに連れて、自然にその傘下に集まつたのである。

而も中島氏自身は寧ろ鳩山氏とは懇親の間柄であつて、これまで隨分政治資金を供與して之を助けたことは漠大なるものであるらしく、氏自身は一切之を口にしない人であるけれども、却て鳩山氏より時々これが側近に漏れて全黨に傳はり、今日では何人もこれを知らぬものなき事實となつて居るのである。だから中島氏は鳩山打倒など云ふことを口にする人物でもなく、又計畫などする間柄でもないけれども、その傘下に集まつて行つた人々は、黨内を刷新して時代に照應すべく黨の更生を圖ることは、先づ鳩山の專横を打破することであると云ふことに於て一致し、この共同の目的を達成するが爲に、次第に結合し强化せられたものが、後に革新同盟となつて全黨を風靡し、鳩山打倒の對象として中島を舁ぐに至つたのである。だから中島派と云ふけれども、中島氏自身は別に派閥を作つた譯でなく、反鳩山の集團を中島派と第三者が稱するだけである。

斯の如き情勢が全盛を誇る鳩山氏の周邊に醞釀しつゝあつたことは、素より總明なる鳩山氏やその參謀達の知らぬ筈なきところであるけれども『ナニ政黨は數の爭ひだ、少數者がいくら騒いたつて憂ふるに足らぬ』と云ふ元氣のよい主張が、常に鳩山氏を動かし勝ちであつた。その證據には鳩山派が推擧し强行した處の幹事長始め各種の役員や委員の詮衡でも、その思ふがまゝに切盛せられて寸地を餘さず、その鼻息を窺はねば議會の豫算委員に一つなれずして、何年經つても隅の方に小さくなつて居らねばならぬ仕儀であつたのである。知謀の人々がこれ位のことに氣が付かぬ筈はないけれども、勢ひに制せられ又當座の必要に迫られて、常に力に任せてその不公平を押切つたのである。

榮根譚の講釋をするではないが、故高橋總裁の愛誦せられた句とか云ふ『徑路窄處、留一步與人行、滋味濃的、減三分讓人嗜、此是涉世一極安樂法』と云ふ餘裕は鳩山氏及その一派には無かつたのであらうか。

それで鳩山派のこの獨占を打破することが、眞に黨の圓滿なる結合と黨勢の强化を圖る所以であつて、又鳩山氏自身の將來の大成を期せしむる途であると三人の代行委員は考へたらしく、今度幹事長の詮衡に當つては

穩健なる金光庸夫氏を幹事長に据え、氏の衆議院副議長の後釜には、鳩山直參の人格者安藤正純氏を推薦すること。を提議した。これは充分公平な行方であつて、從來個人的にも金光氏に負ふところ頗る多い鳩山氏は之を承諾し、更に一應同志にも諮ると云ひ、其日は一旦別れたが、幹事長を毎期自派に獨占することを生命とする同派の謀議は、之を容れなかつた爲に、氏は翌日の代行委員會に於て前言を翻し、更めて自家直參の岡田忠彦氏を幹事長として持出したが、それには他の三代行が同意する筈なく、遂に黨役員の詮衡は、その劈頭に於て行詰まつてしまつたのである。

四月中に黨大會を開き總裁を決定ぜん

鳩山氏三轉して之を提唱し四代行一致決定す

そこで鳩山委員は三轉して、黨役員の選定は、總裁がきまつてから爲すべきもので、總裁の決定こそ先決問題であると云ひ、更めて

四月中に黨大會を開いて、一擧に總裁を決定しよう

と提議した。これで主張の三轉であるが、氏を背後より操つる者の在ることを知るべきである。併し四十日を限つて、一舉に總裁問題を解決しようと云ふのであるが、果してそれが單一候補者に妥協出來るかどうか。若し出來ねば決戰の一途あるのみである。知らず鳩山氏は、二年間揉みに揉んできまらず、兩派の間溝渠の深さ千尺の今日、何の妙計かあつて單日月に此を埋め、兩派が合流融合爲し得ると信ずるのであらうか。若し妥協成らずとせば、自ら陣頭に立て潔よく雌雄を決し、倒れて後止むの決心がなければならぬ。まさか輕々しく四十日を限つて置いて、また再び之を揉み消すやうな、そんな度々黨を弄ぶ惡戲もするまいと、三人の代行委員はその强硬なる提議を容れて、遂に左の申合せを爲したのである。

四代行決定文書

一、來ル四月中ニ臨時大會ヲ召集シ總裁問題ヲ解決スルコト

一、臨時大會終了マデ現本部役員ハ其儘留任スルコト

右三月二十二日總裁代行委員會ニ於テ決定

鳩山、前田、島田、中島、四代行委員花押

卽ち牌子は投げられた。いよ〳〵是が非でも四十日を限つて、總裁を選定しなければならぬ最高方針は定まつたのである。そこで代行委員はこの決定事項の實施に關して、黨の各機關の意見を徵した。總裁候補の單一化か、二候補の決戰投票か、それとも亦他に適當なる候補者を物色するか、何れか名案あらば答申せよと要望したのである。かゝる諮問の無理なることは言ふを待たない。その無理を知て之を諮ふ。代行委員の行詰りは卽ち黨機關全部の行詰りであるが、其行詰りを知つて四十日を限つたのである。だから何れの機關よりも具體案の出る筈はなく、最早四月の末日までに剩すところ旬餘、事務的に見て大會招集の手續を執らねば、その開催は不可能の場合に立至つたのである。

一方この大會を開催すべからずとする砂田幹事長は、各方面を訪ふてその不可なる所以を力說し、それに促されて長老會、總務會、幹事會など、度々集まつて共議を練つたけれども、大會を廢して之に代るべき代案は一つも出で來らず、又四月中大會の發議者たる鳩山氏も、唯議を練り直せと言つて日を延ばすだけで、代るべき何等具體的の方策を提供する能はず、代行委員會の決定は依然として存し、黨則は當然其執行を當該機關に命じ、時日は白駒の際を過ぐるが如く『四月末日』に向て急速に進行したのである。

乃ち執行機關たる總務會に於ては、筆頭總務堀切善兵衞及び原惣兵衞二氏を以て、代行委員會の事務を擔當する島田委員を訪はしめ、其決定を執行することは委員會の命令かと訊ねしめたところ、島田委員は、『命令も何もない、決定した事項を實行するのが執行機關たる總務の役目でないか。つまり決定そのことが命令である、故に此決定が取消されざる以上は、總務は當然之を執行するの責任がある。これが會則の命ずる處だ』と說明した。

それで堀切氏等は之を諒承して辭去し、直に緊急總務會を開いて之を告げたのである。之に對して鳩山派の岡田氏等一二の總務から、四月中に大會を開くことに、反對の意見が出たけれども、堀切座長は、代行委員會の決定は總裁の命令と同じく絕對的であり、總務會が之に對して異議を云ふの權能はない。總務會はたゞ其命に從て之を執行するの義務あるのみであると宣して會を閉ぢ、庶務擔當の總務に依囑して、直に大會開催の手續を執らしめたのである。

砂田幹事長は之に對して大に異議を唱へたけれども、代行委員會の決定に對して、幹事長が異議を挾む限りに非ずとして、大會開催の手續はダン〳〵進められた。

茲に一言しをくべき事は砂田氏の此間に於ける態度である。

蓋し砂田氏は三月二十二日の代行委員會に於て、四月二十日の總裁公選大會のことが決定せらるゝや、今日の情勢に於

て大會開催のことは引受けられずとて、斷乎たる態度を以て幹事長の辭意を表明し、總務會及議會後の議員總會に於ても辭職の挨拶を爲し、又幹事長として預つて居た黨の資金は、之を自分の小切手に代えて島田代行委員に引繼ぎ兩氏立會の上にて、之を窪寺會計主任に引渡したる位なるに、爾後一ヶ月依然として此紛爭に幹事長として介入し、四月二十四日には總務會の大會招集に反對して、勝手に取消の通電を全國支部に發し、二十九日には幹事長名を以て翌日の大會無効の宣言書を發するなど、全く諒解し難き不合理の行動なりとて革新派は之を非難した。

鳩山氏またもや
大會中止と代行委員總辭職を提議
外に二人副總裁案も出て皆一蹴せらる

斯の如くにして最早大會開催の手續を運ぶの外無き時期に切迫した時、四月十四日の代行委員會に於て、鳩山委員は突如として

かゝる情勢では大會開催は不可能であるから、之を中止せねばならぬ。そうして代行委員は、この際黨内紛擾の責を負ふて總辭職すべきである。

と言ひ出したが氏の態度はこれで四轉したのである。之に對して島田委員は

この場に及んで、何の代案もないのに、決定事項の取消など云ふことは何事であるか。君が從來何回も自說を變更せられるから、左樣のことなきやう、今度は四人がちやんと自署花押までした決定事項記載の文書を作つてあるではないか

又四月中大會開催の發議者たる君が、謂れなく中止を提議しても、後の始末は如何樣にせんとせらるゝのであるか。殊にこの紛擾を見捨てゝ、代行委員の總辭職を提議するが如きは、政治家の責任として如何であるか、自分は假令一人となつても踏み止まり、次の總裁が出來るまで其職責を盡す決心である。

と反駁したのである。鳩山氏は其後四月二十六日の代行委員及善後對策委員會同の席上に於て、島田氏が四代行一致で決定事項の命令を發すべきに、單獨にて堀切總務に命令したことは、越權であると云ひ、又圓滿に協議を續けて來た僕に對して、多年の友誼を裏切るものであると言つたが、島田氏の之に對する理由は前記の通りであつて、殊に自分が命令せずとも代行委員會の決定は、それが變更せられざる以上當然その期限内に執行機關たる總務に依て實行せらるべきものであると答へたが、その理論に對しては、双向ふべき何等の理屈もなく、從て決定事項の當然の結果として開かれた四月三十日の大會は、之を會則に照らして、合理的のものたること疑ひを容れずと云ふ結論に達するのである。

斯くして問題はいよ〳〵行詰つた。蓋し窮すれば通ずと云ふが、これは又窮してます〳〵迷妄するものに二人副總裁案なるものが出來た。革新派が結束を堅固にして一路邁進するに反し、鳩山派は事々に主張を變へ、しどろもどろの足並みとなつて來たから、窮餘の策としてこゝに此方法が案出せられたのである。

卽ち四月二十日星ヶ岡茶寮で代行委員會を開き、副總裁に擬せらるゝ鳩山中島兩氏は、別室で懇談を爲せと云ふことになつた。そこで鳩山氏はこの案を受諾すべき態度を見せたが、中島氏はこれを肯んじない『二人の副總裁を置くと云ふことは、現在四人の代行委員が總裁の實務を執つて居るのを、その内二人だけ罷免すると云ふことである』と述べて遂に之を受諾せず、此案も亦あへなく流れてしまつたのである。

總裁詮衡委員の選定（久原氏の提議）

申譯の詮衡委員會は熱意なくして流れた

鳩山氏の四代行現狀維持論は、吾身勝手の猾策として默殺せられ、代て出た二人副總裁案は窮餘の愚策として一蹴せられた。そこでいよ〳〵大會を三日の後に控へて最後の代行委員會が開かれたのである。共時總務會からは、松野、大口、砂田三氏を委員に擧げて之に列せしめ、妥協策を講じたが、局面は少しも展開せず、何れも皆匙を投げてしまつた。そこでその夜午前一時半に至つて、島田氏は久原氏を芝白金の邸に訪問し、その意見を求めたところ、久原氏は

代行と三委員とで、何時までも協議を續けて居ることが無意味ではないか。それよりも早く少數の詮衡委員を擧げて無條件に一任してはどうか。それもいかぬ、飽まで力で押切ると云ふのなら、自分も力でこれを破壞する決心である、速に歸て夜明けまでに其積りで話をまとめられたい。

と氏一流の尻をまくつた强硬提議をした。島田氏は乃ち三綠亭に歸り、代行や三委員にそれを取次ぎ、斡旋に努めたけれども、議は容易にまとまらず、全く停頓狀態に陷つたのである。

そこで久原氏は自ら三綠亭に乘込んで行つた。そうして代行委員を各別室に招いて、詮衡委員に無條件で總裁詮衡を一任することを提言したところ、何れも之に同意し、中島氏も『自分には何等の異見も我執もない』とて直に之に贊成したから、茲にいよ〳〵代行委員一致の意見を以て、久原、三土、前田、島田、大口、松野の六氏を詮衡委員に擧げ、砂田氏も之に參加することゝなり、直にその詮衡に着手したのである。時に四月二十八日、大會に先立つ二日であつた。

かゝる心配の裡に鳩山派と革新派との對抗はいよ〳〵緊迫し、革新派が黨本部に於て、三十日の大會準備に向て邁進するに對し、鳩山派は大會を阻止せんとして芝三綠亭に立籠り、實力を以て抗爭せんとするの氣勢を示し、事態いよ〳〵容易ならざる情勢を呈するに至り、一方鳩山、前田、島田、中島の四代行並びに、久原氏以下の詮衡委員は、同日午後二時より三綠亭に於て折衝を續けたが、依然として膠着狀態を脫し得ず、同四時半松野氏邸に移つて、飽まで局面の打開を圖つたけれども、爲にすると見られ熱意の無き申譯の詮衡委員會は、始終兩論が對立して同一軌道を往復するのみで、何等の進展を見せず、遂に同夜九時完全に決裂して散會した。

久原派は何故出來たか——中島氏の心事

こゝで一言すべきことは、革新派に對する鳩山、久原其他の長老達の聯合軍のことである。何故にかゝるものが出現したかと云ふと、最初は鳩山派と革新派との對抗であつたこの繫爭に對して、各長老は皆調停役であり何としても兩派を抑へて黨の分裂を防がねばならぬと考へ、或は四代行を改めて三代行となし、鳩山中島兩氏の外に三土氏が加はつて中立の立場に在り、双方の調節を爲すべしとの希望もあり、又現行のまゝ名義だけの鈴木總裁を續けて、中島、鳩山兩副總裁を以て當座を糊塗すべしとの窮策も出で、又四代行の現狀維持論や、全然更改論なども行はれたのであるが、失敗を自認した鳩山派は何れの案にても自家の面目さへ立たば、こゝ暫く隱忍して妥協に應ずるの外なしと考へ、遂には中島氏に總裁指名の一任さへ同意したのである。

同派の此態度は寧ろ悧巧と云ふべきものであるが、久原氏が現はれて活躍するに及んで、これ等の妥協策は次々と破られ、遂には中島氏最後の切札たる、中島、鳩山兩氏以外の公平なる人物を指名することを中島氏に一任せよと云ふ案の如きも、久原氏は新に鈴木總裁より指名せられた久原、三土、吉澤、三代行中より指名する以外には承知せず（卽ち自分以

外には同意せずとの意）と云ふに至て、事は全く破れたのである。卽ち茲に至るまでの久原氏の活躍は凄じいもので、鳩山派を中心として其他の長老各派の聯合軍を形成し、之に正統の名を冠することに依て革新派を屈服せしめんと、必死の努力を續けたのである。

然るに革新派の方では、中島氏を總裁に推戴することの目的に向て一路邁進し、また他を顧みざるの有樣で、唯野心の無き中島氏自身が、兩派の融合の爲最後の三十日まで努力し、前田島田の兩代行委員が此方針に基いて、陰に陽に盡力したのであるが、期日は刻々切迫し局面打開の方策が効を奏しない爲、革新派が中島氏を總裁に擁立する方策は着々進行し、これに對して聯合派の何人も最早容喙も介入も出來ざる情勢となつたのである。それで長老にして自ら代行其他の黨幹部とならんと考へた人々は、久原氏の方策と相俟つて、自然鳩山派に合流するに至り、後になつて久原氏がその聯合勢の上に馬乘りとなる必至の勢ひを見た時は、最早如何ともする能はざる破目に自己を見出したのである。そうして遂には自家の立場を擁護するの必要なら、久原氏のお題目に同じて、正統派を連呼し、反對に革新派を以て暴力を以て黨の看板を奪はんとするものなりと罵詈し、中島氏に對しては金力を以て黨を簒奪せんとしたと云ふ、最も俗耳に入り易き中傷を呼號したのである。

久原氏の凄腕は群を拔くの慨があるが、何かと言へば自身が、力を以て相手にしてやるとか、踏み潰してやるとか言ふことを常套語となし、金力を揮て相手を骨拔きにすることを得意する歷史を有する人が、金力と暴力で黨を左右したなど言ふに至ては、實に噴飯に堪へないものがあるが、それにも增して吾等の失笑を禁じ得ないことは、鳩山氏が其黨報に於て、今回のことは『物が人を制した結果である』など丶言ふて、暗に中島氏が金力を揮つて敵手を買收したかの如く吹聽することである。

中島氏は平素多くの財政困難なる人々を援助し、また黨の選擧や經常の黨費に對して多大の犧牲を拂つたと言はれ、曾ては鳩山氏自身も多大の援助を受けた覺えがあると思ふが獨り中島氏は今回の事件に際しては、元來自分の關知しない革新同盟であるとて斷じて出金しなかつたことは人々の驚いた處であつて、氏の遠大なる理想は、かゝる紛々たる爭鬪に携はらないことを心掛け、今日の非常時局に處して一日も早く國家の革新政策を樹立すべく邁進するに在つた。卽斯人に對してあらゆる中傷惡罵を逞うすることは、却て之を言ふ者の木體を曝露することになるのである。君子は交絕つて惡聲を放たずと云ふ、中島氏が如何なる場合にも一言半句、久原、鳩山兩氏は勿論、何人に對しても惡口中傷、又は怨言辯明をしないのに對し、吾等は自然と頭の下るのを禁じ得ない。苟くも政治家として國民を指導せんとする者は、徒に反對派の人身攻擊をしたり、强いて其政策を曲解中傷するが如きことは、嚴に之を自戒して可なりと思ふ。否らざれば國民は政黨の泥試合として倍々之を嫌惡し、不信は愈募つて政黨の自滅を來すの外なき結果を見るであらふと信ずる。

鈴木病總裁に代行任免の奇手を打たす

名義だけの殘存總裁に寸毫の權限もなきに

折角代行委員と詮衡委員の全體會議まで開いて、局面の打開を圖つたけれども、凡ての努力が水泡に歸し、決裂狀態に陷つてしまつた。陷るのも道理、表面話を纏めるべく努力するかに見せて、其實裏面では容易ならぬ陰謀を企てる者があり、名義だけの鈴木總裁を利用して、その托宣に依て正統派たるの虛名を獲得し、これを振り翳して反對派を屈服せしめ、以て黨全體の實權を握らふと云ふのであるから、これが黨内に反映し妥協が停頓するのは當然である。

卽二十八日の夜九時に、總裁詮衡が行詰まつたと見るや、一時間後には早や鈴木病總裁を利用して

四代行は時局を收拾する能力なきものと認むるを以て之を解職し、更めて三土忠造、久原房之助、芳澤謙吉三氏を代行委員に囑托す。

と云ふ辭令を出さしめたのである。素より豫ての計畫であつたことは明々白々でその手廻しの早いのには敵も味方も啞然として言ふ處を知らなかつた。二年前に事實上の辭職を爲し、爾來寸毫も黨務に携はることが出來なかつた、單なる名義上の病總裁が、電光石火斯の如き早業をやつたのであるから、人々の驚嘆するのも無理はない。

此に就て久原派の發行する雜誌には『政友會の會則第六條の、總裁は必要に應じ臨時機關を置くことを得とあるの條項に依り、鈴木總裁の指名で』四代行が出來たのであつて、今年三月十日現在の、政友會機關一覽表には、其筆頭に『總裁鈴木喜三郎』と載せてある。此總裁が此黨則に依て代行を任免するのに何の不都合があるかと書いてある。

ところで、會則第六條に謂ふ所の臨時機關とは、總裁が現任して其職務を執りつゝある時、臨時の出來事又は必要の爲に委員や囑托など臨時の機關を設くることを得ると云ふのであつて、總裁其者が辭職し、唯黨の便宜上空名を存する場合、總裁に代てその實務を行ふところの代行委員を、總裁が勝手に任命するの權限があると言ふのではないのである。卽ち代行委員は總裁の代理機關ではなくして、總裁辭任を前提として生れた黨の臨時機關である。悉しく云へば鈴木總裁の現任中その代理として生れた機關ではなくして、鈴木總裁が事實上辭職したから、その缺陷を補ふ爲の臨時方法として選任せられたもので、代行委員は卽ち總裁その者なのである。再言すれば西園寺公が總裁を辭退せられた時の實例にならひ其の上に黨重要機關の決議と總意により黨則に規定しあらざる總裁の權限を行使すべき代行機關を設置したのである。だから之を選任するのは、總裁の權限ではなくして、總裁選任と同樣大會に於て爲すべきものである。ゆゑに當時黨に於ては鈴木氏辭任の三日後、二月二十八日に總務會、幹事會、常議員會及び議員總會を招集したるところ、各機關とも滿場一致を以て『代行機關』設置の件を議決すると同時に、その選任方法及び其員數は、總裁に敬意を表するの意味に於て、その指名に待つことに決し、大會は一旦休憩した此間に於て當時の安藤幹事長は、九段の私邸に鈴木總裁を訪問して右經過を報告し、其指名を請ふたが、總裁よりは豫て打合せの通鳩山、前田、島田、中島の四氏を代行委員として指名せられたから、安藤幹事長は歸つて之を大會に報告し、滿場一致之を可決した。そうして四氏はその代行委員たることを受諾したので、同時に鈴木總裁はその職務權限を執行すべき實權から脫退したものである。

卽ちこの事實を裏書するものとして、右の大會に於て出席議員の一人から『鈴木總裁は依然其地位に止る權限を有するものであるか』『又代行機關は總裁の代理であるか』との質問を發したところ、安藤幹事長は之に答へて、鈴木總裁は事實上其地位を退いたもので、代行委員は總裁の代理機關に非ず、總裁の權限を執行する黨の機關であると明白に答辯して居ることを擧げることが出來る。これらは皆當時發行の黨機關雜誌『政友』の第四百三十九號及び『政友特報』に明記する處であつて之を證據として田邊幹事長より內務大臣其他へ上申したることは、第六項に記載する通りである。

また之を事實問題として考へて見ても、總裁が辭める時は、必ず自分の好む人物を後繼者にしやうと思ふて、まづ代行委員を勝手に任命し、その委員をして次の總裁を推薦せしめると云ふやうに、リレー（繼走）のやうなことをするならば、最初選任した一人の總裁の意思は、永久に傳承せられて、之を變更することは出來ないのである。假令その代行委員が推薦した總裁候補者を、黨の機關を經て、最後に黨大會に於て可否を決すると雖、それはたゞ形式であつて事實はその補者を承認するの外無き結果となるのであるから、畢竟總裁が勝手に代行を任免すると云ふことは、黨員の意思を永久に束縛することになるのであつて、會則は決してかゝることを認めて居らぬのである。

卽ち斯の如き自明の理に殊更耳目を蔽ひ、窮して亂する態度を學び、黨の憲法を蹂躪して四代行を罷免し、新に三代行を任命するが如き暴擧を敢てしてその責任を人の善い鈴木總裁に負はし、更に進んでその三代行の內より後繼總裁を鈴木氏に指名せしめると云ふが如きことは、革新派に追詰められた窮餘の策として之を强行し、これに依て『正統派』など云

ふ虚名を製造し、民衆を欺き以て有利なる立場を得んとする卑怯なる振舞と云はねばならぬが、政黨が時代に眼覺めずして何時までも〳〵かゝる不合理を繰返し、以て國民の耳目を蔽ひ得たりと妄信するが如きは、實に我國政黨政治の爲に遺憾に堪へないところである。吾等は何ものを看過することがあつても、斯の如き非違は絶對に之を許容しないのである。

鈴木先生の爲に悲しむ

著書は從來常に鈴木總裁の人物に憧憬し、其利慾に恬淡にして人情に敦き風格、他人の責任を自ら引被つて、惡評の嵐の中に平然として座する親分的態度に、少なからず敬意を拂ひ、政治家としては人情にほだされて、冷靜なる判斷を下し得ぬ缺點あるをも却て善意に解釋し鈴木氏總裁たる間は決して政友會を離れまいとさへ思つたのである。然るに此敬愛する總裁に對して從來遺憾至極に感じた事が三回ある。

其第一は犬養内閣が瓦解した時、氏が當然其後を襲ふて後繼内閣を組織すべきであり、情勢も亦眞違なくそこまで進んで居つたのに拘らず、今一歩と云ふ處で其實現を見なかつたことである。つまり犬養首相は兇彈に斃れ、鈴木總裁は毒瓦斯に窒息したのであつて、その時に於ける吾等の遺憾は眞に形容し難きものであつた。

第二は鈴木氏が衆議院議員に落選し、再び貴族院議員に任命せられた時である。氏は曩に政黨の總裁として、貴族院に席を置くことの不可なるを思ひ、斷然其議員を辭し、鄉里神奈川第二區より立候補して衆議院議員に當選せられ、昭和十一年春には再び立候補して、落選の憂目を見られたのである。此落選に對して、何人が如何なる同情の穿き違へを爲したものか、或は又深く考へる處あつて、其總裁を早く葬らんとしたものであるか分らぬが、兎に角種々無理な奔走をして、氏を貴族院議員に復活せしむるやう推薦し、氏が遂に之を受諾せられたことである。當時吾々は之を聽いて、唖然として

言ふ處を知らなかつた。

是に對する卒直なる批判は、鈴木氏を總裁に迎へた當時、鳩山、森諸氏と共に大なる努力をした貴族院議員宮田光雄氏が黨報『政友』の第四百六十四號に於て述べて居られるから之を引用する。

廣田内閣の時に落選せられたところの總裁を再び貴族院議員に推薦すると云ふやうな噂を聞いたから、それは以ての外である。鈴木氏は前に貴族院議員として總裁に就任せられたが、政黨の總裁として黨を統率する上に於ては、適當ならずとして衆議院に轉出せられた。吾々はまことに其行動の公明にして適當なるを贊成して居つた。然るに會ま落選せられたからと言つて、再び貴族院に戻られると言ふことは、鈴木氏一個の不名譽のみならず、我黨全體の名譽の爲に之を惜むのである。貴族院に於ては決して斯る人を喜んで迎へるものではないから、どうか貴族院に推薦せられることだけは、見合せて貰ひたいと云ふことを當路に申上げて、之を阻止しやうと努めたけれども、遂に及ばなかつた。私はもう其時からこの總裁は駄目だ、斯る總裁の下に、我政友會が統率せられて居ると云ふことでは、天下の重きに任ずることは出來ないと云ふ考を、私は不幸にして有つたのであります。云々

宮田氏の言は隨分痛烈である。併しながらこれは、苟も議會政治、政黨政治を思ふ者の否定すべからざる信條でなければならぬ。何故に其位の事を知らぬ筈なき吾鈴木先生は、おめ〳〵と之を受諾したのであらうか。側近の支持者等は如何なればこの愚舉を氏に勸めたのであらうか、、吾々は先生のお人善しに對して眞に遺憾を禁じ得なかつたのである。

第三に自分の最も遺憾を感じたのは、今回の代行任免と、後繼總裁の推薦である。鈴木總裁が此に對する何等の權限の無いことは、前項明記する處であり、實際の事情より云ふもかゝる事を敢行すべき義務も無く、其意思も事の直前まで無かつたことは、何人も明白に之を想像し得る筈である。而も尙且つ一派の傀儡となつて之を敢てするに至つては、多年先生に憧憬する吾々は眞に言ふところを知らぬのである。

當初四代行を任命するに當り、宮田光雄氏が之を島田顧問に糺した問答が同じく黨報『政友』に出て居る。卽ち其時宮田氏は

代行の選任は後日の爲是非大會にて選任して置かねばならぬ。

と言はれたら、島田顧問は之に答へて

それが本當かも知れぬが、もうこゝで黨總裁の地位を事實上去る處の總裁に對して、最後の名譽を與へるが爲に、之に四代行指名を委托するのである。つまり世間普通の例に倣ひ、去り行く人に花を持たすのである。

と言はれたから、宮田氏は

それなら宜しい、後戻りする氣遣ひの無い人の指名であるならば、私はそれで滿足します。

と言て打切つたのである。卽ち鈴木總裁は、四人の代行委員を指命した時に於て、其最後の使命は終つたのであつて、爾來空名を存し實質を失ふた總裁、二年間の紛擾に對して何一つ意見を吐かず、對岸の火災視して、一片の戒告も忠言もし得なかつた病人が、突然起て四代行を勝手に解任し、新に三代行を選任すると云ふやうな、そんな不思議な事が凡その世の中に在り得るものであらふかと、宮田氏は驚いて居る。實に其通りで、吾々は斯の如き惡策にのせられて、自ら黨規蹂躙の責任者となり、多年愛撫した多數黨員の大半を失ひ、犬猿雷ならざりし人の惡策の犧牲となつて、その晩節を汚したる鈴木先生の爲に、眞に萬斛の涙なきを得ないのである。

第二 革新同盟の結成

政黨革新を以て革新國策の樹立

反鳩山と非自由主義

革新同盟は三月二十八日に結成せられたけれども、その根源はもつと古い。それは二年前に鈴木總裁が辭職して、鳩山前田、島田、中島の四氏が代行委員に選ばれた直後より、志を同じうする人々が期せずして相集り、次第にその形を大きくし力を强くしたのである。卽その人々の考へでは、四代行は臨時の總裁であるから、早晩一人の總裁が選定せられて、緩んだ大政友會の箍をゞめ直し、內容を革新して時代の趨勢に適應する政黨としなければならぬ。而してその總裁に自ら當らんことを期して居るものは、鳩山氏である。黨歷より言へば氏が最も古く、乾兒を養ふて居る點より見ても氏が最も多いやうである。氏は明朗なる性格の持主で、朝野の交際も廣く、曾て臺閣に列し相當手腕も認められて居る。この人が總裁になると云ふことは、一見妥當な處置であると考へられたのである。

併しながら、更によく之を穿鑿して見ると、氏は今日まで其地位を作るに就て、隨分無理算段をして、各方面の信望を失つて居る。殊に帝人事件や樺工事件や、その他有名ないろ〳〵の事件にも關係して居るので、社會的に相當傷がつき、一般國民殊に政界上層部や軍部などに、甚しく信用を失ふて居るから、此人を吾黨の表看板として舁ぐことは出來ない。ひとり鳩山氏だけではない、あらゆる社會惡を犯し、たゞ法網を免れたと云ふだけの人物が、他にも吾黨にのさばつて居るが、左樣なる免れて恥なき人物は斷じていかぬと云ふのが、革新派の人々の初めに考へたところである。

それに鳩山氏が多くの乾兒を養ひ、黨中黨を樹てゝ權勢を張ると言て極度に氏を憎み、あらゆる方法で之を排擊したものに久原氏があり（其實それに對抗して久原氏も大に乾兒を養ふ）また故床次氏の如きも頗る鳩山氏を喜ばず、常に反鳩山の行動に出でたが、その門下として黨内に留まる人々も、鳩山氏に不斷の敵愾心をもつたものである。その外今日久原派に行て居る三土川村その他の諸長老でも、深く鳩山氏を嫌ひ、決して之を總裁にしやうなど考へた事はなかつたのである。

革新同盟を組織した人々は、此等の情勢を考へた上に、更に最も深く鳩山氏と相容れなかつたのは、氏が自ら揚言して居るやうに自由主義的思想の持主たる點である。氏及びその一派の人々は、今日の時局を憚つて口にこそ言はぬが、各種の問題に對して吐露するところの意見は、凡て自由主義思想に基づくもので、古いマンチエスター派の自由學說に囚はれて、今日一轉して居るところの世界の新情勢、即ち日獨伊等を中心とする全體主義的統制思想は、その最も好まぬところである。だから政治的には今尙國際聯盟追隨主義であり、又戰爭即時終結論者であり、親英米論者である。ひとり鳩山氏が自由主義者であるのみならず、氏の周圍の連中は何れも同一系統の思想で固まつて居る。現に七十三議會に於ける、國家總動員法案討議の如き、鳩山直參の人々が達壓論を振翳して眞向から反對したことは、議會速記錄の之を明證する處である。若彼等の主張した如く該法にして不成立に終つて居つたならば、此大戰爭は遂行出來なかつたかも知れない。

其他氏の部下には國際聯盟至上主義者があつて、松岡氏が全權としてゼネバ會議に出席し、帝國の主張を大演說すると云ふ日に、我議會に於て之に大々的のケチを入れて、國策の遂行に大障害を來し、爾來某方面の注意人物となつて居る人物が居る。その他古い自由主義、古い英國流の議會專一主義の人々が多く、到底今日大轉換を爲して居る世界の大勢に、照應することの出來ない人物が多いのである。革新派の人々はかやうに考へて、絕對に鳩山氏を總裁に推戴すべからずと決心したのであつた。

之に反して中島氏はこの點に於て、最も革同派の希望に合致する處の總裁候補者である。氏は政界に於てこそ十年足らずの經歷であり、鳩山氏より後輩であるけれども、その過去二十五年の飛行機製作に對する慘憺たる苦艱と、烈々たる奮鬪の歷史は、氏を鍛練して確固不拔の信念と百折不撓の奮鬪力を體得せしめ、加ふるにその愛國の至誠は天を貫くの慨あり、而もその天稟は重厚にして淸雅、廣く人を容れて之を統率するに充分である。之を鳩山氏の貴族的に育つて、人に對して好き嫌ひ多く、口が輕くして然諾を重んぜず、常に偏頗を敢てするに比すれば格段の相違があると云ふのである。

加ふるに中島氏は政界進出以來數十萬金を投じて政治經濟社會等に關する調査局を起し、常に世界の大勢を察し、之に先んじて日本が興亞の中樞として大陸に進出すべき大使命を達成すべき、革新政策を樹立せんと決意し、之に邁進する氣魄と熱意とは、他に容易に得難き人物である。而も氏が裸一貫より起つて巨富を贏ち得て、有用には惜氣もなく之を散じ寸毫も金錢に囚はれざる態度は、政治家として最好適である。從來政治家が折角の雄志を抱きながら、實業家に膝を屈してその顧使に甘んじ、自家の革新政策を行ふことが出來ないと云ふ恨みは、中島氏に於ては全然之を免るゝことが出來る。革新同盟のリーダーの一人たる堀切氏が此點に關して言ふ如く『中島氏は自ら政治資金を有するが故に不淨に近づくの必要なく、不淨も亦氏に近づく能はざる特長を有して居る』のである

著者曰く右は堀切氏が現狀に就て言はれたゞけであつて、政黨としての現想はまた別にあるに相違ない。即ち如何に中島總裁が多くの資金を有するとは言へそれは氏自身の大きな事業を經營するところの資材であつて、政黨の限りなき費用を、氏一人が支辨することは容易ではない。更正政友會は宜しく財政的にも革新し、『國民の政黨』たるの意義よりしてその經費は全國數百萬の黨員が喜んで之を分擔するやうにしなければならぬ。之即ち黨費公募の精神であつて、獨り政友會のみならず、何れの政黨も皆之を實現すべきである。否らざれば眞に國民の利害に立脚する政黨は出來ない。今日久原派の人々は、中島氏を惡口する唯一の言ひ草として、金力で政界を左右すると云ふけれども、氏は未だ曾て金

錢を以て政治家の節操を買收したることなく、今回の事件に就ても、一切金を出さずして兩派の融合に努力した。即ち金錢で政界を攪亂することは寧ろ久原氏の方がお手の物で同氏の過去の經歷は雄辯に之を物語つて居ると革同の人々は言ふのである。

兎に角中島氏は政友會革新の大業が最も要求するところの、清新無疵にして最も强力なる唯一の好適者である。此人を擁立して總裁と爲し、頽廢せんとする政友會を蘇生せしめなければならぬと云ふ輿論が、次第に黨内に醞釀せられ凝結して、遂に革新同盟の結成となつたのである。即ち此同盟の結成せられた對照は、反鳩山であり又其他の排ボスであり、殊に非自由主義であつて、かゝる惡風と時代逆行の主義とを黨内より驅逐することに依て、非常時局下に於ける政黨の革新を斷行し、强力政權の樹立を以て、聖業に邁進する皇國の國是を遂行しなければならぬと云ふのがその根本趣旨であつた。乃ち左にその同盟結成趣意書を掲載する。

政友會革新同盟結成趣意書

今や我國内外時局極めて重大、之を外にしては日支事變の解決より興亞の大策樹立、之を内にしては庶政の革新より國防産業の大擴充等、對策眞に一歩を誤らば實に國家の存亡に關するの今日、朝野協心國の總力を擧げて時局に對處すべき秋に當り、顧て吾政友會の現狀を見るに誠に、痛憤措く能はざるものがある。

犬養前總裁不慮の兇彈に殪れ政黨政治の幕閉づるや、鈴木總裁次いで起ち、狂瀾を既倒に返さんとして志未だ成らず、不幸病魔に犯されて遂に總裁代行委員制の出現を見るに至りしも、黨狀は安定せず、偶々昨年第七十三議會終了後、總裁公選運動の擡頭するに及んで、一度決定したる『六月二十日黨大會を開きて總裁を公選する』の案も正に解決の一歩直前に於て有耶無耶の間に葬り去られ、醜狀を天下に曝らし、權威ある公黨の面目も之を泥土に委して顧みず、爾來今日に至るまで滿一ヶ年、第七十四議會終了後の議員總會に於ける役員改選問題に關しても、遂に一幹事長すら任命し得ず、黨機關にして代行委員全員一致の決定事項に反對する者ある等、正に機能停止の狀態に陷つて居る。

思ふに今日程力强き政治を要求し、國民の總力を要求する時機はない。此際吾黨は此要求と必要とを招來する政治的中心勢力として、時局處理の重責を完うせねばならぬ。これが爲には一日も速に總裁を決定することが先決要件である。而して、黨大會に於て選擧することは黨則第二條の明示するところにして、何等論議の餘地は無い。然るに總裁選擧の黨大會は、實行不可能なりと妄斷して、徒に之が遷延策を講じ、又は委員制に依る一時的彌縫策を講ぜんとするが如きは、黨員自ら黨規を無視せんとするものにして、議會政治を信奉する吾等の與せざるところ、又斷じて吾黨の更生策ではない。

今日全國黨員の冀求するところは、實に速に權威ある總裁の下に時局に即應せる革新政策を樹立し、擧黨一致、曠古の大業を翼贊し奉るにある。最早吾黨の現狀は一刻もこの儘放任するを許さない。吾等黨員多數の力を結合し、決然起つて問題の即時解決を圖るを要する。これ吾等が國家並に黨に盡す當然の職責である。こゝに於てか吾等同志相協力して、斷乎政友會革新同盟を結成し、黨機關に對して、四代行一致の申合事項たる『四月中に臨時黨大會を開き總裁問題を解決すること』の即時實施を要求し、而して若し黨機關に於て此吾等の正當なる要求を實施せざる場合は、吾等は最早かゝる優柔爲すなき機關を相手とせず、吾等自らの力に依りて新たなる組織と新たなる機關を作り、死滅に瀕せる吾政友會に革新更生の新生命を吹き込むの外はない。かくて初めて吾黨を救ひ、吾黨發展飛躍の基礎を確立し得ると信ずる。こゝに政友會革新同盟結成の趣意を明かにし、愛黨同憂の士速に來り協力せられんことを冀ふて止まざる次第である。

昭和十四年三月二十八日

政友會革新同盟

政友會革新同盟規約

一、本會ハ政友會革新同盟ト稱ス

一、本會ハ立憲政友會ノ革新ヲ斷行シテ我ガ憲政ノ發達ニ寄與スルコトヲ以テ目的トス

一、本會ハ立憲政友會ノ革新ニ邁進スル憂黨ノ士ヲ以テ結成ス

一、本會ノ事務所ハ東京市麴町區内幸町一ノ二立憲政友會本部内ニ置ク

一、本會ニ實行委員長及實行委員ヲ置ク

實行委員長ハ實行委員中ヨリ之ヲ選擧シ一切ノ會務ヲ掌理ス。實行委員ハ貴衆兩院議員ヲ以テ之ニ充テ本會目的ノ實行ニ當ル、實行委員長必要ト認ムルトキハ相談役、常任委員、連絡委員、其他特別ノ委員ヲ設クルコトヲ得

一、本會ノ經費ハ會費及寄附金ヲ以テ之ニ充ツ

一、本會ハ會員ニシテ不都合ノ所爲アリト認ムルトキハ之ヲ除名ス

即以上の如き趣旨規約を以て革新同盟を結成し、同志を黨内に募つたが、加盟する者衆議院議員百十名、貴族院議員十五名に及び、その後多少の出入があつたけれども、常に百名以上の數を算し、政友會の三分の二はこの團結に向て集中し、全黨を左右するの大勢力となり、堀切善兵衛、宮田光雄、田邊七六等の諸氏がそのリーダーとなり、小久保喜七、熊谷直太、東武、木下成太郎等の諸長老が背後より極力之を支援し、東郷、久山、横川、篠原、木村、匹田、清瀬、土倉、西方、川島、福井、紅露、小高、宮崎、その他の小壯代議士が第一線に立て奮闘したのであつて、動もすれば中途挫折せんとする大會を支持し、公選を强調して、遂に猛然として、中島氏を總裁に昇ぎ上げることに成功しその意氣が凝つて今日の更生政友會を生み、百數十名の憂黨の士をすぐり集めたのである。

第三　政友會臨時大會

中島知久平氏を總裁に選定す

二年間揉みに揉んだ政友會の紛擾は、遂に行き着くところへ着いた。全然性質の異るもの、目的を異にする者が一つの船に乘つて、爭ふて居たのである。だから其船が岸へ着くと、一つは右へ一つは左へ、各々目指す方嚮へ別れ去る、これが當然來るべき紛擾の清算であつた。

即ち革新同盟派は、三月二十二日の代行委員會一致の決定たる『四月中、黨大會を開いて總裁問題を解決すること』と云ふ嚴然たる事實に準據して、諸般の準備を進め遂に最後の四月三十日を以て臨時黨大會を開いたのである。これに對して反革新派の聯合軍は之を違法越權と稱して阻止せんとし、あらゆる手段を講じたが及ばず、大會の開催が兩者交渉の斷絶であり、紛擾の清算となつて茲に截然たる區劃を立て、大政友會は分裂したのである。

大會は四月三十日午後二時本部に於て開催せらるゝ豫定であつたが、革新派の大部分は前々日より本部に詰めかけて、反對派の妨害に備へ、當日午前中には已に貴衆兩院議員及各府縣支部代議員等悉く參集し、反革新派より大會の實情視察及び諜報の任務を帶びて來會した、兩院議員二十六名が之に加はり、三階の廣間に於て開會せられた。いろ〳〵の妨害や障碍を來さぬやうにと、定刻を繰り上げて午後零時十分としたが、出席者は

衆議院議員	百〇三名	
貴族院議員	十一名	
支部代議員	六十一名	

であつて、土倉氏開會を宣し、堀切氏を座長に推し、總裁選擧の件につき協議に入るや、横川氏發言を求めて『總裁の選擧に就て投票の煩を省き、總裁の指名を座長に一任したい』との動議を提出し、滿場異議なく成立した。乃ち堀切座長は起て

黨員多數の意嚮、衆望の集まるところを察し、中島知久平氏を總裁に推薦します。

と宣し、滿場拍手之を承認した。但出席有權者總數百七十四名中、反革派即ち後の久原派より差遣せられた二十六名は推薦に加はらず、百四十八名（中島氏を除き）の絶對多數を以て中島氏を總裁に推薦決定したのである。

中島氏は別項記載の如く、飽まで兩派の融合を圖り、總裁を兩派以外の第三者に求め、之を以て大政友會の分裂を防ぎ之をそのまゝ革新强化することの目的を以て、同日午後二時までに反對派の久原松野兩氏と交渉を續けて居つたが、久原氏が自分を總裁に指名する以外妥協の途無しと暗示するに及んで議遂に成らず、決裂して中島氏は本部に引上げたけれども、此際自ら總裁たることは、天下の疑惑を招くとして就任を肯んぜず、形勢一時悲觀に陷つたが革新派の幹部必死の勸說懇願に依て遂に之を受諾し、携帶して居つたザラ半紙に鉛筆で走書した總裁辭退の草稿を、そのまゝ握つて大會場に現はれ、其後半を卽席で總裁受諾に變更して、左の挨拶をしたのである。

中島總裁就任の挨拶

本日政友會總裁に御推擧を被りましたことは、私の最も光榮とする所であります。

一昨年鈴木總裁が御病氣のため辭意を表明せられましてから二ケ年餘に亘り、總裁更迭に關する推移は、幾多の紛糾を續けて參り最近の黨情は光輝ある傳統を擔ふ大政友會として上、陛下に對し奉りまことに恐懼に堪へず、下國民に對し慚愧の至りに存ずる次第であります。現下に於て我が政友會が君國に報ずるの第一義は、出來る丈け急速に總裁を決定し、以て諸般の機構を整備し、世界的大變革に際會せる此重大時局に對處し、全機能を發揮し、肇國以來一貫せる高遠にして、雄大なる皇謨の翼賛に邁進すべきであると信ずるのであります。然るに不幸にして遂に醜狀を天下に曝すに至りしは、返すゞ〳〵も遺憾とする所であります。かゝる狀態を呈するに至りし原因は、一朝一夕の事に非ず、永年に亘り醞釀せる主義主張の對立が、遂に爆發せる結果にして、當然來るべきものが來たと云ふべきであると信ずるのであります。事茲に至つては最早一時的彌縫策は何等政黨の更生に資するものではありません。斷乎として思潮を同うし且革新の意氣に燃ゆる同志を以て更生政友會を再建し、日本民族に課せられたる重大使命の達成に猛進すべきなりと信ずるのであります。然して更生の第一義は公明正大である。公道原則はいやしくも私心に立脚することなく、一切が犧牲的奉公でなければならない。今回の政友會の紛擾がやゝもすれば領袖の私心に出發する總裁爭奪の結果なる如く世間に誤解せらるゝは極めて遺憾であります他は知らず私に於ては斷じて總裁たらんとする私心を以て行動したことはありません然れども世間に於て此誤解の存する以上、私が茲に總裁を受諾することは、政友會更生の第一歩に於て却つて好ましからずと信ずるのであります。我が更生政友會の出發に際しては、何れの點に於ても、絶對に私心を挾まず、飽まで公明正大にして、滅私奉公の義魂の團結たることを中外に實證し之を顯揚しなければなりません。此信念より私は此の場合總裁就任を固く辭退し、一黨員として努力を傾注することが、更生政友會のため私のとるべき最善の處置なりと確信したのであります。然るに只今各位から聲涙共に下る如き熱誠をこめた御推擧の眞情に接し、菲才をも顧みず、斷然就任を受諾するの決意を致した次第であります。

茲に諸君の御厚志に對し、衷心より感謝すると共に、今後絶大の御援助御協力を懇請する次第であります。尙今後黨の

進むべき方針等に就ては近く改めて申上ぐる機會があると存じます。

中島總裁推薦賛否人名

同大會に於ける中島總裁推薦の賛否數は前項の通りであるが、更にその人別數を擧ぐれば左の如し。

衆議院議員

關東

◎大會出席、中島總裁推薦者

本田義成　牧野賤男　野方次郎　宮崎一
高橋泰雄　横川重次　石坂養平　出井兵吉
金澤正雄　木暮武太夫　篠原義政　川島正次郎
今井健彦　吉植庄亮　小高長三郎　川崎己之太郎
大内竹之助　佐藤洋之助　坪山德彌　江原三郎
小平重吉　田邊七六　（中崎知久平氏ハ選擧後出席シタルモノニシテ選擧ニハ加ハラズ）
（以上小計二十二名）

◎出席シタルモ推薦ニ參加セザリシモノ

安藤正純　瀧澤七郎　葉梨新五郎（以上小計三名）

東北

◎出席、推薦

堀切善兵衛　助川啓四郎　田子一民　八角三郎
志賀和多利　松川昌藏　泉國三郎　東武
小山田義孝　高橋熊次郎　西方利馬　熊谷直太
小笠原八十美　工藤十三雄　田代正治　木下成太郎
（小計十六名）

◎出席、推薦ニ加ハラズ

板谷順助（小計一名）

北信

◎出席、推薦

羽田武嗣郎　高見之通　土倉宗明　青山憲三
池田七郎兵衛　（小計五名）

◎出席、推薦ニ加ハラズ

丸山辨三郎　植原悅二郎　猪野毛利榮　（小計三名）

東海

◎出席、推薦

山口忠五郎　宮本雄一郎　倉元要一　樋口善右衛門
小笠原三九郎　馬岡次郎　濱地文平　西田銳吉
木村作次郎　（小計九名）

◎出席、推薦ニ加ハラズ

牧野良三　（小計一名）

近畿

◎出席、推薦

板野友造　山本芳治　上田孝吉　曾和義弐

木本主一郎　福井甚三　（小計六名）

◎出席、推薦ニ加ハラズ

江羅直三郎　芦田均　服部岩吉　（小計三名）

中國

◎出席、推薦

小林絹治　田中源三郎　原惣兵衛　久山知之

行吉角治　高橋圓三郎　島田俊雄　沖崎鎌三

（小計八名）

◎出席、推薦ニ加ハラズ

中井一夫　星島二郎　肥田琢司　西川貞一

中野治介　（小計五名）

四國

◎出席、推薦

淺井茂猪　紅露昭　（小計二名）

◎出席推薦ニ加ハラズ

林讓治　生田和平　（小計二名）

九州

田尻生五　石井德久次　鶴惣市　小野廉

清瀬規矩雄　一ノ瀬俊民　木村正義　太田理一

井上知治　東郷實　寺田市正　永田良吉

崎山嗣朝　（小計十三名）

◎出席、推薦

綾部健太郎　田中亮一　伊東岩男　（小計三名）

●大會缺席、文書又ハ電報ニ依ル中島氏賛成ノ衆議院議員

前田米藏　船田中　宮澤裕　岩元榮次郎

星一　南鼎三　河上哲太　大本貞太郎

山川頼三郎　東武　松浦伊平　加藤知正

小谷節夫　（小計十三名）

◎大會後入黨したる衆議院議員

山崎達之輔　豐田收　窪井義道　井阪豐光

森　肇　岸田正記
望月圭介　簡牛凡夫

◎大會後補缺選當したる衆議院議員

加藤鎌五郎　村上元吉

貴族院議員

（小計二名）

◎出席、推薦

宮田光雄　小久保喜七
澁澤金藏　金成通
久恒貞雄　石川三郎
久我通顯　田中德兵衛
大籔守治　出光佐三

（小計十名）

◎出席、推薦ニ加ハラズ

若尾璋八

（小計一名）

●電報又ハ文書ニ依ル推戴賛成者

松本眞平　風間八左衛門

府縣支部代議員（出席、推薦）

久保田新太郎
春名正章　陣軍吉
金井正夫

（小計十一名）

（千葉）川口爲之助
（茨城）伊藤鹿治郎
（埼玉）門田新松
（栃木）石川多助
（山梨）川手甫雄
（群馬）竹腰德藏
（福島）小野晋平
（岩手）高橋榮次郎
（山形）安部多門
（秋田）片野重脩
（青森）成田治
（北海道）三井德寶
（富山）金山宋次郎
（石川）益谷秀次
（禮井）濃畑三郎
（靜岡）勝又春一
（愛知）加藤鎌五郎
（三重）佐藤邦則
（岐阜）鈴木有三
平山成之助
二田壽
新藤元吉
相場恭治
荻野豐平
山本榮四郎
太田秋之助
佐々木安五郎
橋詰達雄
佐藤有秀
本多浩治
南條德男
内藤隆
中島松雄
永井保
瀬川嘉助
川瀬新一

（大阪）廣瀬勝　近森猷一
（和歌山）内田安吉　山根繁己
（鳥取）矢野晋也　戸津川善吉
（島根）水津直太郎　湯淺竹五郎
（德島）阿井周平　添田雷四郎
（福岡）井上安五郎　阿比留兼吉
（長崎）向井倭雄　日高島助
（宮崎）甲斐德次郎　長野潔
（大分）工藤一藏　中村嘉壽
（鹿兒島）兒玉實良　仲本爲美
（沖繩）高安高俊
計三十府縣　五十七名

府縣支部代議員（出席、不推薦）

（神奈川）（宮城）計　四名

以上に依て之を累計するに、中島總裁推薦大會の贊否色別は左の如くである。

一、大會出席者總計　一七五名
　内　衆議院議員（中島氏以外）　一〇二
　　貴族院議員　一一
　　支部代議員　六一
一、大會出席、中島總裁推薦者　一四八
　内　衆議院議員（中島氏以外）　八一
　　貴族院議員　一〇
　　支部代議員　五七
一、大會出席、中島總裁反對者　二六
　内　衆議院議員　二一
　　貴族院議員　一
　　支部代議員　四

尙衆議院議員に就ては政友會所屬議員總數百八十四名にして、内譯左の如し

一、政友派議員總數　一八四

内　中島派　一〇八
　　久原派　六五
　　中立派　一一

右中立派十一名の内には中島派たるべきもの相當あるが暫く之を言はず。又久原派六十五名中、十九名は曩に政友會

に於て除名したるものであるが、之を暫く政友派に通算する。又久原氏は衆議院議員に非ず。

第四　總裁問題の樂屋ばなし

中島氏が計畫的に總裁を奪取したかの如く惡宣傳する人があるけれども、それは全然正反對である。卽ち氏は始めから左樣な野心がなく、黨を分裂せしむることを極力防止すべく一年間努力を重ねた上、鳩山氏及び自分以外の、第三者を總裁に指名するの權利を自分に與へよと、最後の三十日の午後一時まで、必死の努力をしたのである。

蓋し中島氏は本問題の當初、昨年の六月一日の代行委員會に於て、島田委員より總裁に推されたとき、誰れもやる者が無ければ、一年位ならやつてもよいと答へたけれども、鳩山氏が之に反對して、自ら總裁たらんとして公選を主張したその時に於て、中島氏は總裁たるの考へを直に捨てたのである。卽ち鳩山氏がその翌日、中島氏をその私邸に訪ふて『自分は貴下が總裁たることに反對する、意見が合はねば公選大會を開いて正々堂々と戰はう』と挑戰した時でも、中島氏は冷靜に『貴下がこの際總裁たることは、黨內の情勢より見て頗る無理がある、今二三年隱忍して他日の機會を俟たれたらどうか』と情理を盡して一時間も說得したが、自分に野心があれば決して左樣な落付いた態度で、衷情を披瀝して忠告は出來るものではないと言はれて居る。

而もその鳩山氏の主張に依て定まつた六月二十日の公選大會は、鳩山派の劣勢を傳ふるに及んで、同派の松野砂田兩氏等の反對運動となり、遂に取止めとなつたが、その後十月になつて再燃した總裁問題は、また鳩山氏の四代行制現狀維持論や、二人副總裁論に依て有耶無耶に葬られ、翌年三月末に起つた三度目の總裁問題も、亦鳩山氏自身の發議に依て、四月中に大會を開いて總裁を公選することであつたが、それも亦同氏及びその一派に於て阻止すべく必死の努力が續けられたのである。之を冷靜なる第三者より見れば、鳩山氏は何故に幾度も自ら公選を發議しては、また自ら之を打壞はすが如きことをするのであらうかと怪まざる者は無い。野心でもよい、今少しく愼重に考慮して味方の頭數を考へ、これならやれると確信のついた後にやつたらよいではないか。輕卒と言はうか淺慮と言はうか、苟も總裁を狙ふほどの者の執るべき態度ではない。假令その間に如何樣の事情があらふとも、一旦號令をかけた大將が、中途で何回も之を取消したり、言ひ換へたりするやうでは、部下は心細くて安心して附いて行かれないと言ふた者がある。

此間に處する中島氏の態度は始終一貫で、一旦總裁はやらぬと決心した以上は、絕對過半數が自分を推すことを知つて居ても、決してやらない。若しやる氣なら、今年の四月三十日を俟つに及ばぬ、昨年六月二十日の大會を遷二無二煽つて雌雄を決したらよいのであつた。之を爲さずして隱忍自重し、何とかして光輝ある四十年の歷史を有する大政友會を分裂さし度くないと、あらゆる努力を一年間も續けたのである。

久原氏が鳩山氏の總裁斷念の言質を取つて以來の活動と云ふものは、物凄いものであつた。いろ〳〵手を廻はして中島氏の心中を探つて見たが、これも總裁たるの意見更に無しと分つた時には、あはよくばとでも思つたのか、必死になつて兩派の調停工作に取かゝつたのである。

ところが一方の中島氏を推戴せんとする革新同盟派は、そんな鳩山じや中島じやと云ふやうな、個人的の勢力爭ひをして居るのでなくして、黨の更生を圖り、時局に照應する革新政策を天下に布くべく、その適任者として鳩山總裁を忌避し、中島總裁を要望して居るのであるから、如何に形勢が代ても妥協苟合などに應ずる道理はない。故にその一路邁進で中島總裁の實現に突貫して居る態度の强硬なることは、久原氏の始めに考へたより遙に以上のもので、これは到底物にならぬと見極めた氏は、兩派の妥協工作が盛んに講ぜられて居る最中に、素早く身をかわして、反革新聯合軍の結成と正統派たる看板の把握に必死の努力をしたのであらふ。

一方長老等の心配は、偏に政友會を分裂させまいとするの念願に出づるのであつて、尤もと思はれる老婆心であるが、その點に於ては同じ心の中島氏は、鳩山中島が共に總裁たることがいかぬとすれば、誰か公平なる第三者を總裁に擁立しそれに依て黨の結束强化を圖り、又その基礎の上に革新政策を斷行せしめねばならぬと決心して、四月二十七日の夜十二時を過ぎて、妥協も調停も行詰まつた時、最後の切札として、總裁の指名權を自分に與へられることに依て、いきり立つ革新派を抑へ、反對派の面目を立てやうとして、先づ前田島田兩氏の同意を得たる後、鳩山派の松野氏に提言してその贊成を得たのである。

始めの話は無論無條件で、中島氏に指名權を與へることに纏まつて居たけれども、豫め其人を內示せよと强要したものは久原氏であつた。中島氏は之に對して、內示すればあちらがいかぬ、こちらがいかぬと言て、復まとまりが付かぬやうになる、自分は決して不公平なことはせぬ、よく各方面の意嚮をも考へ、これならば何人も異議のないと云ふ人物を指名すると言つたので、松野氏等は無條件一任を內諾したが、久原氏はこれを肯かなかつたのである。

それでも中島氏は是非共話をまとめなければならぬと、松野氏と接衝を續け、とう〳〵最後の三十日になつても止めない。革新派は總勢本部に乘込み、總裁選擧の大會を斷行すると云ふ。しばらく待てと言つても、正午を一分でも過ぎたら待たぬと云ひ、豫定の午後二時の大會を零時十分に切上げての待機であつた。

一方松野氏邸では、朝から中島氏の外に久原氏が乘込んで來て直接の接衝を續けた。中島氏が無條件指名を一任せよと云ふのに對して、久原氏は誰れを指名するのか豫じめ知らせと迫る。そうして革新、反革新兩派からこの際出すのはいかぬが、黨外からは尙いかぬと云ふ。中島氏は黨の內外誰れでも纏まりの付く人物であればよいではないか、私は決して私心を挾んで指名するやうなことはせぬ、事實に就て御覽んなさいと言へば、久原氏は黨外からは斷じていけないし、黨中でも兩派ではいけないと云ふ、それならあなた方三代行の內からと言ふ意味かと中島氏が問へば、久原氏はそうだと答へたのである。

中島氏はそれでは纏まる譯がない、いよ〳〵話は決裂となるが、どうなつても差支へないかと言へば、差支えないと久原氏が言つたのである。つまり吾黨を分裂さしたものは久原氏である。それで中島氏も致方ないと言てそこを引上げ、正午過ぎに鐵道大臣官舍に行つて前田、島田兩氏に會ふと、とう〳〵大會を開いて貴下を總裁に選擧してしまつたとのことである。

中島氏はそうなつても、自分が總裁になることはよろしくない、前田氏に總裁になれと云ふと、前田氏は强ひて言ふなら脫黨すると云ふし、島田氏も同樣引受けない。中島氏はとう〳〵萬策つきて、黨本部へ顏を出したのが午後の三時前であつた。

一方總裁の選擧を終り、休憩して中島氏の來るのを待つて居た大會の人々は、その來るのが遲いので皆イラ〳〵して氣を揉んで居た。誰言ふとなく、妥協風が吹いて居ると云ひ、悲憤慷慨する者もある。そこへ漸く中島氏が來て控室に入ると、革新派の幹部が集まつて來て、總裁の承諾を强要するやら、哀願するやら『中島さんあなたは今日になつては自由の進退は許されぬ、あなたは此際西鄕南州とならねばならぬ』と詰め寄ると云ふ騷ぎである。そこでとう〳〵一大決心を定めた中島氏は、總裁を辭退する爲に書いて來た挨拶狀を握つたまゝ三時過大會場に入り、卽席に之を受諾に變更して挨拶をしたのである。

革新派の人々は、一年間の惡戰苦鬪が遂に實を結んで、その當初の目標通り、第八代總裁として中島氏を擁立することに成功したのである。

中島氏としては、茲に至るには千思萬考、さすが太ッ腹の人も可なりの心配をしたことであらふ。無責任の第三者より見れば、つまらぬ喜悲劇と見えるかも知れぬが、この總裁がきまつたときまらぬとに依つて、日本の將來にどんな大きな

影響を及ぼすかは、三年五年の後に、彼等がまざ〳〵と見ることであらふと確信する。

革新派が中島總裁の擁立を斷行したので、各領袖達は鳩山派を中心に聯合したが、鳩山氏亦渡りに舟と之を迎へて、これで何れもうまくしてやつたと考へ、更に進んで夢中で久原氏を總裁に昇ぐところまで行つたが後悔は必ず躓をめぐらさずして孫るであらふ。何故ならば久原氏のフアツショ的思想と、領袖等の自由主義的思想とは、相合致する道理が無い。丁度竹に木を繼いだと云ふか、石佛に木彫の頭をのせたと云ふか、離れる可能性は十二分にあるからだ。現に鈴木總裁より久原氏を總裁に指名の翌日、三土氏は代行の辭意を洩らしたので、岡田安藤兩氏が宥めに行つたとの說があり又三土氏の弟宮脇長吉代議士は、五月二十日の久原總裁推戴の大會にも缺席し、且其後同派へ脫退屆を出して今日に及んで居るのである。一葉落ちて天下の秋だ。砂田氏も吾事終れりと同黨へ顏を出さぬと云ふ。鳩山氏其他にしても、同樣のことが起つて來ぬとは誰が保證する。偉い人達も行詰ると何をし出すか分らない。賢者も亦窮することあるか、と尋ねたい次第である。

久原氏は得意である、中島派の代議士百八名に對して、僅に六十五名を擁するに過ぎないけれども、當然鳩山氏の座わるべき總裁の椅子に、まんまと座つたのだから大成功である。手ツ取り早く豫て用意の政策なるものを發表し、次いで伊勢參宮を爲し、政友會歷代總裁の墓參をして、俺が正統の政友會第八代總裁であると云ふ態度を示して居る。兎に角其途にかけては反革派中その右に出づる者なき淒腕である。或人が中島總裁に、貴方もこれをやらぬのですかと尋ねたら、自分は政友會が分裂した報告には詣らぬ。かやうに政友會は更生し、國家の爲によい働きを致して居ります、と云ふ報告が出來るやうになつたら詣らふと答へたとのことである。これで兩者の人物は、はつきり分るわけである。

第五　久原 中島 兩陣營の貴衆兩院議員

◈中島派

衆議院議員（百八名）

本田義成　牧野賤男　前田米藏　野方次郎
宮崎一　高橋泰雄　横川重次　石坂養平
出井兵吉　中島知久平　金澤正雄　木暮武太夫
篠原義政　川島正次郎　今井健彥　吉植庄亮
川崎巳之太郎　大內竹之助　佐藤洋之助　船田中
坪山德彌　江原三郎　小平重吉　田邊七六
堀切善兵衛　助川啓四郎　松川昌藏　泉國三郎
八角三郎　志賀和多利　西方利馬　熊谷直太
小山田義孝　高橋熊次郎　田代正治　木下成太郎
小笠原八十美　工藤十三雄　村上元吉　羽田武嗣郎　高見之通
加藤知正　土倉宗明　青山憲三　池田七郎兵衛　山口忠五郎

宮本雄一郎　倉光要一　加藤寛五郎　鹽口善右衛門
小笠原三九郎　馬岡次郎　濱地文平　西田銳吉
木村作次郎　板野友造　山本芳治　上田孝吉
曾和義式　南鼎三　木本主一郎　福井甚三
小林絹治　原惣兵衛　久山知之　行吉角治
宮澤裕　稻田直道　高橋圓三郎　島田俊雄
沖島鎌三　淺井茂藏　紅露昭　田尻生五
石井德久次　鶴惣市　金光庸夫　小野廉
清瀨規矩雄　一ノ瀨俊民　木村正義　太田理一
井上知治　東郷實　寺田市正　岩元榮次郎
永田良吉　崎山嗣朝　山崎達之輔　豐田牧
春名正章　井阪豐光　篠井義道　牛丸夫
森驥　陣軍吉　望月圭介　岸田正記
金井正夫　松浦伊平　小谷節夫　川上哲太
山川顯三郎　大本貞太郎

貴族院議員（十五名）

宮田光雄　小久保喜七　久我通顯　田中德兵衛
澁澤金藏　金成通　大簾守治　出光佐三
久恒貞雄　石川三郎　松本餌平　風間八左衛門
久米田新太郎　氏家清吉　鈴木幸作

◆久原派

衆議院議員（六十五名）

鳩山一郎　安藤正純　瀧澤七郎　小見山七十五郎
野口喜一　小串清一　鈴木英雄　河野一郎
葉梨新五郎　津雲國利　庄司一郎　大石倫治
伊東岩男　佐保畢雄　板谷順助　松尾孝之
東條貞　中野寅吉　松木弘　丸山辨三郎
植原悅二郎　箸本太吉　猪野毛利榮　石坂豐一
澤澤豐太郎　鹽川正藏　大口喜六　濱田國松
大野伴睦　牧野良三　江羅直三郎　田中好
芦田均　服部岩吉　森幸太郎　松山常次郎
世耕弘一　中井一夫　本田英作　若宮貞夫
岡田忠彥　星島二郎　名川侃市　肥田琢司
森田福市　庄晉太郎　西川貞一　西村茂生
國光五郎　中野治介　玉野知義　林謙治

依光好秋　砂田重政　西岡竹次郎　三土忠造
生田和平　原口初太郎　坂田道男　増永元也
綾部健太郎　田中亮一　藤生安太郎　松野鶴平
三善信房

貴族院議員（十八名）

鈴木喜三郎　若尾璋八　磯野廉平　川村竹治
岡喜七郎　芳澤謙吉　山上岩二　吉田羊二郎
水野甚次郎　田中德兵衛　三橋彌　青木才次郎
宇野勇作　下出民義　林平四郎　大西虎之助
岩崎清行　長野忠次

總裁單一化運動ノ衆議院議員（中立）

太田正孝　犬養健　武田德三郎　松村光三
岩瀬亮

外ニ中立ノ衆議院議員

松岡俊三　立川平　高島龜太郎　宮脇長吉
中田儀直　野田俊作

（以上二口中立議員十一名）

以上兩派の議員にして態度不明の人多少あり且認定不能のものもあるし、又元前議員にして久原派が勝手に自派のものとして發表して居る者は著者の知るだけにても數人ある。現に著者自身の如きも、同派の會合に出席を促され、缺席の返電をして居るのに、文書を以て久原總裁推薦に贊成したるものと、同派の雜誌に掲載せられて居る。兎に角いろ〳〵と自派に都合よく計算したがるのは人情であるけれども、之を逐一正直に計算して、衆議院議員は、中島派百〇八名、久原派六十五名であつて、中立派十一名と見れば大體間違ひの無いものである。

第六　田邊幹事長提出の内務大臣その他への上申書

吾黨ゞ中島總裁の合法的なることを事實を擧て立證す

五月二十日久原房之助氏が、同派に依て總裁に選擧せらるゝ大會が、三緣亭に開かれたが、それに先立て田邊幹事長は左の上申書を内務大臣、警保局長、檢事總長、刑事局長、東京地方裁判所檢事正、警視總監及び所轄丸ノ内警察署長に提出した。それは吾黨こそ眞正の立憲政友會であつて、今後何人が政友會を稱し、總裁に選擧せらるゝことありとも、それは一切僞物であつて、それに付ての屆出は凡て無效なる所以を具申したのである。

上申書

立憲政友會幹事長　田邊七六

吾黨政友會は、去る昭和十四年四月三十日正式の手續を經て臨時黨大會を開催し滿場一致を以て中島知久平君を總裁に選擧（第一號證及第二號證御參照）――（註）第一號證は臨時大會議事錄寫、第二號證とは機關雜誌政友『第四百六十三號、中島總裁推戴號』――したるより治安警察法第一條に則り同年五月一日附を以て『結社主幹變更屆』を管轄署たる丸ノ內警察署長殿に屆出（第三號證御參照）――（註）第三號證とは結社主幹變更屆）――を了し、更に同年五月二日附を以て衆議院議長にも亦之が屆出（第四號證御參照）――（註）衆議院議長屆出書――を完了したるものなり。然るに新聞紙の傳ふる所によれば一部少數の者集合し來る五月二十日芝區三緣亭に於て政友會を僭稱し黨大會を開催し久原房之助君を總裁に推戴せんと策動しつゝあるやに聞知するも、これは全然黨本部の關知せざる所にして全く無效の大會たるのみならず此等の人々の中には既に客月二十八日及二十九日の兩日に亘り黨本部より除名處分（第五號證御參照）――（註）除名一覽表――に附せられたる者十九名を包含し居るのみならず尙吾黨に於ては本部以外の場所に於て未だ嘗て黨大會を招集開催したる事例全然無之次第に付爲念左記に理由を附して前記大會の違法且無效なる所以を上申仕候。

第一　三緣亭組の主張に依れば鈴木前總裁は未だ任期中にして黨總裁としての一切の權限を有するが故に中島、前田、島田、鳩山の四代行を罷免し同時に三土、久原、芳澤の三代行委員を新に任命したるは有效にして之等の三代行委員が總裁の職務を代行するは適正にして何等違法に非ずと爲すものなるも之全く牽强附會の暴論にして窮餘の詭辯に過ぎざるものなり。

鈴木總裁は長期に亘る病氣の爲め遂に昭和十二年二月二十五日辭意を表明したるにより爾來黨は之が善後策に付愼重攻究の結果事情止むを得ざるものとして總裁の辭意を諒承したるも今直に後任總裁を決定推戴すべき狀勢と時期に非ざりし爲當分の內總裁の職務權限の一切を執行すべき機關設置の議を決すべく同年二月廿八日に於ける總務會、幹事會、常議員會、議員總會を招集したる處各機關とも之を諒とし滿場一致を以て『代行機關』設置の件を議決すると同時に『代行機關』の『選任方法』及其『員數』は總裁に敬意を表する意味に於て其指名に待つべきことも可決し『大會』は一旦休憩此間當時の安藤幹事長は九段の私邸に鈴木總裁を訪問、右の經過を報告し鈴木總裁より鳩山、前田、島田、中島の四氏が『代行委員』として指名されたるにより『大會』を再開此旨報告滿場一致を以て可決（第六號證、黨則第二條御參照）四代行委員は之を受諾すると同時に鈴木總裁は總裁の職務權限を行すべき地位より脫退したるものなり（第七號證御參照）――（註）機關雜誌『政友』第四百三十九號

第二　而して『此大會』開催中出席議員の一人より鈴木總裁は依然其地位に止る權限を有するものなりや、『又代行機關』は總裁の代理なりやに關し安藤幹事長との間に質疑應答あり幹事長は明白に鈴木總裁は其の地位を退きたるものにして代行委員は代理機關に非ざることを釋明せる事實あり（第八號證御參照――（註）政友特報――

而して代行委員の改選其の他一切の事務を指揮命令したるの事實全くなし殊に昨年春鳩山代行が公選論を主强し總裁の變更を目的とする六月二十日の黨大會招集が一言も鈴木總裁に相談なく四代行委員間に決定せられたるが如き十分に鈴木總裁の地位の何たるかを知るに足るべしと信ず。

第三　前段第二點として詳述の如く鈴木總裁は既に其地位を脫退したるものとせば其前に於ては何等の權限を有せざること自明當然なり果して然らば、權限なき鈴木總裁より新に任命せられたりと自稱する三土、久原、芳澤の新代行委員指名の無效なることも亦茲に說明の要なし、從つて又前田、島田、鳩山、中島の前四代行委員を罷免するの權限なきことも

呶々するの必要を見ざる處なり。三緣亭組は此點に付新聞紙上に詭辯を弄しつゝあり、即ち『黨本部』發行に係る『黨員名簿』に前鈴木總裁の氏名を印刷し在るを奇貨とし（第九號證御參照）――（註）黨員名簿――之を以て總裁の權限ありと曲解しつゝあるも、これ殆ど兒戲に類するの愚論にてし眞面目に之を論駁するの要なく名簿に鈴木總裁とあるは總裁決定まで德義上唯單に敬意を表する意味に記載しあるに過ぎざるものなり。

第四　前述の如く鈴木前總裁は既に其地位を退き何等の權限なく新代行依囑亦無效なりとせば三土、久原、芳澤の三新代行委員に依り推薦任命せられたる總務を始め岡田幹事長以下各幹事其他の諸機關の無效なることも亦明々白々にして從つて之等無權限の役員が招集せる處の來る五月二十日の芝三緣亭に開催する僞稱政友會大會の違法無效なることは何人もよく之を諒解し得る處にして此の無效大會に於て推戴せられんとしつゝある久原氏の總裁も亦無效なることは當然なり、況んや之等僞稱の新代行委員を始め三緣亭組の各幹部各役員の殆ど大半は除名處分に附せられたるものなるに於てをや。

第五　更に客月三十日本部に於ける吾黨大會招集手續に不正違法ありと三緣亭組は主張し居るも其然らざる理由は（第二號證政友第四六三號二十六頁五項及二十七頁六項並に二十八頁七項參照）に依り明かなり。

之を要するに四月三十日の吾黨大會に於ける中島總裁の推戴に關しては、臨時黨大會招集の基本たるべき四代行取極めの點より之を見るも、亦招集手續の上より檢討するもまた大會の決議法よりするも其後に於ける屆出等一切の手續既に完了せる點より觀るも一點の缺點なく全く適正完全なるものなり。

而も吾等は現實に引續き黨本部の營造物に於て執務し附屬物件一切を其儘にて未だ嘗て一時たりとも本部を拋棄したる事實なく又從來本部の事務局、會計課、黨務部、政務調査部等に勤務せる事務員を始め使丁、給仕、交換手等に至る迄全員平穩且一人の不平者なく然も引續き本部に勤務し居るのみならず、總裁、政友會本部及び幹事長等の印章は勿論黨員名簿其他一切の諸帳簿、印刷物、電話機等の諸設備の如きも全部吾等に於て完全に引つゞき使用し居れり、尙前記雇傭者の給料、電燈料、水道料、度數料、基本料、市外通話料、瓦斯代の如きも黨本部に於て支拂ひつゝあり。

以上現實の事實は各官衙に於ても之を充分に認識せられ、例せば郵便電信等の送達の如きも大會以前と何等變りなく引續き吾黨本部に對して僞されつゝあり、然るに久原派は三緣亭或は帝國ホテルに本據を置き此處にて一切の會合を僞しつゝあり、而も數日前より『政友會本部』の印章を僞造して之を旺に押捺不正使用しつゝあり（第十號證御參照）―（註）通知狀に押捺せる印章――實に政治道德上默認し難き不正不德の行僞なりと思料せらる。

而も三土、久原、芳澤三氏の如きは一時は長老として調停の勞を採るべく起ちながら間隙に乘じ一擧に自己自ら執つて代るが如きことは殆ど常識を以て吾等の判斷し得られざる所なり。

之等の諸點を綜合勘案するに來るべき五月二十日の僞稱大會に於て何人が所謂總裁に推戴せらるゝも之等の屆出は全然無效なるが故に受理せらるべきものに非ざるものと確信致候間證憑書類を添付し茲に及上申候也。

第七　中島總裁の革新政策

中島總裁は六月二十一日、東京會館に於ける立憲政友會所屬の貴衆兩院議員、並に全國支郎長聯合會に於て、吾黨の革新政策に就き左の如く演說した。

政友會更生の第一歩に於て、茲に所信の一端を披瀝し我黨の進むべき根本方針に就き、其の大綱を闡明するの機會を得ましたことは、私の光榮とする所であります。

世界に於ける秩序は國際間の時の勢力に順應して推移するものであつて、決して永久不變のものではありませぬ。

而して、現在の世界秩序は、十七世紀以降、主として海軍力を基調とする戰力、即ち國家勢力によつて打ち建てられた

る秩序に外ならないのであります。

然るに、戰力の消長は兵器の變遷に依存するものであつて、近時航空兵力の非常なる發達に伴ひ、海上兵力に依る戰力は著しく低下し、各國戰力の上に、一大變革を來したのであります。

伊太利のエチオピヤ戰爭の際、英國は之を阻止せんとして、其の全艦隊を地中海に集結し、伊太利を包圍したのでありますが、爆撃機を以てするムツソリーニ氏の一喝に逢ひ、地中海より引き揚げ、エチオピヤの敗亡を傍觀せざるを得ざりしことは、此の事實を明確に證明して餘りあるのであります。

從つて、舊戰力を基調として、打ち建てられたる現世界秩序は、不合理に墮し、近く崩壞して、新戰力を基調とする新しき秩序が再建せらるべき重大時機に直面したのであります。是れ世界生命體が不斷に進化發展して止まざる宇宙の眞理に則する變革であつて、避けることの出來ない運命であると信ずるのであります。

支那事變及び歐洲に於ける最近の紛擾は、要するに此の世界的變革の胎動に外ならないのであります。從つて支那事變は只單に蔣介石政權の容共抗日政策に基因すると云ふが如き單純なるものではなく、尨大なる外地を占有する少數國家が東洋方面よりの崩壞を防ぎ、不合理なる現狀を維持せんとする欲求策謀の現れであつて、其の眞因は支那そのものにあらず寧ろ背後に於ける現狀維持勢力の妄動にありと斷ぜざるを得ないのであります。故に支那事變の處理のみを以て、直に眞の平和を待望するが如きは甚しき短見なりと申さねばなりませぬ。縱令支那事變は終局を見ると雖、日本帝國は、此の世界的變革の渦中より脫却することは絕對に出來得ないのであります。

吾々日本民族は、須らく是の歷史的未曾有の轉機を把握し、積極的に世界秩序の建設に邁進し、肇國以來一貫せる宏遠にして雄大なる皇謨を翼贊し、聖業を完成するの勇斷に出づるを要するのであります。

是が爲には、平常時に於ける國內策對のみを基調とする從來の政治、經濟、外交等諸般に亘り、全面的に革新を斷行し

聖業達成に適應する國家態勢を整備し、國家總力の有效發揮に努めなければなりません。革新政策の必要性と目標とは此の信條に立脚し、こゝに重點を置くべきであります。次に其の大綱に付き所信を簡單に申述べたいと存じます。

第一は世界國策の確立であります。

世界秩序變革期に處して、日本帝國の進むべき根本方針を如何にするかは、國運消長の決する所であつて、極めて重大であります。

此の重大問題を、單に利害觀念より打算するは正鵠を失し、且つ進守兩論を生じ歸結すること不可能であると申さねばなりませぬ。

須らく、日本獨特の世界觀に立脚する崇高なる理念に立ちて、決定すべきであると信ずるのであります抑も日本民族は天祖一元より發展し、天皇を中心とする純血單一の生命體であります。而して生命の本義は悠久の過去より永遠の未來に一貫する不斷の進化發展であります。

是の一元より發し、天皇中心の單一生命體であることが、日本民族の世界に冠絕する眞姿であつて未來の發展に對し無比の優越性を具有する所以であります。是の優秀民族が飽くまで發展し、他の諸民族を指導し又は其の德を光被することが、要するに、世界生命體の進化發展を助長顯現するものにして、宇宙を一貫する大眞理に合一するのであります。從つて世界新秩序建設に對しては、一切の總力を擧げて積極的に邁進し眞の世界平和確立に貢獻することが日本民族に課せられたる最高の責務なりと確信するのであります。而して日本帝國が擔任すべき地域的限度は少くとも

第一段階　日滿支を一體とする東亞新秩序の建設

第二段階　亞細亞全體の新秩序建設

を目標とすべきであると考へるのであります。

第二は國力の創建であります。

世界國策の遂行には國力の創建が根本を成すのであります。

國力の標準は、文化が同一程度とすれば、其の人口と資源とに比例するものであります。

日、滿、支をブロックとする資源は頗る豐富であり人口も亦多數であります。此のブロックの上に立つ日本の國力は、實に偉大なるものと云はなければなりませぬ。

而して、戰時、對外國力、即ち戰力は過去の蓄積資本量や、目先の財的收入等ではなく、要するに國家目的に集結せらるゝ勤勞力の有效量に外ならないのであります。然るに現下我が國力の擴充完からざるは、過去の貨幣經濟時代の古き觀念と、自由主義經濟を基調とする舊思想、舊機構に累せられて、國民勤勞力は徒らに不急の使途に浪費せられ、有效集結を缺き偉大なる國力を空しく擁して、是を開發し能はざるがためであります。

敢然として、從來の舊き觀念と舊き制度機構とを革新し、國力の非常創建を斷行しなければなりませぬ。

其の要訣は

一、信用創建　　二、有效勤勞創建　　三、制度機構の改革

であります。

即ち國家は國家目的に必要なる企業に對し、手形其の他の信用を保證し、信用創建を爲し、之に依つて企業を勃興し、勤勞の創建を誘發するのであります。從つて中小商工業の健全性も確保せらるゝのであります。然し乍ら、無計畫の勤勞創建は、却つて勞力の浪費となり、國力を減殺するが故に、一貫せる計畫の下に、配給制度を確立し、國內生活必需品を最少限度に量定し、之に必要なる勤勞力を限定し、其の他の民力は擧げて國家目的に集結し、有效勤勞創建を爲すべきであります。

又、急速なる非常生產は營利を超越しなければ行ひ得ざるものであります。現行國家豫算は、單なる消費豫算にして生產は專ら民間の營利經濟に委して顧みないのであります。爲に困難にして急速を要し營利を伴はざる生產は停頓して進まず、非常なる禍根を成して居るのであります。故に國家豫算に多額の生產豫算を編成し、非常生產部門を特別に保護助成又は直營し、國力創建を飛躍せしむることが急務なりと信ずるものであります。

第三は軍備の充實であります。

軍備は國家目的遂行の根幹を成すものであります。故に歷史的聖業達成に、必要にして有效なる軍備の充實に努めなければなりませぬ。

これが爲には陸、海、空軍を通じ、作戰全般より軍需生產全體を一元的に統制し、各軍互に因襲を脫して有效を慮り重複を避けて、無駄を排除し、戰面の緩急を按じて、器材の生產と集結に有效能率を上ぐるの方途を講じなければなりませぬ。

第四は外交國策であります。

非常時外交は次の三要素の基礎に立つものであつて、其の一を缺いても完全を期し得ないのであります。即ち其の一つは確固たる國家目的であり、其の二は强大なる軍備、其の三は友邦との同盟であります。

八方美人的に何れの國にも媚態を呈するは非常時外交の眞義を誤れるものであり、眞の外交は國家目的遂行を眞髓とすべきであります。

如何なる國家と雖も、列國間に伍して、單獨にて國家目的を遂行することは難事であつて、同盟を必要とすることは申すまでもないことであります。故に世界の大勢を達觀し、世界觀に立脚し、國是を同うする國家群と同盟を締結することは、聖業達成に喫緊の要事なりと信ずるのであります。

第五は社會政策の强化であります。

現行經濟機構内に於ては自營者にあらざる勤勞者群は、一定の老年に達すれば、必然的に職を離れ、又事業の推移によりては壯年にして尙ほ且つ職を失ひ、若くは職を得ること能はざるものあり、疾病者、不具癈疾者に至りては尙更の事であります。斯くては專心國家に全勞力を奉仕する產業戰士の前途は常に不安にして精神的に明朗を缺くに至るのであります。

是れ實に資本主義經濟に內在する重大なる社會的缺陷であります。此缺陷を是正し、產業戰士の前途、その遺家族等に不安なき樣社會政策を確立强化することは極めて緊要であります。而して其の大綱は、資本主と勤勞者と、政府とが協力し積立保險制により國家保障の制度を確立し老齡者、失業者、疾病癈疾者、扶養し得ざる兒童等を保障するのであります戰傷病者及び出征者の遺族、家族の保障を徹底せしむることは更に重要であることは言を俟たないのであります。

第六は農本政策の强化であります。

農村は國民生活の本たる食糧を供給するばかりでなく、純眞、忍耐、勇健の精神と强健なる人的源泉であつて、眞に農は國本を成すのであります。此の農本政策を特に强化するは國家の根基を鞏固ならしむる所以であつて、極めて肝要なることであります。

而して土地制度の確立、農產物價格の安定、肥料其の他の資材供給の確保、負債整理の徹底、負擔の公正、信用創建により各地に工業を分布し、農閑期餘剩勞力の有效化を圖る等は其の中心政策であつて、これ等に對しては劃期的、飛躍的具體政策を確立强行しなくてはなりませぬ。

第七は教育の刷新であります。

現行教育は主として、個々の人間の智的教育を根幹とし、民族教育の本質を逸するの恨みを存するのであります。日本民族は、天祖一元より發し、天皇を中心とする純血單一の生命體にて世界無比の優越體である。此の民族生命體を育成强化することを教育刷新の重點としなければなりませぬ。

民族生命體の强化は、是を形成する分子、卽ち個々人を育成强化するのみでは達成されない、個々人を强化すると同時に個々人が團結協力し、生命體全體の强力を合成發揮することに重きを置かなければならないのであります。從つて個人教育としては

日本精神を昂揚し、精神的、智的、肉體的優秀人を育成するに努め

團體教育としては

嚴正なる秩序と、嚴肅なる規律を恪守し、犧牲的奉公の精神と共同的團體行動の練成を爲し、以て民族生命體强化の實效を擧ぐることに努めなければなりませぬ。

第八は强力政治組織の結成であります。

國家は一大組織體である、故に政治の中樞たる內閣は無論確乎たる組織體でなければなりませぬ。內閣が急造の寄せ集め體であつては、徹底せる强力政治を行ひ得ざることは、過去數次の內閣の實績に徵して瞭かなるところでであります。

是れ、非常重大時局に對處し國運恢弘の上に重大なる障碍なりと申さなければなりませぬ。

日本獨特の世界觀を基調とする政治思想を國民に徹底し、國民各個が衷心より、國家目的と自己の責務とを自覺し、勇躍して統制ある協力を爲し、最大國力を發揮せしむるためには、强力政治組織、卽ち强力政黨の結成を必要とするのであります。而して、此の强力組織の上に立つ內閣に於て始めて基礎鞏固となり、諸般の革新を遂行し、以て、力强き政治を斷行し得て、聖業完成に積極的巨步を進め得るのであります。

以上は吾黨革新政策の大綱を示したに過ぎませぬ。而して、これ等政策個々の具體化は、これを政務調査會の審議に委

ね、速に其の成案を得ることに致します。

最後に私は吾黨の更生に就て特に一言申述べます。

吾が立憲政友會は立黨正に四十有餘年、絶えず積極進取の一路を辿つて大政翼賛の重責を果したのであります。然るに今や時運は進展し、興隆日本の前途は飛躍的發展に輝くのであります。從つて吾黨は茲に跳躍し、自ら舊套を脱して革新を行ひ、公黨の面目を一新し、組織を強化擴大し、政黨本來の使命に邁進せんがため、吾黨更生の指標を決定し、別にこれを發表致しますが、茲に其の大要を申し述ぶれば、吾黨は光輝ある立黨の精神に則り一意國家を念とし、眞に國民の總意を指導し、且つこれを反映し得べき國民運動の新組織體として更生し政黨の生命は政策なりとの主張を堅持し、更生革新の政策を樹立し、國論を指導して廣く全國の青壯年層に呼びかけ純眞にして熱情に燃ゆる若き大衆と共に相携へて盛んに經綸を行ふの實力と氣魄とを養ひ、以て日本民族に課せられたる歴史的大使命達成の大任を完うせんとするものであります。

終に諸君の絶大なる御奮闘を切望して止まざる次第であります。（終）

革新政策の解説

この革新政策はなか〳〵深甚なる理想に基いて解釋困難の點もあるから蛇足的に解説すると以下の通りである。

即ち現在の世界秩序は、十七世紀以降、主として海軍力を基調とする戰力、即ち國家勢力に依て打建てられた秩序であるから、航空兵力が非常なる發達を爲し、海上兵力に依る戰力が著しく低下した今日は、舊戰力たる海軍力を基調として打ち建てられた現在の世界秩序は不合理となつて遠からず新戰力を基調とする新秩序が再建せらるべき重大時機に直面して居るのである。

支那事變及び歐洲最近の紛擾は、即ちこの世界的變革の胎動に外ならぬのである。從つて此の事變の如きも、唯單に蔣介石の容共抗日政策に基因すると云ふやうな單純なものではなく、尨大な外地を占有したり、權益を獨占して居る英佛その他の少數國が、不合理なるその現狀勢力を維持せんが爲に、蔣介石を尻押して、日本に對抗せしめて居ると云ふところに根底を有つて居るのであるから、支那事變その物を處理したからとて、眞の平和は望まれないのであつて、又日本は如何に焦つても單獨にこの世界的變革の渦中より脱却することは出來ないのである。

故に吾々日本民族は、この未曾有の歴史的轉機を把握して、積極的に世界新秩序の建設に乗出すの覺悟を定め、以て肇國以來一貫して居るところの、宏遠にして雄大なる皇謨を翼賛し、聖業を完成すべく邁進しなければならぬ。

その爲には從來の如く、國内對策のみを基調とする政治、經濟、外交等では駄目であるから、之に全面的の革新を斷行して、聖業達成に適應する處の國家態勢を整備し、國家總力の有效發揮に努めなければならぬ。革新政策の必要なることは即ちこの爲であつて、目標重點は必ずこゝに置かなければならぬのである。

それで第一には世界國策を確立しなければならぬ。それには單なる目前の小さい利害觀念から脱却して、日本獨特の世界觀に立脚する、崇高なる理念の上に立つて決定すべきである。日本民族は天皇を中心とする純血單一の生命體で世界に冠絶する優秀民族であるから、飽まで自ら發奮し先頭に立つて他民族を指導し、その德を光被せしめて、眞の世界平和を確立しなければならぬ。これが吾々日本民族に課せられたる最高の責務である。故に此大目的の達成の爲に、吾日本帝國の擔任すべき地域は、少くも、第一は日滿支を一體とする東亞新秩序の建設に向つて勇往邁進すること、第二は亞細亞全體の新秩序建設を目標として努力奮鬪することでなければならぬ。

それで此目標が確立した以上は其次には、此世界政策遂行に必要なる國力を創建しなければならぬ。而して吾々がこの國力創建の基礎とする處の日滿支ブロックは、人口も資源も頗る豐富であつて、此上に立つ吾が日本は決して持たざる國ではなく、頗る豐裕偉大なる力を藏して居るのであるけれども、之を利用し發揮する處の從來の方法が惡いから、國力が

充分擴充出來ないのである。

即ちそれは過去の貨幣經濟時代の古い觀念に囚はれ、自由主義經濟を基調とする舊思想、舊機構に累せられて居るのであつて、これに隨伴する資本主義經濟の下に於て、金が無ければ如何なる事業も出來ないといふやうな、古い誤れる思想が今日の中堅階級上層部の老人達の頭にコビリ付いて居るが、時代は已に信用經濟時代に移り進んで居るのである。乃ちこの時代に於ては、信用を基礎とする經濟機構を打立て、信用さへあれば金即ち資本が無くとも、保證に依つて凡ての取引が出來るやうにしなければならぬ。即ち原料の仕入でも賃金の支拂でも、悉く信用を基礎として取引運營が出來るのであるから此機構さへ確立すれば中小商工業者の如きも、信用があつて資金が無い爲に、商賣なり製作が出來ぬと云ふことは無いやうになるのである。

又國家に於ては殊にそうで、金がなくとも國家の信用を基礎として、いくらでも仕事が出來る筈である。又國家は國家の目的に必要なる民間の企業に對しては、手形その他の信用を保證してやれば、これに依つていくらでも有用なる企業を勃興せしむることが出來るし、從つて國民の勤勞をいくらでも誘發することが出來るのである。

著者曰く、中島總裁は二十五年前飛行機製作所を新設したる時は全く無資本であつた。それが今日五千萬圓の株式會社と稱するが別段他に株主があつて出資した譯でなく、全く自然に累積した資材即ち勤勞の結晶であつて、之を時價に見積れば數億圓に値ひする大設備なのである。それが數十百の工場となつて各地に散在し、その全製造能力は英佛各國の全製造力を凌駕し、世界第一の飛行機製造會社たるのみならず、其製造機の優秀なることは、八月初頭陸軍大臣に於て、ノモンハン其他の滿蒙上空に於ける戰鬪に際して發揮したる、驚くべき成績に對して表彰を爲したので分かる。

即ち斯の如き大發展を遂げたことは、他の會社工場のやうに、資本を增額して事業を擴張したのではない。資本は全然注ぎ込まない、全く信用を基礎として原料を入手し、製造及販賣したものであつて、その經營の根本方針を勤勞を有效に集結して、之を最も有效に使用するところの制度機構に置いたからである。

斯の如き方法は世界に於て中島氏が最初の創始であつて、今日はドイツ、イタリーなどがこれに倣ふて、國家全體の大企業を經營して居るが、其爲にドイツの全產業能力はイギリス又はフランスの十倍にも達するのであつて、これが總裁のいはゆる金を持たざる國の獨伊が金を持てる國英佛を押し切つて居る所以である。即ち前記の『國力の創建』と云ふのはこの事を云ふのである。

即ち此の經濟革新の方策を國政の上に打立てるべきで、その要訣として

一、信用創建

一、有效勤勞創建

一、制度機構の改革

を擧げるのである（此言葉は總裁の創造である）併し無計畫の勤勞創建は却つて勞力を浪費し國力を減殺するから、一貫した計畫の下に、配給制度を確立し、國內の生活必需品を最少限度に量定して、その他の民力は擧げて國家の目的に集結し、以て有效勤勞の創建を爲さねばならぬ。

又急速なる非常生產は營利を超越しなければ行はれないものであるが、吾國今日の狀態は、國家豫算は、單たる消費豫算であつて、生產は凡て民間の營利經濟に委して顧みないから、急速を要し又營利を伴はない生產は停頓して進まないのである。これは宜しく豫算編成の根本方針を更め、多額の生產豫算を編成して、非常生產部門を特別に保護助成したりまた直營することに依つて、國力の創建を飛躍せしめることが急務である。

著者曰く、中島總裁は往年海軍を辭職して、民間に於て飛行機製造を行ふ時の理由として、官業では豫算や年度に縛られて、急速に又思ふ存分に立派な飛行機を作ることが出來ないと云ふのであつて此は右の國家豫算に生產部門を設けよ

との說と矛盾するやうに見えるが、それはそうではない。これは特別に急速を要し非營利的なる事業を云ふのであつて中島飛行機會社の如きは、右に記するが如く、利益配當を約束して、他人の出資を求めて居らぬから、いくらでなければ配當が出來ぬから、飛行機を作らぬと云ふやうなことを言つたことなく、或時はみす〳〵不利益の計算を忍び、またある時は損失でも之を他の利益と入れ合せて考へ、一定の計畫の下に勤勞を有效に使ふことに依つて、今日の成功を贏ち得たのであつて一般の民間會社が悉く斯の如き方法を以て、如何に急速を要する仕事でも、營利を度外に置いてやれば、敢て國家が生產豫算を編成する必要はないけれども、一般はそうはいかぬから此言を爲すものと思はれる。

次は軍備の充實である。これは解說に及ばない、一讀理解し易い。次は外交國策である。これも明瞭であるが、茲に特に注意を喚起したいことは、確固たる國家目的を立てゝ、之を敢然外國にも知らしめ、國民にもよく理解せしめることが必要である。國策がふら〳〵と變るやうでは、不利益これより大なるものはない。そうして外交國策を樹てるには、軍備を充實し、これを背景として國家目的を遂行すべきであつて、八方美人的に何れの國にも媚態を呈し、殊に從來吾國の朝野に浸潤し、今尙之を脫することの出來ない親英恐米論者の如きは、宜しく今日の時局に眼覺めて、獨往邁進の日本精神を體得すべきである。尙今日の時局は吾國單獨にては國家目的を遂行すること困難であるから、國是を同じうする國家群とは遲疑することなく同盟を締結すべきである。

更に現下の狀勢に於て、社會政策の强化は、一段の緊要を加へて來た。失業者、老齡者、疾病變疾者、扶養者なき小兒等を放置して、充分の保護を加へざることは、今日の資本主義經濟に內在する重大なる社會的の缺陷であるから、之を保護し、產業戰士の一生を安定の地位に置き、殊に戰傷病者及び出征者の遺族家族の保護を徹底せしめなければならぬ。

更に又農本政策を强化することは、緊急中の緊急事である。農村は啻に國民生活の本たる食糧を供給するのみならず、純眞、忍耐、勇往の精神と、强健なる體軀の人的源泉であるから、之を保護し繁盛ならしむることは、實に國本を培養する所以であるが、吾國は從來農村問題の喧しき割合に、その施設の見るべきものが少い。宜しく土地制度を確立し、農產物價格を安定せしめ、生產に要する資材を充分に供給し、負債の整理を徹底せしめ、都會に比して頗る過重なるその負擔を輕減し、又各人の負擔を公正にし、更に進んでは以上述ぶる處の信用創建に依つて、金の無い農村にも、各地にドシ〳〵工業を分布して、農閑期の餘剩勞力を有效に使はしめる方法を樹てるならば農村の更生發展は期して待つべきである。

次には敎育の刷新であるが、現行敎育の如く個々の人間の智的敎育を根幹として、民族敎敎育の本質を逸するものはいけない。宜しく個々人を育成强化すると共に、個々人が國結協力して、吾民族生命體全體の强力を合成發揮することに敎育の重點を置かなければならぬ。卽ち其爲には先づ第一に日本精神を昂揚して、精神的、智的、肉體的に優秀なる人物を養成すると共に、進んで秩序と規律を恪守し、犧牲奉公の精神を體得し、協同的團體行動を爲すことに依て、民族生命體强化の實效を擧ぐるやうに、敎育を建て直さなければならぬ。

最後に强調せんとするのは『强力政治組織の結成』である。內閣が急造、寄せ集めの脆弱なる基礎に立つやうでは、到底强力なる政治を行ひ難いことは、過去數次の內閣の實績に徵して瞭かである。國民が日本獨特の世界觀に徹底し衷心より國家の目的と自己の責務を自覺し、勇躍して統制ある協力を爲し、最大國力を發揮せしむるためには、强力なる政治組織卽ち强力政黨の結成を爲し、その基礎の上に內閣を打立て、諸般の革新を斷行し、之を以て積極的に聖業達成に向つて邁進しなければならぬ。

卽ちこの爲に吾黨は、敢然として舊來の弊瘵より蟬脫し、新しき時代に照應し、又これを指導すべき政策を樹立し、廣く之を全國の靑年層に呼びかけ、純眞にして熱情に然ゆる若き大衆と共に、相携へて皇國の使命を遂行すべき聖戰に上らんと欲するものである。

以上は卽ち中島總裁が自ら筆を執つて記述したる前記革新政策に對し、簡單なる解說を加へたものであるが、總裁の眞

考し意圖する處は啻にこれのみではない。これは單にその一部であり概要に過ぎない。その雄大なる抱負と計畫は今後追々に政友會の政策として現はれ來るであらふ。

第八　政友會の主義政策要綱

更生政友會は、別項中島總裁の革新政策發表に次いで、之に準據する庶政革新の大政策を決定し、之を以て國論を指導し時艱を克服して、新東亞建設に邁進すべく、左の主義政策要綱を發表した。

第一、吾黨革新政策の基本綱領

明治維新以來、我國は力めて歐米の文物を攝取し努力七十年、遂に今日の隆昌を見るに至つた。

然るに、今や國力内に充溢すると共に、民族の使命は愈々重きを加へ、遂に天業恢弘八紘一宇の大理想を實現すべく、千古未曾有の歴史的大業にその第一歩を踏み出したのである。

從つてこの大業達成のためには、益々擧國一體の實を擧げ、國家總力を發揮すると共に、各般の文化に再檢討を加へ、廣く宇内の大勢をも達觀して現狀に膠着することなく、國内諸般の體制に全面的改革を行ひ、只管皇道を基調としたる新文化の創造に邁進し、以て今日の重大時局に對處するの勇斷が必要である。

仍て吾黨はこの國家的要望と民族的使命とに鑑み革新政策の斷行を決意し、内外百般の政策樹立の根本原則に就き、その大綱を次の如く決定した。

一、國體の本義に則り、我國獨特の立憲政治を顯揚し、一君萬民億兆一心の家族國家體制を充實發展せしむると共に、個人主義を基調としたる西洋模倣の自由民主々義並に專制獨裁主義の政治思想を排除し、各般の政治及行政機構の改革を斷行して、强力なる政治組織を確立すること。

二、我國を盟主とする全亞細亞體制結成の一段階として、先づ東亞體制を建設し物心一如の新文化を創造して、これを亞細亞全民族に及ぼし、亞細亞再建の聖業を達成すること。

三、八紘一宇の理想に基き、廣く皇道を世界に宣布し、志を同うする國家民族と提携協力して全人類の平和幸福を招來すべき世界政策を確立し積極不退轉の自主的外交を顯現すること。

四、公私一切の經濟は日本民族傳統の信念と家族國家の本質とに鑑み、國家奉仕の精神を基調とし、公益の私益優先を本旨とする經濟の全面的調整を行ひ、國家目的の遂行と國民生活の安定とを期するため、適正公平なる財政經濟の新態形を確立し、經濟日本の發達を堅實ならしむること。

五、農本政策を强化し、農村を振興して國本を培ひ、食糧其他の各種生産と質實剛健なる人的資源とを確保し、國家の根基を鞏固ならしむること

六、我國獨特の社會政策を創建して、今日の社會的缺陷を是正し、凡ての産業戰士をしてその堵に安んぜしむるの制度を確立すること。

七、國策遂行に必要なる陸、海、空軍の整備充實を圖り、軍需生産の綜合的統制を行ひ、重複を避けて無駄を排除し、その有効能率を增進すると共に、人的資源の培養、物的資源の開發、生産力の擴充、國民體位の向上、國民精神の發揚等物心兩面に亘り廣義國防の完備に遺憾なきを期すること。

八、擧國精神に基き教育の根本的改革を行ひ、その制度内容を整備して教學を刷新し、民族生命體の育成强化を圖るは勿論、特に新東亞建設の大業を翼賛するに足るべき人材を育成すると共に、物質文化の時弊を芟除し、廣く精神文化の昂揚に努め、精神日本再建の目的を達成すること。

第二、事變處理並に對外國策決定の基礎的要素

支那事變を中心とする新東亞建設の大業及び、歐洲に於ける國際的變局を重點とする世界の新秩序創建の問題は、實に國家の存亡、民族の消長に關する最大案件である。故にこれが處理に關しては、部局的判斷による國論の對立を避け、綜合的觀察により確固不拔の方針を確立し、擧國一體最善を盡すの方途に出でねばならぬ。而して次の五項目はこの對策決定の基礎的要素と認むべきものである。

一、國防戰策の變化

各國勢力の消長は兵器の變遷と至大の關係がある。歐米列强の世界的勢力は舊來の兵器を戰策の主體として打建てられたものであるが、最近に於ける新兵器の出現は茲に重大なる變革を來すものなることを認識して、外交及び國防の方針を決定するの要がある。

二、支那事變の眞因

支那事變の眞因は、單に蔣介石政權の容共抗日の政策にあらずして、實に自國勢力の崩壞を防止せんとする其の背後勢力の對日共同戰線たることを認識して對處するの要がある。

三、支那の將來

支那民族は從來の如く安居樂業の個人主義に滿足するものに非ずして、新なる民族意識に依る近代國家となるべきことあるを豫見し、一時的彌縫策を排して徹底的處理對策を定むるの要がある。

四、國力（經濟力）の基準

國家の經濟力は資本中心の時代より、今や國家目的のために動員されたる國民勤勞力の有効量に重點が移つたのである我國は一億の人口と日、滿、支を通じ豐富なる資源とを有するを以て積極的に國力擴充の方途に出づるを要する。

五、世界の新秩序――生々發育の世界觀

世界の現狀は主として過去の武力に依り打建てられたるものなるを以て現在の實勢力に副はずこゝに新秩序建設の要求があり、歐洲問題はその動きの先驅である。而して世界は一の生命體として生々發育、進化發展の一路を辿るべきものなりとの世界觀、人世觀に基き、日本民族がその天職的使命を自覺し、この轉換期に積極的に指導的役割を果すことは吾人に課せられた最高の義務である。

第三、議會政治の刷新と吾黨更生の指標

我國の議會制度は飽くまで國體の本義に則したものでなければならぬ。故に今日の急務は所謂歐米流の政治觀を淸算し我國獨自の見地に立脚して議會制度に改善を加へ以てその任務を完うするに足るべき强力なる政治組織を確立することである。而してこの目的達成のためには、議會政治運行の根幹たる政黨自らの革新更生が先決問題である。

元來政黨は輿論を代表し、大政翼贊の重責に當るべき天下の公器である。然るに從來一部の者この本質を忘却し、自ら公黨の面目を蹂躙して憚らざるものあるを遺憾とする。故に政治革新の第一歩は先づこの黨弊を刷新することである。

吾立憲政友會は立黨正に四十有餘年、常に積極進取の一路を辿つて國運の進展に寄與した、然るに今や世運は一轉して興隆日本の世界的使命は益々重大を加へ、これに對處すべき政黨革新の要亦切なるものがある。仍て吾黨は茲にその傳統を發揚して黨弊を刷新し、敢然起つて更生刷新の大道に歩を進め、國家奉公の誠を效し、以て難局打開の使命を完うせんが爲め吾黨更生の指標を次の如く決定した。

一、吾黨は國體の本義に基き、大政翼贊の國民意志を綜合統一したる一大政治組織體として存在し、國家最高の目的達成に邁進す。

二、吾黨は情實による人的集合體にあらずして、指導理論による道義的結合體たることを本旨とす。

三、吾黨は一意國家を念とし、眞に國民の總意を指導し、且つこれを反映し得べき國民運動の組織體として存在す。
四、吾黨は政黨の生命は政策なりとの主張を堅持し、革新の政策を樹立し、國論を指導して時艱克服の重責に任ず。
五、吾黨は廣く全國の青壯年層に呼びかけ明日の日本を擔任すべき若き大衆と共に相携へて、新なる國運の開拓に精進す
六、吾黨は廣く門戸を開放すると共に、進んで社會各層同憂の士と相協力して國策の遂行に努め、この劃期的新時運に對
　處せんとす。
七、吾黨は盛んに經綸を行ひ、世界無比の立憲國日本を完成し、日本民族獨特の世界的使命遂行の大任に當らんことを期
す。

第九　中島總裁就任後の諸行事

一、青壯年指導の政治講習會

政友會は、前記中島總裁が『革新政策』末尾に於て宣明したる『廣く全國の青壯年層に呼びかけ純眞にして熱情に燃ゆる若き大衆と共に相携へて盛に經綸を行ふの實力と氣魄とを養ひ』云々とあるに依り、愈地方青壯年黨員の指導に乘出すことゝなり、その第一着手として、政治講習會を開くことに決し、今回各府縣支部より三名内外づゝを選ばしめ、總計百六十餘名を招き、去八月二十五日より三日間、麴町區永田町小學校に於て、第一回講習會を開いたが、小高幹事司會の下に田邊幹事長の開會の辭に始まり、宮城遙拜、國歌齊唱の後、山崎顧問の勅語奉讀あり、次いで戰歿將士英靈に感謝と、出征將士武運長久祈禱を捧げ、終て中島總裁より別項の訓示あり、左の通り各講師の三日に亘る講演があつた。

一、農村問題　　農本政策特別委員長　助川啓四郎
一、我黨の革新政策　　政務調査會長　東郷實
一、財政問題　　財政部長　小笠原三九郎
一、國際情勢　　外務省歐亞局長　西春彦
一、同上　　内閣情報官　林群喜
一、同上　　陸軍歩兵大佐　大熊譲
一、東亞再建　　大本營海軍報道部課長海軍大佐　東亞新秩序建設特別委員長　堀切善兵衛
一、中小商工業對策　　國民經濟再組織特別委員長　木暮武太夫

右夫々有益なる講演があつて、二十七日午後講習修了の證書を授與し、島田顧問の挨拶、田邊幹事長の閉會の辭あり、一同午後五時より東京會館に於ける招宴に臨んだ。尚今後年々その規模を擴大し、全國的に吾黨の主義政策を徹底せしめる筈である。

中島總裁の訓示

今回政治講習會を開催し全國各府縣に亘つて優秀なる黨員の參加を求めました所、諸君が多數黨員の中から選拔せられ

折柄の暑さと多忙とを厭はず遠路の所折角參加せられたる熱意に對し厚く敬意を表する次第であります。

立憲政友會は昨年以來紛爭を續けてこの非常重大時下に於て政黨としての機能を十分に發揮し得ざる悲しむべき狀態にあつたのでありますが、今春四月斷乎として肅正を行ひ、革新の大旆を揭げて更生政友會の巨歩を踏み出したのであります。今次の講習會の目的は要するにこの革新の本義を全國に高調し國民の理解と奮起とを促さんとするものであります。

近時革新の聲は流行的となり到る處に於て叫ばれて居りますが、これらは概ね議院制度の改革とか又は省の廢合を骨子とする行政機構の改革とか官吏制度の改革とか唯單に國內問題のみを基調とする區々たる革新意見であつて、眞の革新の根幹を掴んだものはないのであります、眞の革新の本義は運命的に變革する世界の大勢を達觀し、これに對處すべき國家體制の再建に基調を置くべきであつて、我が政友會が最近宣明する所のものであります。而してその革新の根本理念とする所は現下世界の大勢は攻防兵器の非常なる發達に伴ひ各國戰力の上に一大變革を來し、爲に舊戰力に依つて打建てられたる現在の世界秩序は既に不合理となり新しき秩序が再建せらるべき世界的大變革の重大時期に直面したのであります。支那事變及び歐洲に於ける最近の紛爭の如きは要するにこの世界的變革の片鱗に過ぎないのであります。

隨て支那事變の處理に依つて直ちに東亞の平和を待望するが如きことは出來ない。假令支那事變は終局を見ると雖も、日本帝國はこの世界的變革の動亂から脫却するといふことは絕對に出來な得いのであります。故に吾々日本民族はこの空前絕後とも言ふべき世界的變轉機を把握して猛然として前進し、この機會に於て肇國以來一貫せる雄大なる皇謨を實現し日本民族に課せられたる歷史的大使命を完成するの勇斷に出なければならないのであります。（拍手）

これが爲にはどうしたら宜いかと言ふと、從來の政治、經濟、外交等、これ等は唯單に平和の時に於ける國內問題を基調とせるものであつて、劍戟の間に國運を賭して世界に飛躍せんとする非常國策遂行の爲には殆ど用を爲さないのであります。故にこれ等の政治、經濟、外交等諸般に亘つて全面的に革新を斷行し、對外的に國家總力を發揮し得る國家體制を

創建するといふことが聖業達成の根幹であるのであります。政友會の提唱する革新の根本理念はこの崇高にして雄大なる世界國策に順應するものであり、我が革新政策はこの根本理念の上に打立てられたるものであるのであります（拍手）

これより各講師からこれ等の革新政策の大綱に關してそれぞれ講述せらるゝ筈でありますから、能く修得せられて、凡ゆる機會にこれを宣揚せられんことを望むのであります。

尙ほ終りに特に一言申上げたいことは、この革新政策を遂行する爲には强力なる政治組織の結成を必要とするのでありまして、强力なる政治組織の上に立つ計畫にあらざれば、徹底せる强力政治を斷行し得ざることは過去數次の內閣の實績に徵して明かなる所であります、（拍手）故に吾々は强力なる政治組織の結成、卽ち强大なる政黨の建設に對し、凡ゆる工夫と努力を拂ひ、これを達成しなければならないのであります。（拍手）

然るに最近國民の中には政黨を忌避し、政治に關係せざるを潔しとなし、これを誇とするの傾向が少くないのであります。斯かる風潮は、政治が唯單に國內問題に限定せらるゝ時代に於ては看過し得るが、國家が運命を賭けて對外的に突進しつゝある現狀に於ては看過し得ざる不心得であると申さなければならないのであります。（拍手）

抑々對外、國策の遂行はそれ自體が國民全體の政治行動であります。故に國民は眞劍に政治に參與し、自己の政治的責務を明確に認識し、忠實にこれを遂行する限りに於て、初めて國策に對し完全なる協力を爲し得るのであります。（拍手）故に戰時下に於ては國民が政治に參與するといふことは、決して國民に與へられたる權利ではない、重大なる義務であることを確信しなければならぬのであります。（拍手）然るにこの貴重なる事理を辨へずして政治を忌避し政治を蔑視するが如きは、實に不忠なる行爲なりと斷ぜざるを得ないのであります、（拍手）

故に諸君はお國に歸られたならば、革新政策を宣揚せられると同時に、この國民の重大なる錯誤を是正せられて、我が黨の强化擴大に對して御盡瘁あらんことを切望して已まないのであります。（拍手）これを以て私の挨拶と致します。（拍

手）

田邊幹事長の開會の辭

諸君、本日茲に政治講習會を開催するに當りまして全國各府縣より選拔せられたる各位に對し一言御挨拶を申上げることは私の光榮と致す所であります。

我黨は去る四月黨大會に於きまして滿場一致中島新總裁を推戴し更生の第一歩に踏み出して以來、この非常時局に對する我黨の重大なる責務を痛感致しまして內外の諸政策に付き日夜これが檢討確立に努力を致して參つたのであります。時恰も九月の下旬を中心として全國各府縣に於て府縣會議員選擧が行はれることに相成つて居りますので、この機會を利用致しまして、我黨の革新政策の基本の大綱、世界政策の根本基調、その他內外庶政に關する具體的全貌を廣く全國民に徹底せしめたいと存じまして、全國支部に呼び掛け各支部より眞に政治の革新を理解致し、且つ之を實現するの熱意ある所の人物にして、又人格も勝れたる方々の派遣方を要望致したのであります。然るに各支部とも本部のこの計畫に深く參同せられて、今日茲に多數各位の御出席を見ました次第であります。申すまでもなく各位は我黨三百萬黨員より選拔せられたる有爲の方々であります。來るべき府縣會議員選擧は固より、我黨の將來の發展は懸つて諸君の双肩にありと言ふも決して過言でないと考へて居るものであります。

諸君、今や內外の時局は極めて重大でありまして、東亞の再建も若し對策に一歩を誤れば國家の存亡に關する重大問題を惹起致すのであります、願はくば國運の將來に深く思ひを致されて諸君に課せられたる重大なる責務を自覺せられて、本日より向ふ三日間に亘り、中島總裁を初め各講師の說示せらるゝ所の說を十分に玩味せられ、又體得せられて我黨の前衞隊として國家の爲に御奮鬪せらるゝ素地を造らるゝやうこの機會に於て衷心より切望致すものであります。これを以て一言開會の御挨拶と致します。（拍手）

二、銃後經濟調査

政友會に於ては先般來、各顧問、總務、幹事等を手別けして、全國各府縣に派遣し、地方の銃後の施設並經濟調査を行つたが、其結果政務調査會に於て之を基本として調査を進め、一日も早く政策に織込むやうにしたいと、幹部會に於て座長宮田光雄氏より、要望するところがあつたが、斯くて前記總裁の『革新政策』聲明や、引續いて發表せられた『立憲政友會の主義政策要綱』等に示されたる各種の政策は、矢繼早に實現に向て突進するの現狀であつて、斯の如く言行一致、寸隙を剩さぬ精勤振りは、從來未だ曾て見なかつた處で、每年八月は暑中休暇として、黨幹部は山海に避暑するか又は地方に歸散して、本部はガラ明きを呈するのが例であつたのに、今年は銃後の政黨として、暑休を全廢し各員必死の努力を以て、國政の重きに任ずるの緊張振であり、殊に更生政友會の面目を萬全に發揮しつゝあることは、近く十年其例を見ざる欣快事である。

三、日獨伊樞軸の問題

政友會では、去八月四日中島總裁邸に緊急總務會を開き、左の聲明を發表して政府を鞭撻したが、此は別項總裁の『革新政策』の第四項に『國是を同うする國家群と同盟を締結することは聖業達成に緊急の要事なりと信ずるのであります』とある如く、此際吾國として躊躇逡巡することなく、斷乎その實現に邁進すべきことを要望したものである。

聲明

日獨伊樞軸の强化を圖るは、世界の情勢に鑑み喫緊の要務たり。然るに未だ之が成立を見ざるは甚だ遺憾に堪へず。政府は英斷以て速かに其の達成を期すべし。

右の如く敢然として日獨伊樞軸强化の必要を主張し、之を政府に致して鞭撻するところあつたが、平沼內閣の優柔不斷なる、躊躇逡巡して之を斷行すること能はず、遂に獨ソ兩國の不可侵條約の締結を見るに至て、吾國は世界の外交舞臺に於て背負投げをくわされたるの觀がある。それで今後ソ聯はその全力を擧げて極東に進攻し來るの恐れありとし、速にこれと不可侵條約を結ぶか、或は又反對に英米佛と結んでソ聯に對すべしと說く者がある。併しながら吾國は左樣なる一時の權道に辟易して、その態度を二三にする必要はない。ソ聯は共產主義を以て全世界を赤化せしむることを以て國是とするもので、假令一時これと和したりとて、幸福と平和は決して出現するものに非ず、却て其乘ずる處となつて、永遠の禍害を被ることは明かである。故に我國の國策は飽まで防共排赤の一途でなければならぬ。又英佛の如きは今日、難境に立てば遽に態度を一變して吾に媚態を呈するけれども彼等は今日まで援蔣守我の狡策を以て吾が聖業の進行を防害し來りたるもので、之を握手することの危險は、ソ聯のそれと少しも變らず、若誤て彼等の乘ずる處となるならば、今日の討蔣興亞の聖業は、九仞の功を一簣に缺くの結果となるであらう。故に吾國は飽まで旣定方針に則り、自主獨往の立場に在て目的完成に邁進しなければならぬ。そうして其爲には日獨伊樞軸に關する旣定方針を變更すべからずと爲し、去八月二十三日總裁邸に幹部會を開き、左の決議を行ひ卒先して之を天下に聲明したのである。

聲明

東亞の新秩序を建設し世界の平和に貢獻するは我國不動の根本方針なり、偶々獨ソ不可侵條約の成立を傳ふるものありと雖も、日獨伊樞軸に關する旣定方針は變更の必要を認めず、政府は宜しく國際情勢の變化に善處し迅速果敢適正の措置を執り進んで戰時外交の機能を發揮し以て聖業達成に萬遺憾なきを期すべし。

望月山崎兩長老等の合流復黨

望月圭介、山崎達之輔兩長老は、曾て臺閣に上り、政界に重きを爲す人々であるが、兩氏を始めとして別項『兩陣營の兩院議員』中記載の山崎氏より金井氏に至る十一代議士は、先年久しき我黨の內部紛紜に煩はされ、時局認識を異にするが爲、數年間黨外に去り昭和會を組織して居られたが、今回吾黨の分裂更正に依て、政見相同じき分子のみに遽過選擇せられたるを見て、中島總裁の適任を認め、相次いで合流復黨せられた。これは吾黨の非常なる强味で、擧黨之を歡迎して居る。

總裁單一化は無意味で見込無し

政友會は分裂して、中島久原兩總裁の下に各統率せられて居る。久原派は自ら正統を稱して居るけれども、何の權限なき鈴木前總裁の指名に依て出來た代行委員や久原總裁の如きが、正統を理由づける根據とならぬのは言ふまでもない。却

て其中島總裁と久原總裁とは、正潤の關係に立つものであるから、久原派が潔よく解黨して吾黨に歸順する以外に、兩派の融合歸一など云ふことはあり得ない。殊に久原鳩山兩氏等の十九氏は、曩に我黨が之を除名したものであるから、この除名が取消されざる限り、久原氏は歸參もかなわぬのである。

然るに過般來總裁單一化運動なるものが起て、其中心として、太田正孝、犬養健、武田德三郎、岩瀨亮、松村光三の五氏が主動者となり、其他數氏の共鳴があつて、先日東京會館に其『全國大會』と稱するものを催うし、久原房之助氏及同派の幹事長岡田忠彦氏が出席し、總裁單一化は至極同感であると申述べられたと聽くが、これは恐らく久原氏の手先である大阪方面の人々に、太田氏等が乘ぜられて居るのではあるまいかとの觀測が、政友會では行はれて居る。

中島總裁に於ては、今更左樣な運動を一切認める道理がないから、その派からの懇請があつたけれども、黨幹部は言下に出席を謝絶した。卽ち單一化運動なるものは、絶對に成功する氣遣ひの無いものであることが明瞭になつたのであるから、二の矢を繼いで、之を進めて行く望みに斷絶したのである。

故に此事情が明かになつた以上は、此運動に關係した諸代議士も、潔よく斷念して黨に復歸するであらふし、之に關係した地方黨員諸君も、同樣矛を歛めて正道に就くものと信ずるのである。

元前代議會久原派へ解消勸告

去六月十一日福井樓に於て政友會元前代議士會が開かれ、左の宣言書を發し、久原派の卽時解消の勸告を決議した。

決　議

一、吾人は一致結束、中島總裁の主義主張を支持す

一、吾人は久原黨の卽時解消を勸告す

中島派の金光庸夫氏拓務大臣となる

從來衆議院の正副議長に當選すると黨籍を離脱する慣例になつて居るので、從て其職を去る時は、手續を用ひずして當然黨籍を回復するのが、政友會の定めである。それで金光氏も其例に從ひ、一時黨籍を離脱したが、今回拓務大臣に親任せられて、副議長を罷めた爲に、當然政友會に復歸したのである。そうして別項にも記載の通り、曩に氏を吾黨幹事長に前田島田中島三代行委員より推薦した時、鳩山代行の反對で成立しなかつた位で、氏は中島總裁と極めて親善の間柄であり、其絶對の支持者であるから、政友會に復歸した氏は素より中島派卽ち純正政友會の人である。吾同志一同はわれ等の代表として氏を現內閣に送つたことに對し滿腔の喜びを以て、遠からず大に祝賀の意を表せんとして居る。

久原氏の國民協議會案

序でながら此際久原氏の今回提唱せられた『國民協議會案』なるものを檢討して見ると、久原氏は曾て主張した一國一黨論は、最早必要ないものと打消し、代て一國一體の組織と云ふことを言ひ出し、それには地方代表、職能代表、國民代表（衆議院議員）を以て主體と爲し、外に貴族院議員、文武官吏並に其他普く政治的要素を網羅し『以て國民の總意公論を政治に公正に反映せしめるものとし、且又一切の黨派的對立及朝野官民の對立を協議に依りて解消し、茲に一國一體の實を擧ぐるものとすること』と云ふのであつて、更にその末項には『右協議機關は其の構成員をして、法律及主要なる國家的施設の立案並に施行に參畫せしめ、以て行政機構の改革と官吏制度改革の目的を同時に達するものとすとあり、而も兩院も政黨もそのまゝ存在して差支ないと言つてあるが、吾々は之を讀んで如何にも不怪議に堪へぬ。かゝる方法を以て

一切の黨派的對立や朝野の對立を解消することが出來るのなら、何もいろ〳〵の政黨を存在せしめて、久原氏自身がその一つの總裁となり、鋭く他の黨派に對抗する必要はないのである　、一日も早く自黨を解散して範を示されることが至當であると思ふ。又この協議機關が法律の立案や國家的施設の施行に參畫するのならば、議會もいらず、政府もいらず、日本は國民協議會一本で政治をやつたらよいのであつて、手間雜作のいらぬことであるが、そんなことが果して行はれる可能性があるや否や、又そんなことが帝國憲法に背叛する不臣行爲でなきや否や、吾々は嚴に之を探究せんと欲する。然るに久原派に於ては本案及新產業法案（久原氏の所謂皇道經濟案）を黨議として採擇し、更に特別委員に附托して檢討の結果九月十一日其成案を發表したが、斯の如き重大突飛なる變革政策を、無造作に黨議として決定する其放膽に喫驚するものは、ひとり著者のみではあるまい。東京日日新聞の如きは、かゝる案は見て居るだけなら妖氣にあてられる心配はないと冷評して居るが、何れは將來永く其派に禍ひするものとなるであらふ。

第十　興亞國策研究會設置

從來中島總裁の支辨に依て、多年有益なる研究を爲しつゝある東亞國策研究會は、八月三日午後五時より東京會館に總會を開き、その擴大强化を圖る爲、會則の改正を行ひ、會名を興亞國策研究會と改稱することに決定し、左の如く聲明を發すると共に、新設員を決定した。本會は政黨政派に拘泥せず各方面の人々を網羅し其内第一回として左の如く有力者を選定したが今後時局の進行に連れて、その研究は倍々重要となるであらふ。

聲　明

曩に支那事變の勃發するや吾れ等同志相謀つて東亞國策研究會を設け新東亞體制並に國内體制の基本原則に關する成案を得これを天下に發表した、然るに革新の意氣に燃ゆる國民各階層の共鳴を得てその反響頗る大なるものがあつた。依つて我等は更に志を同じくする具眼達識の士と廣く相提携して進まん事を期し、こゝに會名を「興亞國策研究會」と改め、その組織を擴大しその機構を强化する事ゝした。今や在來の世界秩序は一大轉換期に直面し、東亞秩序も亦根本的變革を遂げんとしつゝある、而して新しき東亞秩序の創建が我が日本民族の指導に依つて達成せられるべきは必然の歸結であり、肇國の理想に基く國民の使命である、この曠古の大業を遂行するためわれ等は抗日蔣政權の潰滅を期すべきは勿論、わが大陸政策を妨ぐる第三國の策謀を斷乎として排除すると共にわが民族的理想を理解し、協力する諸國とは更にその盟約結合を强化しなければならぬ。而して世界秩序の劃期的新段階に卽應せしむるため國内諸體制の革新を斷行せざるべからざるは國民の熱烈なる要望である。依つてわれ等同志は興亞の根本國策と國内諸體制の革新政策を樹立し、國家の進むべき處を明かにし以て天壤無窮の皇運を扶翼し奉らん事を期し、これを天下に聲明するものである。

△顧問　山崎達之輔、松方幸次郎、伍堂卓雄、水野錬太郎、島田俊雄、望月圭介、末次信正

△參與（第一回發表）名取和作、米田實、松室孝良、藤澤親雄、齋藤恆、佐藤安之助、木村增太郎、北島多一、皆川治廣、篠原英太郎、千石興太郎。

△理事長　堀切善兵衞

△副副事長　高木陸郎、山道襄一、清瀨一郎

△常任理事

（庶務會計部）　西方利馬、窪井義道、八角三郎

（研究部）　河上丈太郎、田子一民、木暮武太夫

（教育部）　道家齊一郎、片山哲、木村正義

（出版部）■伊豆富人、赤松克麿、助川啓四郎

第十一　中島知久平氏は如何なる人物か

その略歴と識見抱負

海軍を辭して飛行機會社を作るまで

中島氏の名は以前からよく知られて居つたけれども、今度の政友會分裂騒ぎで、一層深く世間の注目をひくやうになつた。而もそれは全然誤れる宣傳に依て、如何にも辛辣な、萬事を金で解決せんとする、野心家のやうに傳へられて居る。これは今度の問題が、ある危險なる野心家の爲に惡用せられて、如何にしても黨内が纒まらぬやう、まとまらぬやうに持つて廻られ、而も常に一方の對照が常に中島氏に置かれてあつた關係から、都合の惡いことは皆氏が負はされ、攻擊せられたから起つたことであつて、今度の事件の眞相を最も公正なる立場に在て調べて見ても、また嚴正なる事理に就て判斷しても、中島氏は少しも惡い量見が無く、卑怯な態度を執らず、金錢をバラ撒いて相手を買收したやうなことは寸毫もなく、却て默々として自己を落付け、大所高所に立て、國家非常時局に處する政黨の進退と云ふ事に重點を置いて、行動した事は上來述べ來つた事實がこれを證明するから、更にこれを絮說する必要はない。依てこゝには氏の個人的方面、卽ちその人格、その過去の經歷、現在の立場、實力、思想及び抱負などの一端を記述して、讀者の參考に供することゝする。

中島氏は、明治十七年一月十一日、群馬縣尾島町に生れた。嚴父条吉翁は、久しく同町の町長を勤め令名のあつた人でその地方の名望家である。知久平氏はその長男として生れたので、當年取つて五十六歳、正に思慮圓熟、氣力旺盛の男盛りである。氏に面接して何人も感ずる特長は、泰然自若として言葉數少く、人に對して深切慇懃、而もその度を超えず、人を讒らず自己を衒はず、多くの忙しい政治家や實業家に見る、絶えずイラ〳〵と焦燥を感じて居るやうなところは少しもない（此は末尾に記載する篠原義政氏の話に依れば成程と頷かれる理由がある）丁度悟つた禪宗の智識のやうな、すが〳〵しい氣風である。

更に深く氏を考へて見ると、これは二十五年前に折角海軍大學校まで卒業した前途多望なる海軍將校の地位を一擲し、民間に在つて飛行機の製作に從事して以來、幾多の艱苦と戰ひつゝ、傍目もふらず奮鬪し續けたその間に於て、天稟の英資を、鍛錬し研ぎ澄ました結果であらふかと思はれるのである。そうして機關科の出身であるから、その途の技術に委しいのは當然であるけれども、この人が何時の間にあれほど政治や經濟の學問を深く研究し、透徹した新智識を取得したかと思はれる位であつて、その革新政策に對する意見は、別項記載の通り、氏が自ら筆を執て記述したものであるが著者も通讀してよく分らぬから、氏を訪ねてその說明を聽き、漸くその概念だけを會得し、之を解說して讀者の參考に供したゞけであるが、氏の之に關する意見はまだ〳〵深く廣く、且つ之を實行するの決意牢固たるものである。

中島總裁が其革新政策中に、强力政黨の上に鞏固なる政府を打立て、之に依て力强い政治を行ふべしと主張して居るのに對し、久原氏は其著『國民協議會案』に於て、『强力政黨論の如きは苟くも政黨に關心を持つ者の凡てが念願し欲するところであるけれども、政界革新の爲には何等意義をなさぬものである』と攻擊して居るが、然らば議會政治に於て自家の政見は何に依て之を實行し、如何にして政界を革新するのであるか、眞に諒解することの出來ない珍論と言はねばならぬ。久原氏のことは兎に角として、吾々は更に中島氏に戻つてその少年時、青年時を振返つて見やうと思ふ。

中島氏は少時農學校に籍を置いたと云ふが、完全には中等學校も修めず、十八歳で東京に出で私塾などで學問をして、明治三十六年二十歳で海軍機關學校に入學し、三年の後卒業したが、その時の成績は三番で、恩賜の銀時計を拜受したと

は、同窓の友人古市中將の語るところである。兎に角少年時代より非常なる努力家であつたのである。

斯くて氏は海軍機關少尉から中尉に進んだ頃つくづく思ふには、貧乏國日本が一隻何百萬圓何千萬圓と云ふ巨費を投じて軍艦を建造することは、財政的に堪へ得ない處であり、各國の建艦競爭に對して不利益此上ないことである。又此頃急速に發達しかけて來た飛行機の、空からの攻擊に對して對抗の設備をするのでなければ、到底國防を全うすることは出來ない。故に吾國はこの建造費用の最も少い飛行機の研究に力をそゝがねばならぬとて、いろ〳〵調査の結果を添へて之を上司に建白したのである。そうして斯く信じた以上は、一日でも軍艦に乘つて日を暮して居ることが　陛下に對して不忠であると思はれてならぬから、此事を訴へて陸上勤務と爲り、飛行機の研究を致し度いと願つたところが、上司は之を許して、海軍大學校の飛行機專科に入學を命じたのである。時に明治四十二年、二十六歳の時であつた。

周知の如く海軍大學校は、各種の專科に分れて居り、學生は皆大尉以上になつて入學するのであるが、氏は特に中尉を以て之に入學したのである。ところが當時我國の飛行機研究は頗る幼稚なもので、飛行機專科などと言つても、特に其途の專門家があつた譯でなく、氏はたゞ同校に籍を置いて、自ら各種の文獻を渉獵して研究に耽つたゞけで、當時吾國に於て飛行機のことを最もよく知つて居るのは、中島氏その人であつたことは當時を知る同窓生の語るところである。かくて氏は明治四十五年に海軍大海校を卒業したが、その時分世界で飛行機の最も發達して居るのはフランスで、其内にアメリカに水上飛行機が出來たから、その年の六月氏は海軍省より同國へ派遣せられて之を研究し、その秋歸朝したのである。其後大正二年二月横須賀に初めて海軍飛行機工場が新設せられたが、工場とは名のみで、實は倉庫を改造して工場に仕立てたものであつた。そこで氏は壞れた飛行機を修理して、自分で操縱飛行して見たりしたが、素より完全には行かなかつたけれども、斯くする内に飛行機に對する理論的及實際的の自信をます〳〵固めたのである。

海軍に於ても此頃から、國防上飛行機の必要なることを痛感するに至り、大正三年春には、遂に氏の熱誠に動かされて氏を當時最も飛行機の發達して居つた、フランスに留學せしめたのである。ところが其年の八月になつて世界大戰が勃發した爲に、惜しい研究を中止して氏は歸朝した。そこで當時横須賀に出來て居つた小規模の飛行機工場の工場長を命ぜられたが、海軍は愈々此工場を擴張して、積極的に飛行機の研究と製作を行ふことになつた。然るに此に對して氏の意見と上司の意見とは全然對立するに至つたのである。

それは中島氏の意見では、軍器は日進月歩、變化が非常に激しいから、之を年度で限る豫算に依り、一旦決したら容易に動かすことの出來ぬ計畫に從てやらねばならぬ官業では、到底充分の發達を期し難く、又急場に間に合はぬことがある。殊に新進の飛行機事業の如きそれである。卽ち今年の夏頃豫算を編成して、其が年末の議會に提案せられ、明年の三月末に兩院を通過し、漸く夏か秋になつて實行豫算が出來、計畫が立つて製造に着手する、而も中途之を變更したい事が起ても容易に其自由がきかず、又經費の追加も容易に出來ない、こんなことでは到底急場に間に合はず、又思ふ存分の發達が出來るものではない。故に諸外國に於ても、殆んど皆飛行機工業を民營に委ね、政府は優秀なる技術員や、各種の部分的發明品を以てそれらの民間工場を援助して行くから、どし〳〵發達して居るのである。然るにフランスに於ては、折角民營で發達したものを官營に移した爲に、著しく後れてしまつた現狀である。だから日本でも此際斷然民營に委ね、之を援助指導して急速なる發達を圖らねば、今日眼まぐるしく變轉する國際間の勢力對抗に處して、完全なる國防を行ふことが出來ない。今が實に一刻を緩うすべからざる時機であると、强硬に主張したのである。

是に對して上司らは、今左樣な空想を抱いたとて實行出來るものではない。誰も之を民間でやり得る者が無いではないか、と言ふのであつた。中島氏は之に對して、やる者が無ければ自分が官を辭してやる、これはどうしても國防上やらねばならぬとて、上司の言ふことも肯かず、遂に當時の海軍次官鈴木貫太郎中將に會ふて、熱心に自分の意見を述べたのである。すると鈴木次官は却つて之に共鳴して、日本の軍器の遲れて居るのは、全く君の言ふ通り官業の爲だから、君が

之をやるなら大にやれ、軍でも出來るだけ援助するからと言はれたので、氏は感激してます〳〵其方針に邁進するの腹をきめたのである。

そこで氏は大正六年、世界大戰の眞最中に、病氣を理由にして官を辭し、鄉里に歸つて飛行機工場の設立に取かゝつた。そこで上司に於ては大に怒つて、命令を背かぬは怪しからんとて、憲兵をして其家を見張らしたりして取締を加へたが、友人等も氏を訪ふて歸任を勸め、早く歸らぬと軍法會議にかけられて、三年の懲役に處せられるかも知れぬと云ふ噂がある、と忠告をした者もある。そこで氏は一先横須賀に歸り、長官に逢ふて熱心に所見を述べ、若し肯かれずして自分を懲役に處せられるならば、此まゝで早く處罰せられ度い。一日も早く其刑期を終へて仕事をやり度いからと必死の覺悟を示したので、長官も其熱誠に感動し、それほどの決心があるなら止めない大にやれと言つて、同年十二月遂に豫備役に編入せられたのである。

そこで氏は喜んで鄉里に歸り、其翌年七月春、群馬縣太田町に小さい工場を建てゝ飛行機の設計を開始したが、其時の職工は僅に十四人であつた。當時中島氏と同僚で、主計大尉として横須賀工廠に勤務して居つた、新庄信之と云ふ主計大佐が今東京の某實業會社に居るが、其人の話に、同僚の友人等が或日曜日に、中島の飛行機工場を見に行かう、と言つて太田町へ行つて見たところ、何か古鐵材や木材などで、怪しげな工場を作つて居るから、內部へ入つて見ると、螺旋形の梯子がかゝつて頂上へ上るやうになつて居り、眞中に飛行機の模型が吊されて、ブン〳〵廻つて居る。下から見上げてオーイと呼ぶと、上から梯子を傳つて下りて來たのが中島氏で、見れば大尉の制服の腕のモールを引ちぎつて其まゝ職工服に利用し油にドロ〳〵汚れて職工と共に眞黑になつて働いて居る樣子である。どうだ飛行機は出來るかと問へば、出來ると答へて泰然たる態度に、一同矢張變つてるなとクス〳〵笑つて辭去したことがある。あの小工場が今日世界一の飛行機會社とならふとは、誰が豫想したものがあらふ。中島君は工廠時代でも不屈の氣象で、ある敬禮好きの上官に頭を下げぬので御機嫌の惡かつた珍談もある。兎に角若い時分から腹の据つた偉い處のある人物であつたと語られた。中島工場は兎に角斯樣にして必死の試驗時代が二年間續いて、遂に本物の飛行機製作は開始せられた。

其當時に於ける氏の奮鬪が眞劍のものであつたことは、其後相當工場が大きくなつて多數の職工を使ふやうになつても氏は自ら機械を運轉して右手の指に大負傷をしたことなどある位で、其爲に宿直室に寢て療養して居ると、或日神戸の毛織王で名高い川西清兵衞氏が突然訪ねて來て、貴下の事業は國家的の重要事業であるから、是非自分も出資して共に經營に携はり度いと申込んだのである。それで之を承諾して同額出資のことに話が纏り、中島氏の方は設備萬般と、これ迄の研究の結果其他を提供して、之を七十五萬圓と見積り、此に對して川西氏は現金七十五萬圓を出資して、百五十萬圓の合資會社を新に設立したのである。

合資會社は設立せられたけれども、經營の進むに連れて、兩者は到底兩立し難いものであることが分つて來た。それは川西氏は上方商人で、採算と云ふことには寸分の拔目が無いが、中島氏の方は元々軍人出身で、國家の爲に此國防を完成すると云ふ意氣込でやつて居るのだから、目前少々の損得は之を度外に置いてやる。又將來を慮つて信用を第一に考へてやるのだから、事々に意見の對立を招き、うまく調子が合はない。

歐州大戰が終りに近づいた頃である。アメリカから飛行機の發動機を百臺賣りに來たが、百五十馬力のもので、値段は總額百五十萬圓ほどであつた。中島氏はそれを買はうと言つて陸軍省に相談すると、軍ではそれを裝置した飛行機を引取るから是非買取つてくれとのことであり、三井物產に交涉すると、代金は立替へるから買ひなさいと云ふので、早速その買受契約を結んだのである。然るに川西氏は是に反對であつて、戰爭も遠からず濟むらしいし、今急いでそんなものを買ふのは不利である。だから一旦破談にすれば先方も困つて、きつと値段を下げて來る、欲しければ其時に充分叩いて買ふたらよいではないか、と云ふのである。併し信用一本で立つて居る中島氏は、それはいかぬ、假令どうあらふとも、一旦

約束したものを破談にすると云ふことは不德義であると言つて肯かない。それでも西川氏は自分で三井物產へ行つて、勝手に破約してしまつたが。已に發動機の荷物はアメリカを積出したあとであつて、間もなく日本へ着いたから、中島氏は之を引受けて全部工場へ搬入さしたのである。

これを見て川西氏は大に憤慨した。中島の商賣下手にも程がある。こんな馬鹿正直な驅引と云ふことを知らぬ男と共同して居つては、將來が案じられると云ふので、爾來一層双方の仲が圓滑に行かぬやうになり、大正八年の秋ごろ、中島氏が東京に出て居る留守中に、川西側は事もあらふに會社の生みの親である中島氏を、解雇すると云ふやうな亂暴なことをやつた。そこで遂に別れ話が出來て、中島氏から川西氏へ七十五萬圓の金を拂つて手を切り、川西氏は其年の暮に部下を引連れて神戸へ歸て、自分一人で飛行機工場を作つたのが、今の川西飛行機會社である。

世界一の大飛行機工場は日本に出來た

此を宣傳しないから知らぬ者が多からうふ

それからと云ふものは中島氏はいよ／＼獨立獨歩、頂天立地の自由なる方針の下に、思ふ存分の經營をする事が出來るやうになつた。前項氏の政友會總裁としての革新政策の中にある如く、今日は已に古い貨幣經濟に依る資本主義で、資金が無ければ仕事が出來ぬと云ふやうな時代ではない。今日は信用經濟時代であつて、適當な制度機構の下に、信用ある者が勤勞力を最效に集結驅使すれば、資金などは少しも無しで、どんな大事業でも出來ると云ふのが中島氏の確信である。獨立した氏は此確信の下に仕事を進めたのである。

『絶對に嘘を言はぬ』これが中島氏の昔からの信條であつて、一旦契約したものでも之を廢棄すれば必ず廉く買へると云ふ場合でも、唯一片の約束を重んじて必ず之を引取ると云ふ物堅さであるから、三井物產でも陸海軍部でも、絶對の信用を拂ふのは當然である。故に原料や半製品を買ふのでも、代金は製品が賣れてからでよい、其代金も現金で支拂はなくても製品を引取る政府や會社等の注文主が保證するから、銀行に預金が無くても小切手を振出してよい、從業員の賃金を始め諸拂も皆同樣に、金が無くても事濟むのである。又絶對の信用があるから、注文をすれば其時に大部分の代金を前渡してくれるので、別段株主を募集して增資したり、社債を起して運轉資金など積んで置く必要がない。つまり一本の信用に生命を托して、眞劍で仕事をする。若眞違つたら腹を切らふと云ふ武士的態度である。

それに中島飛行機製作所の他と異つたところは、公稱資本五千萬圓全額拂込の株式會社と云ふけれども、それは各地方に散在する〇〇〇の工場の設備を、取あへず五千萬圓と見積つて、之を株式會社と稱したゞけであつて、實際は〇〇にも見積るべき設備と資材とがあるが、それに老舗料とでも言ふか權利とでも云ふか、普通に會社を設立する人だつたら、日本一の〇億圓の大會社に見積つて、其株式を賣出すであらふ。けれども左樣な考への全然無い中島氏は、其實價を假に何分の一かの五千萬圓に見積つて居るのである。だから普通の會社の如く、利益の配當を約束して勸誘し、出資せしめた株主なるものが一人もある譯でなく、全く中島氏一個人の所有工場であるから、いくら儲からねば配當が出來ぬ故仕事を引受けぬと云ふやうな事はない。要は正しく見積つて、正しき仕事をすればよいと云ふのである。

即ち此方針を終始一貫守つて動かず、その確乎不動の精神的基礎に立て、全工場の機構を最も合理的に整備し、全從業員の勤勞を有效に集結することに依つて、着々成績を上げたもので、創業以來今日まで僅に二十五年の間に、一社を以て歐洲の某大國の飛行機全製作能力を凌駕する、世界第一の飛行機會社を作り上げたのである。更にその將來の發展は想像の外にあると思はれるが、實に人間の決意と工夫と努力の結果の驚嘆すべきものあるを思はせるのである。

國家の爲には破産しても構はぬ

世界一の飛行機に世界一の軍人を乘せて

陸軍より表彰せられた滿ソ國境の成績

中島飛行機製作所は、十年前中島氏が政界に進出した頃から、氏は直接會社と關係を絶ち、弟喜代一氏を專務として其經營に當らしめ、更に次弟己平氏をして技術方面を擔當せしめて居るが、この兄弟一致の指導經營の下に、着々優秀の成績を擧げて居るのである。そうして此會社の特長は、前述の如く名は株式組織でも、實は中島氏一人のものであるから、配當は少しもせず、皆之を積立てそれを以て工場の充實改良研究に充て、苟くも他に良いと云はれる飛行機に關するパテントが出ると、直ぐ之を買取て製作し取付けると云ふ風であるから、その製造にかゝる飛行機はいやが上にも優秀なるものとなり、世界無敵の我航空軍人に依つて之が使用せらるゝ時、驚くべき成績を擧げるのである。

過般來滿蒙の空に於て、ノモンハン、ハルハ地方に於て、優秀を誇るソ聯機をあのやうに叩き付けて居る飛行機は、卽ち中島機であつて、陸軍大臣に於ては本月始め同省に同社の代表中島喜代一氏を招致して、表彰式を行つたことは新聞所報の通りである。實に中島機徴りせば、今次の大戰成績は如何であつたかと云ふ人さへある位である。

今回○○○○○に於て、○○○○は飛行機○○○計畫を樹て、全國の大飛行機會社當事者を招き、更に一段の○○○を要望した。ところが中には、今遽にそんな尨大○○を整へて、○○の飛行機を製造しても、○○が終つたら注文がぱつたり止まつて、破産しなければならぬやうになる。現に二十年前の歐洲大戰の時がそれで、各國の兵器會社はその爲に、バタ〳〵と倒れたのであるとて、何れも○○○には二の足を踏んだ。ところが中島の方では、專務喜代一氏が之を東京の令

兄中島氏の方へ相談に行くと、氏は言下に之に答へて『由來吾社は國防の完備の爲に貢獻せんとて起つたもので、國家の恩惠を被つて今日に至つたのである。故に國家の必要に應じて○○を擴張し、其必要が無くなつた爲に破産することがあつても、それでよいのだ。○○通りの設備をせよ』と言つたので、喜代一氏は直に歸つて、全力を擧げて大設備を敢行したのである。

それで○○に於ても感激し、さすがは中島だ、決して倒しはせぬと、爾來之を信ずること一層深く、いくらでも○は出してやる、○○も續々するとて、今や巨額の資本を投下すると同樣、漠大なる○○を爲し、その融資の○○をして居るが先月大藏省の委員會の決定で復八千萬圓の特別融資が同社に行はれたことは、新聞所報の通りである。

これに對して長老望月圭介氏の話が面白い『中島は國家の爲になら破産しても構はぬとて、尨大な○○を一言の下に受附けたそうだよ。お互のやうに金無しなら、破産しても潰れてもかまはぬと强いことが言へるが、中島は數億の資産を擁して、之を○○に向つて言ひ切り斷行するんだから法螺ではない本當だ、太い男だよ』と言ふて居るが眞にその通りで、國防の爲になら水火も辭せぬと云ふ愛國の至誠は、眞に恐れ入つたものと云ふの外はない。

獨身で借家の簡素な私生活

思ひ切つた大政務調査機關

中島氏は今尙獨身である。そうしてその市ケ谷加賀町の邸は借家である、熱海にある別莊も無論借家で、繁忙の身を靜養する位の假の宿りであるが、こゝに一切の小事に囚はれぬ氏の性格を見るのである。本邸に在ても綿服を着て、粗末な

袴をはいて端然として客に接する。應接間には置時計がストーブの上に一個据へてあるきりで、額一つかゝつて居ない。其他何の裝飾品も無い。そうして言葉少なに要領だけを談じるのであるが、言一度國策に觸れると、縱横に徹底的意見を吐く。この機關科出身の實業家上りの人が、何時の間にこんな深刻なる政治や經濟の研究をしたのかと驚く位である。

多くの人は前項の總裁としての『革新政策』でも誰か他の者に書かしたのだらふと思ふのであつて、著者もこれは總裁の筆になるものと豫てから聽きながら、尙多少の疑問を存して居つたが、逢ふて意見を敲いて見て、その博識强記に驚いたのである。しかしこんな政策論などはまだ前哨に過ぎない。その胸臆には幾多の深く大きな經倫が藏せられて居ることが想察せられたので、この謙虛にして恬淡、禪僧の如く些の媚態と驕態の無い人に、自然と頭の下るのを禁じ得なかつた。

氏の思想は飽まで穩健中正で、左傾は素より忌むところ右傾專制も亦斷じて不可、立憲國日本は飽まで議會政治を尊重し、之を革新完成することに依つて、國運の隆昌を期せねばならぬと覺悟して居るのである。故に氏の說くところは凡て空論にあらず、之を過去の自分の體驗より考へ、之を最新の學理に照らし、將來必ず實行せねばならぬと覺悟しての言であるから、一言一句脈々として人の肺腑を打つものがある。平素讀書を以て第一の樂みと爲して居るが、更に日比谷の市政會館樓上數室を占有し元衆議院書記官長中村藤兵衞氏を聘し、其下に多數有爲の研究家を網羅して國策研究を爲し、之を多數の人々に知らしめ、自らも每週缺かさず此の講演會に出席して各專門家の說を聽き、世界の最新學說と、現實の情勢を知ることに努め居る態度は、今日過去の古い智識を持ち腐つて、俗惡なる權勢爭奪に憂身を寞することを能事と心得て居る政治家等と、頗る選を異にして居るものがある。

氏の東亞國策研究會は、今度更に其組織を擴大して機能を强化することゝなり、興亞國策研究會と改稱し、別項聲明書を發し、興亞の根本國策と國內諸體制の革新政策を樹立することに向つて邁進し大に爲すあらんとして居る。これに對して例の久原派機關紙は、次の內閣を擔當するメンバーを物色して居るのだなど、何時も乍ら愚にも付かぬケチを付けて居るが、左樣なことまで言つて反對派を攻擊することは、古い〳〵下等な政治ゴロのやることで紳士の業でない。苟も天下の士をへて、之を欺いて自黨の用を爲さしむると云ふが如きことは、權道を以て立つ舊式政治家ならいさ知らず、政界の表街道を堂々と行進する中島氏の、夢想だもする處ではない。氏は實に朝野を問はず、天下同憂の士に呼びかけて、相共に國政革新の研究を爲さんとする誠意の外何物もないのである。

第十二　諸氏の中島氏人物觀

政界進出十年にして、立憲政友會第八代の總裁に推された中島知久平氏の人物に就ては、その昇進の異常なるものある爲、之を嫉妬するもの、その地位を狙ふたもの、其他各種の關係に於て氏の反對の側に立つたものなどが、誤解したり揑造したり早合點したりして、いろ〳〵と中傷の說を爲すけれども、氏は之に對して寸分も辯明や反駁などを口にしない。平然として自己の行くべき天下の大道を進むの慨がある。蓋しその氣量の大きいことは天下無類と云はねばならぬ。著者は他日筆硯を呵して、其人と其事業を研究し度いと念ふて居るものであるが、今氏が政界大任の門出でに於いて之を爲すことは、少しく早計であると信ずるに故に、差當つて氏の人物觀に就ては、平生親炙する先輩同志の諸君より聽いて之を傳へることが、最も意義あり興味あることゝ信じ、左にそれら諸氏の談片を摘錄することゝする。

中島總裁を推す

前總裁代行委員　前田米藏氏

中島君の人格識見並に時局認識の點に於て、政友會の如き責任ある大政黨の總裁として、最も適任者と考へ、心から同

君を推擧する次第である。

中島氏は正しき政友會の第八代總裁

前總裁代行委員　島　田　俊　雄　氏

中島君は、吾々累次の言明に於て瞭かなる如く、合法的黨大會に於て絶對多數を以て選擧せられたる、正しき政友會第八代の總裁である。何人が如何に曲歪しても此事實は確乎不動である。吾々は紛々たる雜言に耳を藉すの要はない。須らくこの人格高調、識見高邁なる總裁を援けて、興亞聖業に邁進する大日本帝國國旗の下に、必死の努力を爲し、倒れて後止むの覺悟が無ければならぬ。

貴族院議員水野錬太郎氏　君は古い型の政黨人でなく、あくまで國家見地に立てもの言ひ、これを行ふといふ人と見受ける。君が國政研究會といふものを作つてゐると聞いて行つて見たが、研究室には新刊の外國の書物や雜誌類がよく集めてあり、若い熱心な學者や專門家も多數ゐるし、毎週一回づゝ新刊書の研究發表があると云ふので、餘暇には必ず傍聽に行くことにして居る。それで其場限りの政治談や當座の經濟論でなく、根本に觸れて研究せんとする君の態度を眼のあたり見て敬服した（中略）君は謙遜家で自己宣傳などは毛頭しないから、世間には餘り知られてゐないけれども、そんなことは少しも君を輕重する理由にはならない。君が黨内に勢力を得たのは金力の爲めであると評する人があるが、決して夫ればかりではないと思ふ。君は誠意の人であり肚の人である。これが君の黨内に衆望を得た所以ではないだらうかと私は堅く思ふ。

貴族院議員小久保喜七氏　自分の親友故武藤金吉君が、原總裁の亡くなられた頃からと思ふ、何かの話が出ると、よく自分に聞かした話は、俺の後繼には偉いのが居るぞ、今は飛行機の方をやつて居るけれど……中島知久平

と云ふ男だ。俺より年は若いが、君と俺と二人合せた位偉い男だ。今は政界へ出ると云ふ氣持はないけれど、どうしても俺が出すつもりだ、と云ふて居た（中略）

とかく實業家などはすべて易きに就く途を求めるものだ。政界に出る場合でも、成るべく樂な機會を待つ傾きがある。然るに昭和五年二月の選擧は、濱口内閣の解散に依つて行はれたもので、政友會を叩き潰そうと待ち構へて居る内閣の下で、野黨として極めて不利な選擧であつた。普通の人なら同じ政界へ出るにしても、次の機會を待つだらう、中島君はこゝでやるなら偉いものだとひそかに思つた（中略）

政黨生活では、金持は莫大な犧牲を拂ふのが普通である。中島君は其覺悟と用意を以つて出て來たので、その犧牲を拂つたことは多大なものである。しかも兎角人間は、三つの犧牲を拂へば十も拂つたやうなことを云ひ、大きな顔をしたがるものだが、この人にはそれが全く見られない（中略）

五・一五事件から吾黨は非常な悲運に見舞はれ苦境に立つに至つた。こんな時には實業家から政治家になつた人達は、スグへこたれて、政黨への熱心が薄らぎ遁出したがるものだ。然るに中島君は却つて倍々力を入れて黨の爲に犧牲を拂ひ熱心に政界に鞅掌して居る（中略）幹部會などに來ても、寒暑を厭はず緊張し、多くの人々が行儀の悪い格好をして居る中でも、同君は始終一貫、身體も動かさず、端然として他人の發言を謹聽する態度である（中略）

廣田内閣の時に同氏へ入閣の交渉があつたが、いろ〳〵な黨の事情で入閣しないことになつても、平然として怨言一つ言はず、それから近衞内閣に及んで遂に鐵道大臣に就任した。自分の觀察に依ると、大抵の人間がおかしいようだが、大臣になり閣下と呼ばれると、歩るき方、物の言ひ振り迄ちがつて來る。こちらから見ると子供のやうな男が大臣になるとこつちに對する調子が偉さうに變つて來る。さう構へて見たいらしい。

ところが中島總裁はかゝる場合、友人や先輩に對して倍々謙虚の態度を失はず、しかも極めて自然に現はれてくるから

うれしい事だ（中略）中島總裁の外交に關する抱負と云ふか經綸と云ふか、それにはなか〳〵公正剛壯なものがある（中略）尙國體明徵論に至つては、流石に新田義貞、高山彦九郎を出した上毛の地に生れたゞけあつて、一種熱烈なものがある。

海軍中將古市龍雄氏

同氏は機關學校時代から、中島總裁と同級の親友で、在學中も一つの家を借りて相住居して勉强した仲である。氏の曰く

同君は海軍機關學校へ入學せられた時は、確か二十數番位であつたが、何分にも千名に近い志願者中から、僅か四十名の採用人員であつたにも拘らず、同君が中學も卒へず、獨力で勉强されて其入學試驗に見事及第されたと云ふことは、同君の少年時代の非凡なことを物語る一端かと思ふ（中略）斯くして愈々卒業の時には、三番と云ふ優秀な成績で、恩賜の銀時計を頂戴せられた譯である。同君が學校卒業後、少尉か少尉候補生の時に、高山樗牛の書を愛讀し、殊に『吾人は須らく現代に超越せざるべからず』と云ふ言葉に感激して、それからと云ふものは、同君の思想や性格の上にも變化を來し一段と向上せられたやうに思ふ。

中島君は早くから飛行機の智識を涵養して居られ、飛行機を研究しなければ戰爭に負ける、大なる戰鬪艦でも飛行機をもつて行つて攻擊すれば、直ちに沈沒させて仕舞ふことが出來る、飛行機は將來に於て必ず發達すべきものだと云ふことを、今から三十年も前に强く主張して居られた。其先見の明に敬服せざるを得ない（中略）

斯の如く若い時分から中島君は飛行機萬能論者で、私は電氣萬能論を唱へて居たが、大正の初年頃のことであつたか、私がアメリカのボストンに駐在して居つた時、同君がボストンへ來て、自分はロスアンゼルスのカーチス飛行場へ入つて練習機で飛行機の練習を行つて居たが、其練習機ではたゞ眞直ぐに飛ぶだけで、廻轉（宙返り）してはいけないと云ふ規則になつて居るのに、廻轉を試みた爲に、百尺位の高さから墜ちてしまつた。幸に怪我はしなかつたが、その爲に敎官の怒りを買つて、到頭退場させられてしまつたと語られた。後で聞くと、カーチス飛行場に居た外國人達は、同君のこの大膽なやり方に驚いて居つたそうである（中略）

中島君は人間的には上州魂を有ち、義俠心に富むだ男で、困つて居る人を隨分澤山救つて居るが、それを少しも廣告しない。又飛行機の方でやつて來た仕事に就ても、自ら何一つ宣傳したことが無い（中略）鐵道大臣の榮職に在り、現に政友會總裁の如き繁忙なる身柄でありながら、時々級友會に出席せられ、昔のまゝの友達氣分で談笑せられて、何等驕らず氣取つたりする風が微塵も無い。その氣宇の大きいのには級友共みな感服して居る。

貴族院議員宮田光雄氏

中島總裁に就ては世上いろ〳〵な批評があるけれども、眞實なる『中島總裁の姿については少しも認識せられて居ない恨みがある。よく諺に『大賢は愚なるに似たり』と云ふが、中島總裁がそれであるか。氏は一見茫洋として居るが、その內實には凜乎たる强靱な決意がひそんでゐる。又前途の見透し（達觀）についても的確であり、抱負識見の上から言つても、規模極めて廣大、宛として故人後藤新平伯の面影がある。この大膽にして細心、鞏固なる意志と信念の持主たるに加へて、明朗なる淨財に依る資金網と、大局に對する非凡の見識と、國家奉仕の觀念に於ても拔群である。吾々はこの中島氏を總裁に推戴する以外、現下の政友會を革新し、これを據點として國內を革正し、東亞新秩序の建設を全うし得る人物は、政界廣しと雖も、他に見出し得ないと信ずるものである。

衆議院議員堀切善兵衛氏

中島總裁は個人として洵に人情に厚く名利に淡く、所謂嫌味のない人であつて、同君の在る處必ず周圍を春風化するの觀がある。而もその雄大なる氣魄と剛快なる男らしさは、大陸政策に關しても紛々たる小議に超越するの慨あり、曾て先年支那の抗日問題がやかましくなつた時、國際正義がどうの、內政干涉がどうの、外交關係は云々と、自由主義で歐米追隨の思想に囚はれた人々が議論して居る際に、中島君は、我國は此際一切の小理屈を踏み潰し、綱維策を排して、斷乎大陸進出に邁進せざるべからずとの見解を持して居られたのに、私は深く共鳴し

たのであつた。

君は實業に於て大成功し、財力を有つて居られるから、故ら之を曲解して惡用するかの如く言ひ觸らす向きもあるやに聞くが、その虛僞たることは言ふを俟たない。君は財力なく赤手空拳を以てしても、その眞骨頂を發揮し得る男である。斯の如き人物を吾黨總裁に得たことは、誠に賴母しいこと丶言はねばならぬ。

それから氏は頗る人情に厚く、人をして感激せしめるものがある。曾て私が重病の爲入院した時、三度まで見舞に來られて恐縮したことがある。氏は又頗る平民的の人で、曾て私が子供と其嫁を伴ふて、帝國ホテルのグリルに食事をしに行つたら、中島君は自分の運轉手と相向ひで食事をして居られた。こんなことは偉い人のなか〳〵せぬことである。君の日常生活はシンプリシテーそのもので、丁度聞き及ぶヒツトラーの簡易生活そのまゝである。

衆議院議員故東武氏　吾々は中島新總裁を迎へることになつて、まことに愉快に堪へない。吾々は死を賭しても此總裁を擁護し、東亞新秩序の建設の爲に協力しやうと、小久保城南君と約束して居る譯である。政黨員の最も銘記しなければならぬことは、責任感と服從の美德で、多數の意見は之を尊重し、潔よく之に服從することが、政黨員の道德でなければならぬ。之を忘れて自分一個の野心の爲に衆議を紊り、又は少數で多數を壓服しやうと企てるならば、何に依つて政黨の統制を保ち、秩序ある進退をすることが出來るか。今日は辛うじて法網を免れて耻なしと雖も、天下の輿論が之を指彈して許さゞるが如き人物を總裁にして、ふざけた政治をする時とは違ふ。吾々は愛國の至誠に燃ゆる中島總裁を推戴して、一致結束、滅私奉公の誠を捧げて東亞新秩序の完成に向つて一路邁進しなければならぬのである。

衆議院議員熊谷直太氏　吾々は始めから吾黨の次の總裁は中島氏であるときめて居つた。その時局に對する達見は、稀に幹部會その他で閃きを見る位であつたが、十年も經過する內には、自らその人の眞價は顯はるゝものである。不淨の金を掻き集めて乾兒を養成したり、無理押しに黨機關の獨占を企てたりして居つても、そんなことは永く續くものでない。惡い玉は電氣をかけて反射する時だけより光らないが、夜光の珠は暗中にでも輝く、柳は綠、花は紅で、永い間には自然と物の眞相が現はれて、遂に中島氏が總裁になられたのである。吾々は中島氏を以て、今日の政友會が物色し得る唯一の好適なる總裁として、その統率の下に更生の途を歩み、國家に御奉公をし度いと思ふのである。

衆議院議員木下成太郎氏　皇國に課せられたる大なる天の使命を解せずして、今尙ほ自由主義だの歐米と協調第一だのと、バター臭いことを言つて藻掻いて居る連中こそ、眞に憐むべき時代錯誤の落武者である。吾々が中島君を總裁に昇ぐのは、唯單に君の人格、手腕、資力などの爲のみでない。君の政治革新に對する抱負と、興亞聖業の中樞を大陸發展に求め、その爲には一身一家のことを顧みざる熱意が旺盛なる爲である。中島君はひとり政友會が要望する總裁としての第一人者であるのみならず、實に日本の將來が期待する處の最も大なる政治家の一人である。此期待が裏切られたならば、吾々は何時でも責任を執るの覺悟で、之を總裁に推したのである。

中島政友會總裁論

農學博士　東郷實

一言にして中島總裁を評するならば『從來の政治家と異り、權道を歩まず、策略を弄せず、自己を宣傳せず、時流に阿らず、そこには何等暗影の認むべきものゝない人物である』といつてよい。而して兎角成功者に有り勝ちな傲慢不遜の態度は棄にしたくも持ち合せのない謙虛そのものゝ姿、內省して到らざるを是れ懼るゝの態度こそは實に中島總裁その人の眞姿である。而も今尙ほ讀書と研究とを怠らず、事を處するや愼重、靜思以て案を樹て、同志に向つては情誼に厚くして

包容力に富み、殊に滅私奉公の至誠に至つては何人の追從も許さざるの概がある。

『大賢は大愚に似たり』ともいふが、中島總裁は元來雄辯でありながら常に默々として無駄口を利かない。故に一見茫洋としてゐるが、半面自己の信念には極めて忠實な政治家である。而も大膽にして細心、人格高潔にして識見高邁、常に世界の大勢を達觀して國家の進路を見極め、政黨の更生刷新、政治の革新强化に烈々たる熱意を有するのみならず、燃ゆるが如き熱情を傾け盡して國家奉公の誠を效さんとしつゝあるのがわれ等の總裁中島知久平氏である、

わが國では『策士卽政治家』の觀念が少くない。從つてたゞ譯もなく自動車を乘り廻して策動するのを本分と心得てゐる彼等には、殆ど靜思の時がない。わが國に創造的政治や雄大なる國策の生れ出でないのも所詮はそこに病根がある。

釋迦は菩提樹下多年の靜思に由て始めて『無上道』を完成し、基督は炎熱灼くが如き沙漠中に冥想四旬の長きに及んで始めて或る物を會得し、更にマホメツトはヒラ山上に沈思久しきに亘つて始めて幻影を見ることが出來た。斯くて世界の三大宗敎は何れも靜思默想に由つて始めて創造せられた。更にダンテ、バンヤン、スコツト、ゲーテ、ヘーゲルその他多くの文豪哲人もその大創作には例外なく靜思と默想とを要した。斯の如く宗敎藝術共にこれが創造には常に寂靜を必要とする。況んや偉大なる政治の創造に靜思默想の必要なる敢て多言を要しない。

實行に先立つて靜思し、活動に先んじて默想せよ！　これが今日の重大なる世界の變局に對處して誤りなきを期し、更に雄大なる創造的强力政治を確立する所以である。而もこの點に於て最も缺けてゐるのがわが國の現代政治家である。然るに中島總裁は十數年來午前中は力めて讀書と靜思とに時を費すことにしてゐるといふのだから政治家としては實に珍らしい存在だ。

日比谷の市政會館の二階に『國政研究會』が出來てからもう十年にもならう。そこには多數の學者、專門家、實際家が集り、廣く內外の資料を集め、政治經濟その他國政各般に亘り熱心に研究調査を續け、時々讀書會をも開いてゐる。然るにこの調査機關が一體誰の所有物であり、またその仕事の內容が如何に貴重なものであるかに就ては殆んど世間に知られてゐない。

私生活の贅澤には惜氣もなく數十萬金を投じ、或はまた自己野心の爲には金力を以て政界を毒するも敢て辭せない手合の少くない今の世に、たゞ默々として斯る地味な調査機關に莫大な金を投じ國運の進展に寄與し乍ら、自ら誇らず、何等宣傳することなく、一面極めて簡素な私生活に甘んじてゐる人のあるのは、不思議なことだ。而もその不思議な存在の主人公がわが中島總裁であるところに彼の政治家としての眞骨頂を發見するではないか。

以上の事實に徵しても、中島氏は自ら讀み、且つ學者に聽き、更に靜思默想以て政治の創造に努力せんとする革新的な政治家であることがわかる。從つてその言ふところも世の政黨總裁とは大に趣を異にしてゐる。卽ち去る六月二十一日の議員總會に於て試みた『吾が黨革新政策の大綱』と題する演說の原稿は總裁自ら筆を執つたものであり、更に更生政友會の總裁としての第一聲でもあつたが、その內容は頗ぶる科學的であり、哲學的であり、且つ總裁獨特の人世觀、世界觀に出發した堅き信念に燃ゆるところの堂々たる國策の主張であり、政策の强調であり、更に傾聽すべき大雄辯でもあつた。而して中島總裁はこの主張に基き速に更生革新の政策を樹立し、國論を指導して廣く全國の靑壯年層に呼びかけ、純眞にして熱情に燃ゆる若き大衆と共に相携へて盛んに經機を行ふの實力と氣魄とを養ひ、以て日本民族に課せられた歷史的大使命達成の大任を完うせんとする熱意を示してゐるが、そこにも革新政治家としての面目躍如たるものがある。

中島總裁は人生の苦勞を充分に體驗して來た人であるのみならず、幼にしては農學校に學び、後長じて海軍に入り機關大尉に進み、更に退いては深く國家の將來を慮つて飛行機製作に從事する等、その學ぶところ、從ふところの多くは、常に科學を基礎とし、技術を土臺としたものである。而してそこに圓熟した『人間中島』の完成があり、更に大政治家としての將來性を多分に包藏する所以でもある。殊に科學の進步は世界の凡てを支配せんとしつゝある實狀に鑑み、更に古今

を通じて眞の大政治家は寧ろ法科以外の出身者に多きことを思ふとき、わが中島總裁こそは、實に現代日本の欲求と完全に一致するではないか。

衆議院議員久山知之氏

今日はあらゆるものが革新を要求する時代である、獨り政黨のみが例外であり得る道理がない。之を悟らずして徒らに正統だの傳統だのと、古い陋見に執着して、無理無體に自己に金箔を附け、鬼面人を脅かす舊式の謀略を事として居るのは、時代の急潮に押流されて軈て消え行く人々であつて、氣の毒と申すの外はない。吾々が革新を叫ぶのは、斯の如き分子を飾ひ落さんが爲であつて、之を以て單なる總裁爭ひなりと爲すが如きは時代轉換の胎動が、此爭ひを假りて其一端を現はしたるものなることを知らぬ者である。吾々は積年の黨弊を一掃するには、先づ黨の革命を斷行するの外無しと信ずるが故に、泣いて馬稷を斬るの決意を以て此擧に出たのである。幸に志を同うする百數十名の同志の一致共力に依て、吾黨の大勢を制し、正しき方法に依つて大會を開き、革新の意氣に燃ゆる大人格中島總裁を推戴することを得たのは、眞に欣快に堪へないところである。吾々同志は毀譽褒貶を度外に置き、天の使命に向て勇往邁進するものである。正しき吾等の進軍に對しては、必ずや大勢が之に照應し、天業恢弘の吾が帝國の雄圖を成就せしむるに相違ないと確信するのである。

以上の諸家の中島觀でいろ〳〵興味あり有益なるものがあるけれども、紙面の都合で之を後日に割愛し、最後に久しく中島氏の秘書をして居り、今度佐藤洋之助氏と代つたが、尙常に側近に在り、中島氏の公私に就て深く知つて居る代議士篠原義政氏の談をかゝげて本篇の結びとする。

衆議院議員篠原義政氏

世間の人は多く齷齪と毎日忙しい生活を送つて居る。代議士など殊に忙しくて忙しくて堪らぬ人が多い。獨り先生は居常悠然として居て、何人もまだ曾て先生が狼狽へたり、いら〳〵したりするのを見たことがない。どうしてさう落付いて居られるんですかと訊くと『たゞ無見當に眼先のことに囚はれるから忙しいんだよ、一生の間に何を爲すかと云ふ豫定表を作つて見給へ、四十までに何をどこまでする、五十までに何を、六十までに何七十までに何と、豫定表を作つてやつて行くと、仕事の方が早く出來過ぎて、歳月が剩まつてしまふ。だから成丈けゆつくり、落付いて、時間をかけてやつて行くのだよ』と言はれた。

金と云ふものは中々手に入らぬもので、困つたもんだと云ふ話をして居るのを耳に挾んだ先生『人と云ふものは意地の惡いものでね、欲しいと云ふとやらぬと云ふ、いらぬ云ふと上げると云ふ。私は子供の時分、小遣を貰ふても、別に何も買ひ度いものがないから、遣はずに置くとだん〳〵溜つて、三十圓五十圓になる。するとあの子は無駄遣ひせぬからやらふと言つて又呉れる。とう〳〵百圓にもなつたことがある。又海軍士官の時も、給料を貰つても大して遣ふ途がないから二ケ月三ケ月經つ中にだん〳〵貯つて、邪魔になつて厄介なことがあつた。飛行機製作を始めてからも、俺の方の金をなぜ使はぬかと撚ぢ込まれて、要りもしない金を義理で借りて利息を拂つたことがある。金を欲しがらぬ人間になると、嫌でも金は集まつて來るものだ』と言はれたことがある。

先生は非常に孝心の深い人で、御母堂は今日尙健在であられるが、嚴父は數年前惜しくも亡くなられた。當時尾島の本邸は、新築の工成つたばかりであつたので、葬儀係の人々は、庭前に靈柩を安置して、多數弔問客の燒香を受ける用意をして居つた。然るに先生は之を見て、直にこの設備を變更させ、新裝成つたばかりの客間に靈柩を安置し、何千何萬と云ふ弔客を、靴下駄のまゝで座敷へ招じ入れ、鄭重に弔問を受けられ、建物の汚損の如きは、毫も意に介しない許りか、柱や欄間など、葬儀の邪魔になるものは、皆取拂へと嚴重に申渡された。恐らく先生の胸中では、あの立派な建物は御兩親の爲に造つたものであるから、嚴父のみ魂を御送り申せば、卽日打壞しても差支ないとの氣持であつたらう。

平素宴會などには餘り出度くない先生だが、友人知己やその家族に不幸があると、よく〳〵都合の惡い時でなければ、自ら其家を訪問して、心から弔意を表し、遺族のことなど何角と心配せられるのである。

先生は常に云ふ。私の利害を打算して居つては、ほんとうの事業は出來ぬ。日本の國家は、今日生産擴充の必要に迫られ居る。事業家は全力を擧げて生産擴充國策に奉公すべきだ。國家の爲に大生産擴充をして御役に立ち、それで國家民族の大發展が遂げられるならば、私人などは破産しやうと毫も恨むところはないと。

又云ふ、世間の人は金を持つて居ると偉いと思ひ、其人をでも其國をでも、不當に高く評價する傾きがあるが、それは間違ひだ。今日の日本人が英米等を兎角重く見過ぎるのも其爲めだ。しかし金錢は紙切れに過ぎぬ。こんなものがいくらあつても何もなるものではない。大切なのは紙切れでなくて人間の勤勉と努力だ。現に歐洲では勤勉と努力の獨伊が、金の英佛を堂々押切つて居るではないか。日本の周圍を見よ、內地、朝鮮、臺灣、南洋諸島、滿蒙、支那に亘り、豐富なる天然資源は、吾が日本民族の勤勉と努力とを待ち設けて居る。若し爲政家が從來國民の間に浸潤せる誤れる富偏重（資本主義思想）の觀念を是正し、國民の勤勞に重點を置き、之を助長奬勵するの策に出でるならば、吾國の前途は洋々たるものがあると。

先生が鐵道大臣になられた時、群馬縣から始めて大臣を出したと云ふので、到る處で祝賀會が計畫せられ、先生の歸國を促して來たが、先生は一切の計畫の中止を希望して『國務大臣になることは、重大な責任の地位に就いたので、祝賀を受ける性質のものでない。將來自分が働いて手柄を立てた時は、祝賀していたゞくもよかろふ』と云ひ遂に歸鄕を肯んぜられなかつた。

自ら顧みで直からば千萬人と雖吾行かん、とは先生の覺悟だ。余は曾て余の政治行動に付き、僅かばかりの權道を執らんとしたことがあつたが、それが圖らずも先生の知る處となつた。何時も溫顏默々として居る先生が、其時は嚴然として『權道を執るやうな弱いことでは政治は出來ぬ、正を踏んで進めば何物も恐るゝことはない』と誡められた。余は冷汗背を潤ほすを覺えて、この訓戒を終生忘れまじと決意した。

昭和十四年九月十九日印刷　『更生政友會の展望』
昭和十四年九月廿三日發行　非賣品

著者　水島彥一郎　目黑區下目黑三丁目五百五十七番地
發行者　水島彥一郎　目黑區下目黑三丁目五百五十七番地
印刷者　濱野英太郎　麴町區平河町一ノ五
印刷所　濱野印刷所　麴町區平河町一ノ五
發行所　猶興書院　東京市目黑區下目黑三丁目五百五十七番地

不許複製

399
68

終